第二編　中世

第一章　鎌倉時代

鎌倉時代とは文治元年（一一八五）平氏が滅亡し、源頼朝が勅許を得て全国に守護、地頭を設置し、更に建久二年（一一九二）頼朝が征夷大将軍に任命されて名実共に鎌倉幕府を開いてから元弘三年（一三三三）同幕府が滅亡するまで約百五十年間をいう。

頼朝の死後、北条氏の陰謀、勢力進出に伴い、源氏の正統は三代で絶えた。北条氏は執権として幕政の実権を握り、後「承久の変」で院方の軍を破ってから、更に権限を拡大して支配権を東国から全国に及ぼしていった。

執権北条時宗の時代には蒙古の使者が来て「文永の役」が起こり、更にまた「弘安の役」があった。

しかし何れも暴風が幸いして首尾よく元軍を撃退することができた。しかし元寇の後、幕府の政治、財政は乱れ、反対勢力も増大し、やがて「正中の変」が起こり、更に「元弘の乱」が起こって、ついには北条氏の独裁政権化していた鎌倉幕府は滅亡するに至った。

第一節　鎌倉時代頃の大隅町

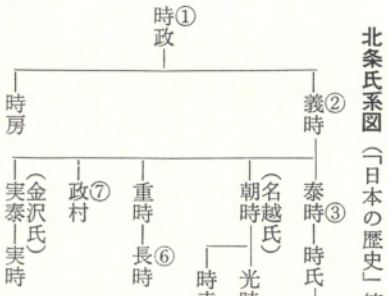
大隅町の旧岩川町は大隅国にあり、建久九年、大隅国図田帳によれば島津庄に属して

深川院（現在の末吉町並岩川町）一五〇町歩余
財部院（財部町）一〇〇町歩余
多禰島　五〇〇町歩

以上の三ケ所は保延年中（一一三六―一一四〇）以後の新立庄で国務に随わずとするから保延以前のことははっきりしない。

なお、建治年間の石築地配符案では領家は近衛家、地頭は名越尾張入道とある。名越氏は北条氏であり、そうなると我が深川院は鎌倉時代の後半は北条氏の支配下におかれていたことが明らかである。

北条氏系図（「日本の歴史」第7巻）



執権泰時の死をめぐる後継者争いの中で、まず北条氏一族内の有力者で泰時のすぐ下の弟名越朝時が泰時の死の前に出家した。そのことは名越氏一族の動向に疑いをもたせた。そして経時、時頼が相次いで執権の座についた。その間りっぱな青年となっていた将軍頼経をおしたてて幕府の実権を奪おうとしたが、北条時頼は光時らの名越氏一族らの重臣の陰謀をうちやぶり光時を出家させて伊豆に流し、その弟の時幸を自殺させたほか、関係者多数を処分した。

さてこの名越氏と当地の肝付氏一族の大隅地方の土地をめぐる対立は後述するが、いずれにしても名越氏の勢力が大隅地方にのびて来た事は事実であろう。

深川院は現在の末吉町（南之郷を除く）から元岩川町の区域であり、したがって南北朝時代貞治二年、岩河村として独立して出てくるまでは岩川町は深川院内に含まれていたのであろう。

旧恒吉村は大隅国小河院に属していた。小川院については建久八年「大隅国図田帳」によると、

小川院　三百四十八丁三段大
　正宮領二百七十四丁八段　本家八幡地頭掃部頭
　　御供田十五丁六段六十歩
　　寺田三十二丁六段
　　小神田五丁三段六十歩
　　国方所当弁田　万徳百六十丁三段丁別十疋
　　恒見三丁九段丁別十九疋三大
　　公田五十七丁　万徳九丁二　甲富四十五丁
　　郡司酒井宗方所知
　国領
　　公田八丁五段半　廻村弟子丸五丁三段大
　　田所建部宗房所知
　　武元二丁　執行建部清俊所知

元行一丁二段三百歩　権大掾建部近信所知
寺田一丁　九段　仏性灯油料
経講浮免田二十八丁四段大
島津庄寄郡
小川院内百引村十三丁四文
（安元元年十二月勾当僧安兼が同村弁済使職に補され
た　都城　富山文書）
島津御庄
永利二十五丁七段三大　殿下御領

結局小川院は国分八幡領、国領、島津本庄、島津庄寄郡とに分れていたようである。

なお正宮領地頭掃部頭とあるのは大友氏祖中原親能のことである。これらの所領はそれぞれ鎌倉御家人が支配している。当国御家人交名によると中原親房、田所宗房、酒井宗方、執行清俊等の名が見える。

小河院は現在の国分、敷根、福山、恒吉、百引等を含むが前記の中でいずれが恒吉を表すものか不明である。

想像をたくましくすれば国分八幡系投谷八幡が恒吉にあることからして正宮領に含まれていたのではなかろうか。

次の大隅国郡郷図は鹿大五味教授の研究発表の中から引用したものである。

大隅国郡郷院図

①曽野郡　②小河院　③桑東郷　④桑西郷　⑤帖佐郷
⑤筒羽野　⑥蒲生院　⑦吉田院　⑧加治木郷
⑨祢寝院北俣　⑨祢寝院南俣　⑩栗野院　⑪鹿屋院
⑫姶良庄　⑬深川院　⑭財部院　⑮多祢島　⑯横川院
⑰菱刈郡　⑱串良院　⑲肝付郡　⑳下大隅郡

日向国の大隅町附近はほとんど島津庄に属していた。

本庄
北郷（庄内、西岳、山田）三〇〇町　地頭忠久
中郷（五十市）一八〇町　〃
南郷（中郷、末吉）二〇〇町　〃
救仁郷（大崎、野方）一六〇町　〃
財部郷（財部、横市、西岳）一五〇町　〃
三俣院（三股、山之口、高城）七〇〇町　〃
島津院（郡元、川東、都城）三〇〇町　〃
吉田庄（真幸村西南部）三〇町　〃
寄郡
飫肥北郷　四〇〇町　〃
〃　南郷　一一〇町　〃
櫛間院　三〇〇町　〃
救仁院（志布志、月野）九〇町　〃
真幸院　三二〇町　〃

旧月野村は日向国島津庄寄郡救仁院九〇町の中に含まれ島津忠久の支配下におかれた。
旧野方村荒谷地区は日向国島津庄本庄救仁郷の中に属し島津忠久の支配下におかれた。

第二節　惟宗忠久の島津庄入国

惟宗忠久の生い立ちについては諸説がある。五味教授所有の立教大学史学会発行「史苑」第十二巻第四号所載朝河貫一氏の研究「島津忠久の生い立ち」によると源頼朝庶長子説は帰化人系といわれている惟宗氏として殊に元寇以来都合が悪くなって来たのか、忠久から三、四代後に出て来たといわれている。

惟宗氏は八八三年賜姓の時に秦始皇の裔が二八三年、百二十七県の民を率いて帰化したもののあとだといったといわれる。

結局忠久は惟宗氏に間違いないといわれる。惟宗氏は官仕して明法家、大宰府官人、諸国職など多く、此氏は九州には多く（下級貴族）殊に三州では執印氏、市来氏、国分氏等その一族のようである。

（藤原道長時代も惟宗氏は明法博士として活躍し名をなしている。続本朝往生伝によると一条天皇朝の人材輩出時の人材の中に明法（法律学者）の中に惟宗充亮（ただすけ）、惟宗充正（ただまさ）の名がある。）

惟宗孝言は日向国博士、その子基言は日向国司（大治三年正月二十四日日向守任）また、その子広言は日向介であった。孝言、基言は学者で近衛関白等の師であったらしい。

それで帰化人といっても我が国平安朝時代まではむしろ大きな権威と力を持っていた。なお忠久の父母についてははっきりした確証がない。

生まれたのは一一六五年よりやや前であろう。純粋の京育ちで若い時から藤原氏殊に近衛家の家人であって、その恩顧によって左衛門尉となり、検非違使となり、一時は賀茂祭主を勤め、あるいは播磨掾となった時もあるといわれている。

また近衛家を仰ぐことから島津庄において重要な庄官職をあてがわれ、その他にも同家及び他の高家から他の庄官職を得たのであろう。一一八〇年ごろまで在京し、それからある年ある有力な所縁によって頼朝の御家人となった。有力な所縁とは関白近衛基通の紹介によって鎌倉に仕えたのであろう。

伝説によると頼朝に見参したのは一一八五年であるとすれば忠久が二十歳をこえたころのことであろう。頼朝に仕えてからその重臣比企能員の女子または実妹と婚したのではなかろうか。近衛基通、比企氏の由縁等によって頼朝に異常に重く用いられ（頼朝私生児説が出てくるくらい）一一九七年「建久図田帳」には島津庄内最大の地頭とされているからそれ以前から既に地頭とされていたであろう。

「東鑑」により推察されているのは一二〇三年以前に三国の守護とされた。鎌倉御家人となってもなお京都との関係はあったらしく一一九八年初め、左衛門尉となっている。

数代は惟宗姓を保ったが父は惟宗広言という説が安国寺日記などから比較的有力である。

なお丹後内侍が忠久の母で、忠久が畠山重忠の娘の婿であることは極めて可証性の劣った伝説らしい。殊に幕末に起こったところの以仁王落胤説や前述の忠久後、数代後に起こった頼朝私生児説は全く可証性のない伝説と見られている。

結局各名家は自家の尊厳化、威厳のため、殊更に何々落胤説など称えられたがその一例であろう。

さて建久七年（一一九六）八月二十三日惟宗忠久は薩州山門院に来て翌年島津庄政所に着任した。彼は政所に近い早水神社の東に居館を営み、祝吉御所と称した。

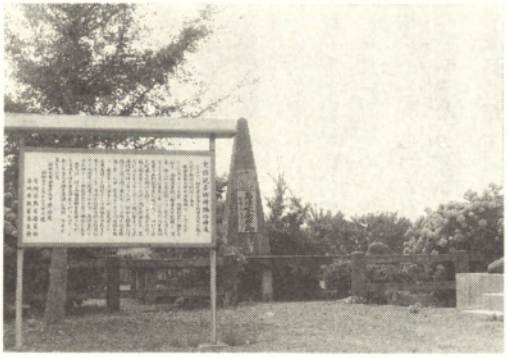
なお祝吉御所の前に安久に堀之内御所も営んで別館とした。そして島津庄領家すじの庄官富山氏と平季基系統の庄官肝付姓梅北氏と連絡した。惟宗広言（忠久の父といわれている）は日向介として島津の地に館を設けて島津殿と呼ばれていたとのことである。「日本人名辞典」の中には惟宗広言を島津初代と書いてあるのがある。それで島津に来て祝吉御所や島津稲荷を建てたのは広言ではないかとの説さえある。

島津駅以来の島津の地に発祥した大島津庄の総地頭となった惟宗忠久は島津の地名を以て姓として島津忠久と称した。

島津に来てから稲荷神社を島津に建立し、それは島津稲荷と称せられた。建久八年九月七日柱立建立説がある。

忠久は一、二年後（二、三年説もある）には鎌倉に帰任した。殊に比企氏の乱に連坐し三州守護職を一時失ったりしている。

「島津稲荷由緒記」によると惟宗広言は八文字民部大輔といい、島津に居住していたので島津民部大輔殿とか八文字殿ともいわれており、土佐国に移って行ったとある。その後に惟宗忠久が島津に来て島津判官忠久と称されるようになったのであろう。忠久の居館祝吉御所の東門、西門の跡は最近まで御門の跡として残っており、小石の石塚となっていた。最近土地区画整理のため取りこわされたが御所跡記念地二反歩がのこされ、都城市では御所跡に島津家発祥之記念碑が建立されている。



島津家発祥記念碑（都城市）

第三節　領家と地頭

この時代の地頭は幕府が任命した。庄園に対する武家支配の始まりで庄園の領家と武家の二元支配が始まったのである。

守護は各国の検察官であって任務がちがうのである。忠久は島津庄の地頭と三州の守護を兼ねていたのでその権力は大であった。

忠久が地頭に任命されたころ島津庄は乱れていたので領家の近衛家からこれが鎮圧を幕府に請求した。そこで頼朝は島津庄に令書を下したが、その中で「幕府が忠久を地頭に補佐し殿下（近衛家）が相替らしめ給うたから領家の定はない」と述べている。

それによれば領家は既になくなったように思われるが、実際はそうではなかった。

地頭は幕府が任命した役人で近衛家の荘園の仕事をしていたのである。

そこで建仁二年（一二〇三）に国府の正八幡宮の神官等が庄民を奉仕せしめようとしたとき荘官等は領家に陳情し関白近衛基通は承元元年（一二〇七）と建暦年間の二回「奉仕するな」という命令を下している。結局、島津庄民は神柱神社だけに奉仕したわけである。

更にまた建武四年（一三三七）五月領家堀川関白経忠は尊氏から島津庄を奪われたことを憤り、南朝に走って正平七年八月（一三五二）死んだので終に島津庄は消滅した。

領家は頼通から十三代を重ね万寿三年、創始以来三百二十七年であった。

このように尊氏に奪われるまで島津庄は近衛家の領であったのであるから地頭忠久も庄に勤める役人としては領家に従属していたことがうかがわれる。

鎌倉時代の主政所には地頭として忠久が一、二年短期間来ただけでその後だれも来なかったのでその機構もなんらの変化なく富山氏、梅北氏等の合議制で運営し、ただ命を領家と地頭とに受けていたであろう。

深川院等三ヶ所の地頭名越尾張入道は当地に来任したのか確証がない。地頭職に任ぜられたということは名越氏の場合ははっきりしている。すなわち図田帳に記載されているからである。

さて正応年間正八幡事件の言上に「荘官等」と複数を

用いている。正八幡事件とは鹿屋家文書に伝わった島津庄関係の有名なもので前述のような国府八幡と島津庄との問題である。

庄政所の庄官等は正八幡の支配には服さなかったわけである。

第四節　島津忠久入国と三州諸族

日向国諸県郡救仁院は平氏の一族（肝付一族の説もある）救仁院平八成直の所領であった。

源頼朝は改易を断行し、救仁院氏の所領救仁院の内松山を割いて前述のように平重頼に与え他の救仁院全部（槻野村を含む）惟宗忠久に与えたのであろう。

（註＝頼朝は曽つて池禅尼の情によって僅かに死罪を免れて、命を助けられた。その池禅尼の御恩に報いようとしてその一族池大納言の孫の平重頼を赦免し、且つ之に松山一所の地を与えたのであろう。）

この救仁院は従来伴姓肝付氏の所領であった。肝付配下の救仁院平八成直がこれを管理していた。成直は肝付兼俊の二男兼綱の子か孫かであって、伴姓救仁郷氏と同族になっているという説もある。何かやはり肝付氏と関係はあったであろう。救仁院氏は日州救仁院安楽城主安楽平九郎為成の兄で後には弟からその所領志布志を奪い取られたこともあった。

肝付兼俊の次子兼綱は救仁郷を領したと伝えられ肝付郡地頭（弁済使）であった。

建久二年十二月十二日、惟宗忠久は肝付二代兼経の時本領救仁院を受けた。建久七年、忠久入国によって既得権益を侵害されたのは肝付氏であった。それで肝付一党の驚きは一方ならぬものがあったであろう。その既得権益を侵害されたのは独り肝付氏のみではなく三州諸族は挙げて祖先伝来の土地を奪われるという変化に見舞われたのである。

したがって衷心から忠久を歓迎するものはごく少なく大方の諸族が反忠久派であり、殊に安徳天皇を奉じていたとの伝説のある三州にはなかなか鎌倉幕府の威令は行われず、忠久にとっては三州統一は大変困難な問題であった。

第五節　平景清の墓伝説

大隅町は種々の落人伝説の多い所であるが、平景清の墓といわれるのが柳井谷にある。

（註＝戦国時代の浅井、朝倉の残党だといわれる梶ヶ野の朝倉家（八木氏）浅井部落、或は伊東、島津の木崎原合戦の折、伊東方川崎氏が土成に逃げてきたとの説など）

とにかく落人が落ちつくのにふさわしい地勢環境をなしていたためであろう。

平景清の墓について「三国名勝図会」には、

「悪七兵衛景清墓田尻村、柳井谷門の後山中に有り、伝に云、上総悪七兵衛景清、日向国宮崎より来て此所に匿居し、終にここに没す。石塔は大五輪にして又、小五輪塔十四その後に列す。同時世の者と見ゆ。左の岡上に火葬せしと言う所あり、平地一畦ばかり四周を堀の如くこしらえたり。此所の農民亀次郎なる者はその裔なりとてその家に景清の位牌系図太刀、冑等を蔵めたりしを七、八代以前位牌系図は火災にあって焼亡し、太刀は家族大崎郷士関武兵衛是を蔵め、鎧は志布志某の所に是を蔵むとなり。前代関武兵衛家の女、志布志郷士に嫁せし時携へ往きしと言う。于今二月、八月の彼岸、武兵衛等景清の墓に参詣することを怠らず、常に亀次郎を訪ねて投宿せるとぞ。

又景清護身の本尊なりとて、塔（現在墓の入口にあり）の下に阿弥陀観音二像を一宇に安置す。六月十七日を以て供養す。景清事跡の如き、実拠とすべきは見えざれども、その古墳尋常の者にもあらずとぞ。当邑の旧記に水鑑景清居士と墓面に刻むと記す。今その墓には梵字数個所々に有りて、別に文字見えず、景清が事は諸説種々ありて或は日向宮崎に来りしと言ひ、或は山之口（宮崎県北諸県郡）邑の古城にも景清遺跡の伝へあり。或は相州鎌倉に死せしと言ひ。其確説知るべからず、今邑人の伝説を挙げて此に記しぬ」

とある。

また「薩隅日地理纂考」にもほとんどこれと同じ事が書かれている。

この景清墓の南方にそう遠くない岡の上に景清鎧掛の松と言い伝える松の大木があったが、昭和二十年に枯れてしまった。

前記中の五輪塔や小五輪塔は、今もそのまま柳井谷に残っている。その五輪塔にも文字の記入はない。昭和三

十四年八月二十日筆者一行は亀次郎の子孫本村栄吉氏宅を訪れた。

その時本村氏は同家の神棚から大切な品を持って来られた。筆者は、それが「眼病祈禱の守札の版木」であることを発見したが、そのことは当時、新聞にも報道されたことであった。この札版木は相当に古いものと思われ、それには「日本一社景清生目八幡宮大権現眼病祈禱守札」と記してあった。裏面には「南無奉誦普門品経息災延命攸」とあった。眼病の神としてその名の高かった生目信仰の本尊景清の墓に、各地から目の悪い人が集まって来て詣でそのたびに墓をけずったのであろう。大分墓石がけずられていた。

しかし医学の進歩とともに次第にその信仰はおとろえていったのであろう。

なお伝説によると景清はここへ来てから光明寺を建立したと伝えられているが、その寺は後末吉郷深川に移したという。現在は明治初年の廃仏棄釈で廃寺となり、深川光明寺跡には仁王像二基がのこっている。光明寺の場所は野辺氏と特に関係深い所であり、南北朝時代恐らく野辺氏支配の頃野辺一族も光明寺を尊崇したのではなかろうか。野辺氏は一説に平家落人伝説もある。また前記名越氏代官説もあり、はっきりしないが、いずれにしても平家にゆかりがあることには間違いないようだ。

光明寺跡仁王像（末吉町）

ところでこの墓が果たして景清のものかどうかということは疑わしく恐らく全国的な景清伝説の類であろう。恐らく琵琶法師等の遍歴のままに伝播された伝説であろう。景清が両眼を抉ったという伝説から生目の信仰を生んで、そして後には生目信仰の手段として墓石までけずられることになったのであろう。

なお宮崎の生目神社や景清廟にもない鎌倉時代ごろとおもわれるこの墓は恐らく平家一族の名だたる者の墓ではなかろうか。

当岩川は当時伝説の上では平信基領となったり平氏系

の北条氏の領地になったりして充分平家の落武者の安住の地であったのであろうか。

大崎町の平家部落といわれる所の関家、有明町の持留家等皆平家の一族で岩川の故本村栄吉氏の祖先に対し絶えず供養をしていたものであろう。

平家伝説の高城町四家にも関氏がある。高城町四家は平家の落人井上、二見、長峯、黒木の四家が地名発生の由来である。この平家墓はこれらの四家に相当する、あるいはそれ以上の家柄の者かも知れない。少なくともあの古墓を見てそういう感じを受ける。

大崎町の関家に伝わる鎧は景清伝説があるけれども専門家の説によると否定的である。

持留家の鎧も景清伝説のものであるが一年一回しか箱を開けないとのことである。

なお山之口城に景清伝説があり、同城は山之口郷山之口村（大字山之口）にあった。地理纂考によると、

「名を亀鶴城ともいい城の東西に尾筋あり、東を亀の尾、西を鶴の尾と呼べり、土人相伝之悪七兵衛平景清是を築くという。以下略」

この山之口麓部落にはこの景清伝説に因んでか郷土芸能として、人形浄瑠璃がのこり「景清の一幕」をやり町文化財としている。

「三国名勝図会」によると「景清は亀ノ尾ニ居レリトゾ城北五六町許ニ、金剛山福王寺ノ遺址アリ、茅茨ノ小堂ヲ営ミ、薬師如来ノ木像ヲ安ス、是レ景清ノ女、人丸姫ノ肖像ナリトイヒ伝フ（以下略）」

この福王寺跡にも人丸姫の墓という古墓があるが、恐らく土肥家のものであろう。

第六節　日向の景清伝説

（「日向今昔物語」より）

時は寿永四年（文治元年）二月二十日、夕暮近いころ、四国屋島の浦では海に陸に源平対戦の真最中、先ほど平軍から出した扇の的を下野国の住人那須与市宗高が物の見事に射落として、源氏は箙（エビラ）をたたき平氏は鮐（フナバタ）を打ってヤンヤヤンヤと賞めそやし、おらびどよめくその興奮から未だ醒め切らぬ折柄、平家方から小舟一艘、陸

に漕ぎつけ、中から武者三人ばかり浜辺に飛び下りると見るや、源氏方を差し招いて「寄せよ、寄せよ」と戦を挑んだ。

源氏では判官義経が「若者共、かけ出でて蹴散らせよ」と下知すると、声の下から武蔵国の住人、美尾屋十郎を真先に数騎が立ち向かったが、美尾屋は馬を射倒され、徒歩となり、大刀を抜いて額にあてて飛びかかった。

景清シコロ引きの事

この時、浜辺の盾の陰から、六尺ばかりの大男、大長刀を持って走り出で、美尾屋と二、三合打ち合ったが美尾屋が叶わぬと見て逃げ出すのを逃さないと後から右手を延ばして甲の鍬(シコロ)を摑まんとして二、三度引外ずす。なお追っかけてムンヅと捉え、エイエイと引き合う力に鍬は甲の鉢付の板から引きちぎられて、美尾屋は遂に逃げうせた。

大男は左手に大長刀を持ち右手に鍬を下げ、落陽の影を満身に浴びて、あざ笑って、突っ立っていたが、やがて大音声に

「我を誰とか知るらん。今日この頃童までも噂する上総ノ悪七兵衛景清よ。我と思はん人は落ち合へや。大将軍の判官殿はいかに。三浦、佐々木は居ぬか、熊谷、平山はいずこ。打物取っては鬼神を避くるという畠山はなきか。組めや、組めや」

と叫んだが、その勇名に恐れたか一人も打って出ない。そしてこの花々しい一騎打ちに見とれていた両軍から「景清の腕の強さよ」「美尾屋の頸の強さよ」と互いに賞め合う声、喝采のどよめきは薄寒い浦風に和してしばらくは止まなかった。まことに扇の的を射落した宗高と甲の鍬を引きちぎった景清とは屋島合戦中の双璧と称すべきであろう。

その後壇ノ浦合戦でも、景清は越中次郎盛嗣を扶けて、敵の猛将後藤範綱を討ち取って武名を挙げている。一門滅亡の土壇場からどう脱出したのか、景清は京畿附近を徘徊して、ひそかに報復の機を狙っていたが、遂に断念して、建久六年三月十三日、南都東大寺の供養に参列のため、上洛していた源頼朝の営に降人として現れた。頼朝はこれを鎌倉に護送せしめ、和田義盛の許に預けたが、景清が傲岸無礼、手に負えないので八田知家の

許に預け替えられ、ここに居ること一年ばかりで遂に絶食して死んだということである。

これらのことは「平家物語」や「源平盛衰記」に記載されていることで大体において史実として信じてよいと思われる。

景清日向へ下向の事

以上の「史実」はそれとして「悪七兵衛景清」の晩年に就いて色々の伝説がある。「景清廟縁起」や宮崎地方の伝説はこの日向下りを次のように強調している。

武運つたなく降参した景清を引見した頼朝は深くその勇力を惜しみ、これを重用しようとしたが、景清は固くこれを辞し、西国に下されるよう願い出でたので頼朝もその志を奪うことが出来ないことを知ってそれを許した。

そして景清を日向勾当として日向に下し、宮崎郡北方百町、南方百町、池内百町都合三百町を領有せしめた。景清は文治二年十一月家臣大野、黒岩、高妻等の諸族を従えて日向に下り、宮崎郡下北方古城に居城することになった。

その後景清は深く神仏に帰依し、下北方名田神社、帝釈寺、岩戸寺、浮之城、正光寺等を次々に建立し、静かな余生を送るように念願したが過去に対する切ない追憶や懺悔や、現前する世情の果敢なきに絶えず煩悶し、その苦患から逃れるために、自ら両眼を抉って地上に擲った。そこが今生目神社のある地で景清と応神天皇と共に祀ったのだという。

阿古屋と人丸及び上総忠光の事

景清が京都にいたころ深く馴染んだ清水坂の美妓、阿古屋との間に出来た娘人丸がはるばる日向に下り、盲目の父を看護って、建永元年九月、二十七歳で父に先立って病歿したと伝え、そのささやかな墓石が景清廟所の一隅に立っている。

愛娘を失った景清はその後淋しい孤独の生活を続けたが霧島神社参拝を思い立ち、不自由の身を以て祈願を果たし帰途、山下で病を発し建保二年（一二一四）八月十五日六十二歳を以て歿した。

その遺骸を持ち帰って葬ったのが今、景清廟のある所だと伝えられる。

謡曲「景清」などの説く景清の日向生活は頗る陰惨なものである。

「松門ひとり閉ぢて年月を送り、みづから清光を見ざれば、時の移るをも弁えず、暗々たる庵室に徒に眠り衣、寒暖に与えざれば、膚はぎょう骨と衰えたり」

「不思議やな、これなる草の庵古りて、誰住むべくとも見えざるに声珍らかに聞ゆるは、もし乞食のありかかと軒端も遠く見えたるぞや」（謡曲景清）

これでは鬼界ケ島の俊寛にもおとらぬくらいの零落振りで、かりにも宮崎地方三百町を有する日向勾当としてはどんなものか。これは恐らく「平家物語」や「盛衰記」にある俊寛と間違えたとしか考えられない。

景清の愛人阿古屋は景清の遁走後、六波羅に引き出されて厳しくその行衛を拷問されたが、堅く口を噤んで言わなかった。しかし畠山重忠の温情に感じ、遂に白状したと戯曲では語られる。幸若の舞曲では九年間も馴染んで男児二児までもうけた仲の景清を、利慾に目がくれて訴人し両児は景清に殺され、自分は不貞女の見せしめとして引廻しの上、鴨川に沈められたという奸婦に仕立てられている。

なお謡曲や幸若の舞曲では、景清が南都大仏供養に紛れ、頼朝を討とうと計ったが失敗し、あざ丸の名刀を揮って奮闘し、雲がくれの秘術をつかって逃げ去ったことを語るが、これは明らかに実兄総五郎兵衛忠光の誤伝である。

「吾妻鏡」建久三年正月二十一日の条に、頼朝が鎌倉二階堂の永福寺造営に臨んだ時、忠光は左眼に魚鱗をはめて人相を変え、人夫の間に交って頼朝に近づいたが露見し、尺余の短刀を懐中にしていたので包みきれず白状し、和田義盛に預けられ、二月二十四日斬首されたのである。忠光が左眼に魚鱗をはめたことから、後に盲目になったという実弟景清と混同したわけである。

日向勾当の事

日向勾当のことであるが勾当とは盲人の官名である。これについては「賤者考」（本居内遠著）には

「六月十九日を店頭の涼という。積塔に式同じ。終に惣検校鳥羽の湊につくという。昔日向国に盲人の領ありて、その米山城の鳥羽に着きたりし例といえり。

俗間には景清眼をくり出して源氏の栄を見じといいしを頼朝忠に感じて日向に流して養う。是を日向勾当というなどは取るに足らず。その頃盲に勾当の称あらむや、此日向に領ありなどいうによりて附会せしなり。」といっている。

「日向高千穂植野宮八幡、鶏足寺控書」には次のように書いてある。

「当山者、日向国、肥後国豊後国以上三ヶ国盲僧之本寺にて、官職願望之盲僧は毎年六月十六日、八幡宮涼之御祭礼に参詣致し、当寺にて御綸旨を拝し奉りて、三日三夜供養等致候而官位に付申候事に御座候」

すなわち古来、日向の盲僧は相当の権力を持っていたものと思われる。これらの盲僧たちが琵琶を弾いて各地に遍歴する中に日向の景清伝説もしだいに四方に伝播されたものと考えられる。

そして先に述べた謡曲、舞曲の「景清」浄瑠璃の「嬢景清八島日記」脚本の「日向島」などで阿古屋、人丸に関する貞婦老女談、盲目勇士の末路物語、哀婉極まりない描写によって、ますます人々に親しまれるようになったものと思はれる。

宮崎市下北方の景清廟所附近に住む土持院という盲人宅に、景清遺愛の「春日野」と呼ばれる一面の琵琶が保存されていたそうである。

これが果たして景清の愛玩したものであるかは疑問であるが、一見古びた趣きがあり、その形式上からも鎌倉時代を余り下らぬものといわれている。

景清等に関する伝説の事

景清の日向伝説を疑う人は

「かの抉眼の故事を伝える生目村は近世に出来た村で、鎌倉時代には存じなかった。生目は浮免（ウキメン）の訛りであって、今浮田村がその名残りを示すものである」といっている。

また下北方の奈古八幡神社の古文書、記録類を保存しているが、その中に「海の清景」という大宮司の名前があり、清景屋敷などの文字も散見される。

それでこの清景を附会したのではないかともいわれている。

「奈古八幡神社古文書」

日向国宮崎荘笠本村大宮司職事

任二先例一可レ令レ致二其沙汰一之由、可レ被レ下二知清景一之状如件

建治二年三月一日

佐藤左衛門尉殿

しかし景清の日向下向もかなり古くから伝承されていたらしく永禄五年「伊東義祐の飫肥紀行」に「宮崎の京神武の前に平家の一門景清の墓のことあり」

「和漢三才図会」にも

宮崎……神武天皇初皇居内裏跡有宮
悪七兵衛景清之墓、水鑑景清大居士
（建保二年甲戌八月十五日）

人類社会が始まって以来有史以後といえども、記録や口碑や墓碑や系譜や位牌や過去帳などにその名を残さぬ大多数の人々はいつ、どこでその生命を終わったか、不明のまま、無限の「時」の流れと共に悉く忘却の谷底に葬られてしまうのである。

しかしながら英雄とか偉人とかあるいは薄命不遇の佳人とかに対しては、世間は敬畏、同情、好奇の心を寄せ、その生死を神秘的にし、また懐疑的にもする。そしてそこに色々の伝説が生まれる。

古来その死所の確かに知られていない人の例として安徳天皇、源義経等数多くあり、景清、教経などもまたその中に数えられるものであろう。

しかし史実と伝説はいうまでもなく厳正に区別しなければならない。日向並びに大隅町における景清伝説は古いものであるが史実としてよりも、あくまで伝説として温存して行くべきものであろう。

編者が昭和四十二年一月十五日調査した奈古八幡宮司長田鉄太郎氏宅所蔵の「奈古八幡古文書」によると、前記建治二年三月一日の清景関係文書に左のごときものがある。（鹿児島大五味先生校閲）

①弘長元年辛酉二月日附宇佐奉行所紀康則大宮司田地支配状
「日向国宮崎庄内南方奈古名大宮司職事海清景所
（以下略）」

②弘長元年辛酉十二月十五日附大宮司職譲状
（父海宿祢清久より清景に）
「譲与　八幡奈古宮　大宮司職事
海清景所（以下略）」

③弘長元年十二月日公文代左近将監某、預所兼地頭御代官大江下文
「下　八幡奈古宮　補任大宮司職事　海　清景所
右件於大宮司職者、任親父清久譲旨、所令補任也、仍神官等宣承知、不可違失、故以下」

④弘長三年二月　日　地頭僧下文
「下可令早領知屋敷壱所並仁王寺田伍段事　海清景所
（以下略）」

⑤弘長三年三月二十日　地頭僧下文
「下　司令早領作櫛曳田壱町事　海清景所
（以下略）」
⑥文永六年七月二十八日左衛門尉〇〇より宮崎御庄〇地頭代御中宛文書
「当庄奈古宮大宮司職事
任相伝以海清景被定補了（以下略）」
⑦建治二年閏三月一日附文書……前記
「日向国宮崎庄笠本村大宮司職事（以下略）」
⑧弘安五年卯月十二日附僧明生奉書
「奈古宮大宮司田地等事、元四町八段内就注中三分二者大宮司三郎方三分一者可為御家之地哉（清景夫人）
（以下略）」

奈古八幡の大宮司は元は海氏でそれから海老原氏の名が出てくる。あるいは海氏の後裔が海老原氏となったのでもあろうか。後には長田氏の名も出て来る。

前記、日向今昔物語の説のようにちょうど年代的にもまちがいそうなところに「奈古神社古文書」に海清景の事が出て来ているので、これを景清と見誤ったのか、あるいは故意に景清伝説と結びつけてこの文書を利用したのかいずれかであろう。

しかし景清伝説はやはり祖先とも結びついて伝説なりに生きつづけている。大隅町の景清墓も永年の伝説としてこれを子孫に受け継ぎつつ、また、一方においてその説の由って来た所以とか真実を追求して行く事も必要であろう。

第七節　元　寇

文永八年、蒙古の使者は再び国書を持参し、我国の来属を求めてきた。鎌倉幕府は首脳部を更迭して大事に備え、執権北条時宗は断乎として返書を与えるとの朝議を許さず、その決意を示した。

しかし蒙古来襲のことは鎌倉幕府においても当然予期したことであったから、同年西国に所領をもつ御家人にそれぞれの所領に下向し、その来襲に備えさせることとした。同年九月十三日付の北条時宗、政村の連署の関東下知状が薩摩国阿多郡北方地頭二階堂氏に宛て出されているが、それには異国の来襲に備え、領内の悪党を鎮めるべきことが指示されている。二階堂氏に与えられた命令は当時東国から九州の所領に下向を命ぜられた御家人にもどれも同じように達せられたものと思われる。

文永十二年四月には改元して建治元年となった。その九月には鎌倉幕府は大宰府及び九州諸国に命じて沿海の警備を厳重にしかつ兵を筑前に出して蒙古の来襲に備えさせた。

越えて建治四年にはまた改元して弘安元年となり、この年島津久経は軍兵を率いて筑前筑後を守り、長子忠宗もまた父に従って箱崎に出陣した。

蒙古来寇の日、弘安四年五月二十一日蒙古の大軍はまず壱岐、対馬を襲い、ついで博多湾に侵入してきた。そこで箱崎に滞陣中の島津久経はその防禦に当たり、これを上陸せしめず、ついで六月二十九日には逆に弟大炊助長久及び五郎忠経に命じ、比志島祐範並びに祐範の弟河田右衛門尉盛佐、辺牟木又五郎義隆等と蒙古軍を壱岐に襲撃して戦果をあげた。しかしその戦で入来院兄弟は筑前海上で戦死している。ところが七月晦日の夜突如大暴風雨のため襲来した元軍の船は転覆し、敵兵の多くは溺死し、辛うじて上陸したものも大半誅滅されてしまった。

なお元寇に当たり鎮西の防備を厳重にし、北九州沿岸一帯に石築地を築造、交替で警固に当たる異国警固番役は弘安の役の前から実施され、鎌倉幕府滅亡まで続けられたのである。

九州各国の警固番役は各国別に割り当てられたが、その中ではじめは日向、大隅、薩摩三ケ国は冬三ケ月（十、十一、十二月）とされていた。警固場所は薩摩は笠崎、大隅は今津後浜、日向は不明であるが恐らくこれも今津後浜であろう。後警固期間は一ケ月となった。石築地の割当は反別に一寸（町別一間）の築造役でその負担は御家人、非御家人に拘らず領主の負うところとされていた。

元寇の時名前の出て来た二階堂氏は先祖は（藤原姓）山城前司行政である。行政は鎌倉の二階堂にいたので二階堂を以て氏とした。行政の子行久は常陸介と称し北条時頼の時代建長元年に薩摩国阿多北方地頭職として三州に封ぜられた。北方は田布施村のことである。行久は鎌倉幕府に仕えて評定衆であったことがある。南方は鮫島氏が領した。

（その子孫は南北朝時代武家方に属して島津氏に協力し、戦国末期島津氏の三州平定に協力して、繁栄して島津藩の家老も勤めている。また流落した阿多郷士となり更に島津光久の時鹿児島府下の士となった系統もある。鮫島氏は建久八年の図田帳に阿多地頭佐女島四郎とあ

る。鮫島氏は平忠景と同族であるという説もあるが、これは誤りで、駿河国出身の御家人とする方が正しいであろう。建久二年には鮫島四郎宗家が日置郡阿多の地頭となった。貝殻崎城はその居城である。鮫島景氏は出水郡山門院の郡司職であった山門太郎秀忠の嫡女を娶り、秀忠に男子がなかったので、山門院の所領は鮫島景家以来、鮫島家に移った。南北朝時代には鮫島彦次郎入道蓮道は南朝に属して島津氏と戦った)。

第八節　鎌倉幕府の滅亡と建武中興

蒙古の来寇によって鎌倉幕府の財政は紊乱し、執権は北条高時の失政もあり、天下の人心北条氏を離れて遂に鎌倉幕府の衰運を招いた。後醍醐天皇は王政復古を計画され、遂に幕府は開府以来百五十年、北条氏執権以来百十一年で遂に倒壊し、建武中興となった。

しかし間もなく足利高氏が反乱を起こし、世はまた戦乱となった。

第九節　景清墓伝説と岩川氏

シラス台地の下は溶結凝灰岩である。河川はシラスを侵食し、更に凝灰岩をも削って流れている。

浅井から菅牟田・松田へと流れる前川も凝灰岩を削って流れる渓谷をなし、上流を佳例川と呼ぶ後川も渓谷をなすが、特に折田の下のドンドンの滝と呼ばれるあたりから蕨谷・市吉・柳井谷と続く岩を削って流れる川の様子は、岩川と呼ぶにふさわしい。

このような自然の地形から岩川の地名が生まれたのであろう。

町文化財保護審議会の税所薫委員は古石塔・城跡の研究家でもある。税所委員は景清の墓は岩川氏のものではないかとの説を発表しているが、以下、この説について論考したい。

岩川氏は鎌倉期のいつのころか、岩川を領して岩川氏を名乗り岩川の柳井谷附近に定住し、屋敷を営み勢力を次第に扶殖していったのではなかろうか。そしてこの附近に岩川某の五輪塔を造営したものであろう。

この大五輪塔の景清墓といわれるものと、それを取り巻く小五輪塔群は、恐らく岩川に定住した岩川某とその近臣を物語るものではなかろうか。そしてこの岩川一族は南北朝にかけて柳井谷を根拠に岩川地方を支配し、近くの手取城を居城として勢力を更に拡大しようとしていたであろう。であるとすれば岩川氏居館跡は、この柳井谷附近のどこかにあるのではと思われる。

その後、正平の国合原合戦にまつわる島津氏久の復讐（ふくしゅう）戦により、岩川氏は敗北、種子島、屋久島方面に逃走したといわれる。要するに景清墓といわれる五輪塔が、岩川氏のものであった可能性を秘めている。

岩川氏の敗走後岩川氏の一族、あるいは家臣の誰かが、この五輪塔の所に残り居ついたものか。「三国名勝図会」によると土民化したその子孫亀次郎等のことが書かれている。「三国名勝図会」にはこの家にまつわる系図、太刀、冑等があったとされていて、相当な家柄であったことを物語っている。

更にその子孫本村家がこの墓を守って来たもののようである。

平景清墓伝説はあくまで伝説であり、この地に景清が流れて来た確証はない。そしてあのようなすばらしい五輪塔群がとても世俗の人の建立し得るものではなく、相当な豪族によってこそ初めて遺される遺跡であろう。万一、岩川氏のものであるとすれば、その存在価値が一層高まって来よう。平景清墓伝説は岩川氏敗走後、遺った人々によっていつのころからか流布されて来たものではなかろうか。

第十節　平姓肥後系岩川氏由緒考

一　平姓肥後氏についての考察

岩川氏については確たる系図が未発見の今日、全く雲をつかむようなことであり、今の段階では岩川氏の由緒を考察する資料は極めて少ない。

その少ない中の史料といえば、大隅史談会発行「大隅」第二十二号で町田満男氏が「中世に於ける垂水の豪族たち（その二）」の中に肥後氏のことを発表しているので参考になる。同氏は鹿大五味克夫氏の研究「名越氏と肥後氏」（中世史研究会報三〇）より引用している。以下その引用文を抜粋する。なお、この抜粋については鹿大五味教授の了解を得たものである。

名越氏と肥後氏

名越氏は北条泰時の弟朝時を始祖とする北条氏一族である。名越は鎌倉の地名、朝時以後時章、公時と歴世居を移さず、その地名により名越氏を称したのであろう。朝時は承久の乱に際して北陸道大将軍となり、以後その守護職領有状況は越後・越中・能登の地、筑後・大隅に及んでいる。

大隅の守護は島津忠久改易後（比企氏の変）北条武時から朝時へと伝えられたのであろう。朝時の後は時章であり、時章は文永九年誅せられている。時章の弟教時も亦然り、北条氏では時宗の兄時輔も同時に誅せられている。これは時宗が得宗専制体制確立の犠牲になったものである。

肥後氏は名越氏の被官であり、名越氏の兼帯した守護・地頭の代官諸職をつとめた。肥後氏が大隅国において名越氏の代官職に補せられたのは、種子島をはじめ財部院・深河院の島津本荘地頭職のほか同荘寄郡にも及んでいる。種子島については恐らく名越氏が島津本庄地頭職を有し、肥後氏が地頭代官職となり、その一族が現地に下向し、在地領主化、島主化したものである。

町田氏考察より

平行盛の子が北条氏の執奏により種子島及び深河院・財部院の主として下向したのでなく、北条氏の一族名越氏の被官として地頭代・守護代として肥後氏は鎌倉にあり、子孫が領地に下向したものであることは首肯される。

肥後信基及びその子信英・信家が文永二年共に切腹させられているのは、時宗が専制体制（得宗体制）を打ち立てるために、文永の初めごろから邪魔者を除きはじめ、肥後氏が肥後・大隅・能登・越中・越後の守護代、地頭代として名越氏の被官中、重要な地位にあり、名望もあったので、まずはじめに何らかの理由をつけられて誅したものと思われる。

さて、肥後氏が現地に下向したのはいつごろであっただろうか。種子島系図にも五代までは確とした事項は載っていない。長男信式は種子島の二代としてその名があり、大隅には五男信家、七男信行の名が見える。

五味教授の研究によると、肥後氏が大隅在地の地頭代としてあらわれるのは正応元年（一二八八）以降のことであるとされている。大隅に下向したのは信家、信行の子の時代と思われる。信行は肝付郡の地頭代として在鎌倉であり、その子が現地代官として下向している。

二　平姓肥後系岩川氏について

筆者が五味教授に照会したことによると、

1、肥後系図の信憑性については「種子島系図を参考にしたもので、肥後氏上代の部は疑問点もあるが、種子島後代は間違いないと思う」とのことであった。

2、前述、町田氏論考については五味教授の確証も得られた。

以上二点を前提にして平姓肥後系岩川氏について若干の考察を試みたい。

平景清墓の真実の主は誰か

ア　岩川信家か

肥後系図によると五男信家は岩川六郎左衛門を号し、文永二年（一二六五）切腹とある。万一、信家が真に大隅に下向し、岩川と称したのであれば、平景清墓の真の主の第一候補として信家が考えられる。

イ　岩川二郎左衛門か

五味教授は肥後氏が大隅在地の地頭代としてあらわれるのは正応年以降の事だとされている。それに従えば七男信行の四代孫、二郎左衛門は岩川を号し、岩川城主となっている。したがってこの二郎左衛門のことか。

（後述、横河系図参照）

ウ　そ　の　他

結局例の五輪塔の年代測定が可能になったり、岩川系図が出て来たり、新しい文献史料の発見により、異なった考察が可能かも知れない。薩藩史書の戦国史上に出てくる岩川氏の由緒が、種子島家臣か、それともいずこの家臣かがはっきりし、その家系の主が現存しており、また系図が発見されたらと期待して止まない。

財部・谷口両系図との関連

都城市年見町十四の十三財部三郎氏方の財部系図と、東京都中野区中央三の一の二十一谷口豊二（元志布志在住）方の谷口系図は、若干の相違はあるが、行盛から盛種（以下三代）までほとんど一致している。ところで一般に流布されている肥後氏系図と同じく行盛を祖としている両系図であるが、肥後系図とは著しい相違がある。

財部・谷口系図中の「正盛」は、肥後系図中にも信家流に「正盛」が出てくるが、同一人物かどうか不明であり、肥後系図と両家系図は合一点がほとんど見られない。財部系は割に早くから島津被官化しているが恐らく南北朝時代以降であろう。

財部・谷口系図（両系図共通、括弧内は谷口系図に記載）

- 行盛　正四位上左馬頭　下向鎮西矣
  - 隆教　肥後安芸守　三ケ国下向末吉落着（下向鎮西）
    - 正盛　安芸守　大隅国之内財部末吉領主　居末吉財部城矣　号真財院　（居住隅州末吉財部矣）（下向隅州居住末吉）
      - 武盛　号左馬頭　号弥太郎　（追討財部城主）（而居住財部城矣）
        - 盛道　号長山
        - 隆盛　号谷口大隅守　（盛明家を相続す）
      - 盛明
    - 隆重　号種子島　（或号遠藤）
    - 盛家　号内山
    - 盛続　号西山
  - 富盛　号肥後二郎左ヱ門尉　（初称二郎左ヱ門尉）
    - 同盛　号末吉豊前守
      - 貴俊　号肥後安芸守　法名永有
        - 盛種　号財部左馬頭　法名永忠

肥後氏系図（鹿大五味教授「名越氏と肥後氏」より）

- 信基　文永二切腹　八十二
  - 信式　太郎左ヱ門
    - 信真　四郎左ヱ門尉
      - 貞時　中務左ヱ門
        - 時基　中務左ヱ門
          - 時充　左近将監
            - 頼時　貞治五・四・一六　於肥後国菊池合戦之時戦死
    - 信清
      - 信貞
    - 信等　二郎左ヱ門
    - 信氏　号黒河兵衛尉　能登国笠志領主
    - 信英　号五郎左ヱ門　文永二切腹
    - 信家　号岩川六郎左ヱ門　文永二切腹　（古石塔研究会）
      - 正信　六郎左ヱ門
        - 信盛　六郎左ヱ門
          - 正盛　中務少輔
    - 信連
      - 家行　元弘戦死
    - 信行　藤内左ヱ門
      - 時益
        - 時信

谷口家はあるいは岩川氏又は横川氏あるいは藤原城主と連係していたものか。岩川系が良くわからないが、肥後一族と見た場合、南北朝ごろまでは岩川氏も財部正盛系と親しかったものであろう。

野辺氏との関連

名越氏の被官肥後氏と共に、野辺氏も名越氏の被官であったとの説がある。野辺氏が櫛間院から深河院に来て、深河院の代官職も帯びていたものと思われる。したがって野辺氏の中から深川を称するものが出て、深川院の熊野神社境内に深川氏の五輪塔が残されている。（野辺氏の事は後述）景清伝説の所で前述した箇所に「景清は柳井谷に来てから光明寺を建立し、その寺は後末吉郷深川に移し、深川光明寺跡には仁王像二基が遺っている」とある。これは名越氏被官肥後氏と野辺氏の連係、すなわち岩川氏と深川氏の連係を物語るものではなかろうか。

そのことは肥後系岩川氏の敗走後残された家臣や建造物の一部が野辺系深川氏に引き取られたことを表現するものではなかろうか。

横川氏との関連

横川系図の中に肥後彦次郎聟久が正平十年（一三五五）畠山直顕を崎山城に入れ、島津氏久に討たれたとあるが、その横川系図では信行から四代二郎左衛門は岩川を称するとある。

横川系図（前述肥後氏系図続き）

- 信行（藤内左ヱ門）
  - 時信（藤内兵ヱ尉）
    - 時盛（藤内兵ヱ尉）
      - 盛澄（七郎左ヱ門）
        - 二郎左衛門（号岩川 岩川城主）
          - 時種（号横川 横川城主）
            - 種清（河内守）
- 種信（河内守）
  - 種盛（大膳亮）
    - 種道
      - 種氏（号早崎 早崎城を取入る 正平年中氏久に攻取らる。）

正平十四年（一三五九）氏久により岩川氏が滅ぼされたことと、この横川種氏が氏久より討伐（正平十年）されたことと何か係りはなかろうか。要するに畠山直顕に横川氏・岩川氏が与していたであろうことは、後述島津貞久と畠山直顕の対立抗争時の事件によって考察することが出来よう。しかし四代岩川二郎左衛門の時に、氏久に討たれたかどうかは、この系図で見る限りでは時代差を感ずる。

第二章　南北朝時代

元弘三年（一三三三）後醍醐天皇親政から元中九年（一三九二）南北合一まで約六十年間世に南北朝時代とよぶ。

北条氏滅亡後、後醍醐天皇が万機を親政された。いわゆる建武中興である。諸将の行賞の中、足利高氏は功臣第一として天皇の御名の一字を賜り尊氏と改めた。

行賞が公卿に厚く武家に薄かったので両者に不和を生じ政治がうまく行われず、武家政治を慕うようになった。足利尊氏は武家政治の再興を志し、遂に南北両朝の乱となり尊氏は宮方を抑え、自ら征夷大将軍と称した。

その子義詮を経て、義満の代細川頼之の議を用いて元中九年、後亀山天皇は京都に還幸され今まで南北両朝対立抗争していたのが後小松天皇に一元化し南北合一した。

第一節　野辺氏深川院を領す

南北朝時代の深川院の領主は野辺氏であった。野辺氏は初め遠江国栗橋郷に小野氏がおり、同郷三千八百町の地頭であったという。

平重盛の末子（七男）宗実（土佐守）の玄孫盛行が小野氏に養われ（武蔵国榛沢郡野辺郷小野兼広養子）後武蔵国横山に住み、一族がはんえんし、後榛沢郡野辺郷の地頭であったので野辺氏を称した。

武蔵国野辺郷地頭職野辺六郎左衛門尉久盛は更に建武元年甲戌三月二十一日、日向国櫛間院地頭となり、従来の伴姓肝付氏に代わり櫛間院地頭職、並びに北条系名越氏に代わり大隅深川院を領知した。

鹿大五味教授の推測されるところによると野辺氏ははじめ島津庄日向方惣地頭北条系名越氏の代官として下向し、櫛間院の地頭職を手中に入れたのではあるまいかとのことである。

なお久盛等関係文書として日向古文書集成の比志島文書によると、

雑訴決（断所牒）□□□島津上総前司貞久法師法名道鑑所日向国櫛間院雑掌弘成申野辺六郎左衛門尉久盛子息盛忠狼籍事解状具書

牒、就彼下地事、度々雖被下綸旨、不叙用之、構城墩致狼籍云々、太濫吹也、不日相催国中地頭以下輩、止濫妨、破却城墩、沙汰居雑掌於下地、可召進□（交）名人等之状、牒送如件、以牒

建武二年五月十一日　　右近衛将監平朝臣

中納言大蔵卿左京大夫　大判事侍従藤原朝臣

修理大夫藤原朝臣　　前筑後守藤原朝臣

明法博士兼左衛門権少尉左京大進　　中原朝臣

正三位藤原朝臣　左近権左兼少納言侍従藤原朝臣

中宮御領日向国櫛間院（後醍醐天皇中宮新室町院）雑掌弘成申、野辺六郎左衛門尉久盛子息盛忠、背度々綸旨御牒、不法渡唐（当）院下地、致濫妨由事、決断所重御牒並足利（尊氏）殿御教書今年七月一日（以下欠）

以上の文は雑訴決断所が島津貞久に対し、野辺盛忠の櫛間院で狼籍する事を停めさせたものである。

なお日向古文書集成の祢寝文書の中に畠山義顕が祢寝清成の軍功を幕府に注進した注進状がある。

三俣院兼重城合戦、石山城合戦等六項目の次に

一、建武三年十一月十一日、野辺孫七心替之時合戦、

親類松沢四郎太郎親員討死、（以下略）

とあり野辺孫七（盛忠）が官軍に応じ祢寝家が合戦したことが書かれている。延元元年には野辺氏ははっきりと官軍に応じたことを表わしている。

久盛の長子は孫七盛忠肥後守と称し、次子は孫八盛政で深川美作守といった。なお長谷場文書によると盛政は一乗院領飫肥郷にも知行を受けていた。

盛忠時代は南北朝烈しく攻防戦を拡げているころである。日向方面には畠山直顕父子が、父は穆佐城に拠り、子民部大輔は三俣城に拠っていた。

正平十三年春菊池武光はその子重隆を遣わして畠山氏を討たせ、武光もまた正平十四年四月、懐良親王を奉じて志布志に入り、次いで隅州深川院に来た。この時深川院には野辺盛忠が一族郎党と共に親王を奉じ義兵をあげた。

都城島津家文書によると

（都城市郡元本村寅雄氏宅野辺文書の写）「野部六郎広兼

（筆者註、武蔵国野辺郡小野広兼）―盛行（註平重盛の玄孫）―盛秀―盛縄（註綱）―久盛―盛忠孫七有五宮御召謁大隅国深川院御下向之間奉隠量之、同三年四月二十九日挙義兵折平凶徒畢」

とある。

「財部町誌」によるとこの財部六郎広兼の子孫が財部院を支配したように書いてあるが、財部家は別にあり財部系図をのこしている。そして毎年日光神社の祭典には必ずその財部家が参列している。都城市栄町財部三郎氏宅に財部系図が現存している。

熊野神社（深川院跡　末吉町）

島津家のこの野辺文書を実見してみると野部六郎広兼と書いてあり「財部町誌」は野部を財部と見誤ったもののようである。

右の文中の宮は懐良親王を指すか五辻宮守良親王を指すか二説がある。

熊野神社関係記録によると五宮は五辻宮守良親王（後醍醐天皇の皇子）のことで地頭野辺盛忠が召されて、この間隠したといわれている。

盛忠のあとは長子盛房が嗣いだ。盛房ははじめ政弐、左衛門尉山城守といった。盛房は晩年職を子盛久に譲り古大内に退隠した。盛房に三人の子がおり、盛久、盛隆、盛豊である。盛豊は山城守といい、大隅国深川氏に養われた。この深川氏は深川院に野辺氏の代官としていたのであろう。

（註＝深川氏の後裔は現在都城市に居住し、前市長蒲生昌作氏も深川氏の系統である）

野辺政弐について長谷場文書によると、正平三年十二月十二日附飫肥北郷留守所から水間氏の乱に当たり褒状

を受けている。それによると深河弁済使野五殿となっている。

昭和四十二年一月二十九日、編者調査によると—串間市古大内に野辺城跡があり、野辺八幡こと野辺盛房等の墓所がある。盛房菩提寺の虎渓寺は何代目であろうか松下霊山氏が護っておられた。野辺一族の裕福そうな瓦葺き家並は未だに昔の面影を残していた。

天授二年六月今川満範が日向に入り都城の北郷誼久を攻めたとき盛久は満範方につき島津氏に相対した。盛久は貿易船を出して明と通商したともいわれている。

盛久に二男一女があった。盛在と盛尚という。盛尚は益助ともいい二之方氏の祖である。盛在は、はじめ益連といい、薩摩守右衛門尉である。応永八年、島津元久の将本田忠親が日向に走って叛き、志布志を攻めたとき盛在は志布志松尾城にあった新納宗久を援けて、忠親を敗走させた。（野辺盛久盛連連名で恩徳寺寺領五町を寄進している、野辺文書）盛在は応永十七年、島津元久に従って京都に入り、将軍足利義持に謁して、薩摩守を授けられた。永享五年島津薩摩守から次の安堵状をもらっている。

大隅国深川院此内二□町余、相残候分之事、為料所宛行処候也、然者早任先例領地不可有相違、状如件、

永享五年二月二十四日為久（孝久？）花押

飫肥殿（註＝大隅廻城主飫肥伊豆守）

野辺殿（註＝野辺盛在）

盛在に四男があった。盛仁（刑部大輔）、良英（櫛間氏の祖）、忠門（野辺小次郎）、盛公（左京亮）の四人である。

盛仁は幼時から英武、博く群書を渉猟し、盛名があった。後良盛と改め、晩年仏門に入って宝柔といった。嘉吉元年、足利義昭僧正が櫛間に逃れて野辺氏を頼ったのはこの時で、義昭は永徳寺に自殺した。享徳二年になって島津忠国は盛仁の櫛間領を奪ったが七年後長禄三年七月十六日再び旧領を安堵された。

（註＝盛仁の女は都城北郷家六代敏久の室に入り、七代数久を生んでいる。それで盛仁没落後都城北郷家を頼り、その家臣となった。時代は下るが十二代忠能の母も野辺宮内小輔盛忍の女である。すなわち十一代忠虎の側室で忠能を生み、忠虎が文禄の役のとき朝鮮で戦死したのち川東の日置家に再縁したと伝えられている。）

「参考資料」
日向古文書集成、樺山文書　五八
足利義教御内書
日向国野辺在所ニ大覚寺居住之由被聞食候、不日上進之候者、忠節不可過之、於恩賞者、可随望之由、野辺（盛仁）堅可申付者也、
（永享十一年）六月廿日　樺山文書　五九
足利義教御教書
島津持久、高木孫三郎、市来太郎以下事、所被加治罰也、早令合力島津陸奥守貴久、可被致忠節、就中対貴久無仍執達如件、
嘉吉元年十二月十二日　右京大夫（細川持之）（花押）
野辺（盛仁）刑部大輔殿　以上
（注　貴久忠国の別名）

さて文明二年、島津立久が立って盛仁の子の櫛間を没収し、伊作久逸に封じたので建武以来の野辺氏はここに亡んだ。

ところで盛仁の後について諸家諸説があり、まちまちである。志布志町野辺ときえ氏宅と都城市郡元町本村寅雄氏宅所蔵の文書は中世、日向櫛間の領主野辺氏の文書を相伝している。

志布志野辺文書が文明十五年の坪付を原本の最古のものとしているのに対し、郡元野辺文書は南北朝時代からの原本を相伝し、野辺盛仁の正統をつぐようである。

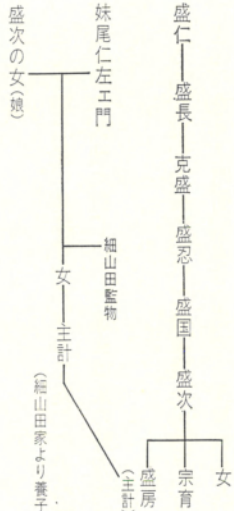
庄内の乱の時伊集院忠真家臣として梶山城主になった野辺彦市並びにその子金左衛門盛次の名は都城市上東町野辺系図にも出てくる。

さて梶山城主野辺彦市らは慶長五年二月二十九日に降伏し、北郷忠能（野辺盛忍の孫、彦市とは従兄弟の間柄で敵対していた）の家臣となり梶山に住した。その子孫は「三股町史」によるとのち郡元に移住し、本村寅雄氏が野辺文書を伝えているという次第である。

野辺家は前記の通り盛仁は櫛間を追われて都城島津家を頼って来て、その家臣となり、その文書を相伝している都城市郡元野辺文書。盛仁の子で鹿児島に出府した盛篤家が後に志布志に転住し、子孫に志布志野辺文書を相伝している。その他向井氏系図、都城市上東町野辺系図、都城市東町野辺医院家系図等相伝し、その間の系図に多少の、あるいははなはだしく相違する箇所も見出される。これらの中で郡元野辺文書が最も古く差し当たり基準になることは申すまでもなかろう。

島津家文書（郡元野辺文書の写）の「野辺盛長系図並

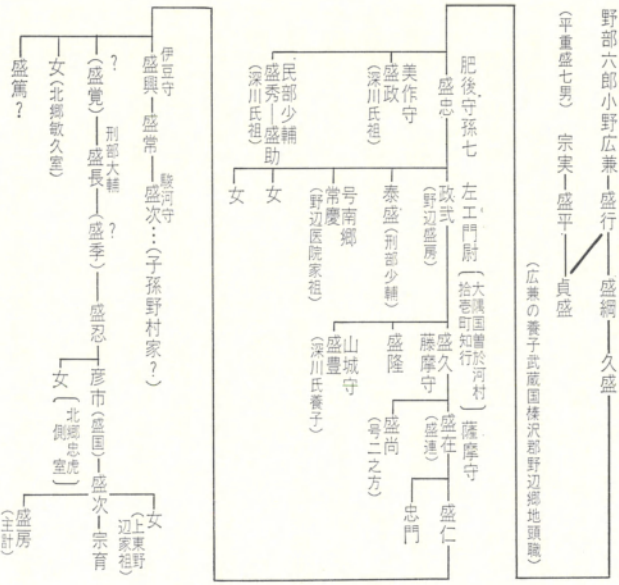
相伝次第」によると、



主計は盛次の血筋であるので細山田家より野辺盛次の跡目家督を継ぎ野辺盛房となった。郡元、志布志野辺文書、向井系図等は鹿児島大五味教授の「鹿児島史料拾遺」の中に発表された「野辺文書」を参照した。

次に野辺諸家系図を参照し、野辺系図を示せば

小野姓野辺氏系図



他に二之方氏系図があれば更に野辺系図がはっきりするかも知れない。深川氏系図によると深川氏は野辺盛忠の第三子常慶より出て深川家をついでいる。

第二節　南北朝の争乱

一　南北攻防

建武二年八月足利尊氏は鎌倉で北条高時の子時行を打ち滅ぼした。そして自立して自ら将軍と号した。

朝廷は尊氏征討を決意され新田義貞を大将軍として建武二年十一月八日京都を発向せしめた。その時は日向国、大隅国守護職の島津貞久は朝廷方についていた。

尊氏は各地の部将に誘いをかけ建武二年十二月、島津貞久の弟時久を日向国新納院地頭職に補し、時久は新納を称するようになった。後の志布志城主新納氏の祖である。

建武二年十二月十三日伊東祐広は官軍に応じ、兵をあげ諸県郡八代城に楯籠った。

しかし新田義貞は敗北し、尊氏は京都を一度手に入れるに至ったが（延元元年正月十一日）程なく官軍に奪われ尊氏は九州に逃げ下るに至った。その時少弐、大友、島津の諸氏は尊氏にくみし、菊池、阿蘇の二氏は官軍に応じた。

日向は伊東祐広、肝付兼重等が官軍に応じた。肝付兼重は三俣院高城（今の高城の城山月山日和城ともいう）に拠り、三俣八郎と称した。彼は王子城（山之口）姫木城（今の都城市姫城山）、石山城（高城石山）、新宮城（今の母智丘参道の南）等の属城をおき部将を配して威風四隣を圧した。

深川院（末吉、岩川）は野辺氏の領で宮方であり、松山、志布志、安楽、蓬原、大崎等救仁院並びに救仁郷は肝付方であった。

建武（延元元）三年（一三三六）正月二十八日尊氏方についた島津貞久は京都において各地に檄を飛ばし重久氏に救仁院大崎胡摩ヶ崎城を攻めさせた。

肝付方は大崎胡摩ヶ崎城、大崎竜相城、志布志松尾城、安楽城、蓬原城、松山松尾城、槻野、岩川及び深川、末吉、梅北等にそれぞれ味方の族将老臣を配置し、その守備を厳にした。

延元元年正月二十九日、重久軍志布志城を攻め、激戦後遂に志布志城は落ちた。

同年三月一日、肥後菊池氏と気脈を通じた肝付兼重は官軍に応じ、国富庄南加納を襲い土持栄宜らと戦った。

同年三月二日いわゆる多々良浜の戦において北朝方は

菊池武敏等を破ったので九州の武士は多く尊氏についた。

当時南九州では日向豊後方面の足利方の諸氏は畠山直顕を将とし、薩摩の諸族は島津貞久の指揮下に立って肝付兼重、伊東祐広の一族に対抗するという形勢になった。

南朝では宇治惟時に薩摩守護職を授けられ一方では尊氏は薩摩国河辺郡、大隅本庄を島津貞久に与えて勲功を賞している。大隅本庄とは多祢島、財部院、深河院、筒羽野村をいう。

足利尊氏はほどなく九州を征服し、延元元年四月三日大宰府を発した。

尊氏東上のころ島津貞久は更に薩隅警固の命を受けており、東上後薩隅の地を鎮圧すべく領内の諸将と連繋をとった。

まず延元元年四月十四日大隅の重久篤兼に命じて肝付氏の属城、肝付兼隆の拠る肝付郡加瀬田城（百引村）を攻めさせた。

五月五日には大隅式部小三郎と大隅の守護代森行重に命じて、肝付兼重の属城日向国中郷姫木城及び三俣院の王子城を攻めさせて肝付兼重の後援を絶っておいて、六日から主力を加瀬田城に向けたのである。

（日向古文書集成、重久文書、島津貞久証判重久篤兼軍忠状に加瀬田城、王子城合戦の事が記されている）。

その時の大手の大将は樺山資久、伊作宗久、搦手の大将に北郷資忠、また別に水寨奉行として中条祐心を命じ、これらに大隅の重久篤兼、祢寝清種、野上田時盛、薩摩の二階堂行久、山田忠能等の諸豪が参加して攻めた。

（五月二十七日野上田伊予房は百引村地頭代官職となった）。

加瀬田城の城兵はよく守って城を陥すことができない。そのうち肝付氏の援軍が来たので樺山資久は野崎村でむかえ撃った。

こうして戦は続いていったが野上田、郡山、莫祢、国分、二階堂等の諸氏が勇敢に夜襲して水寨をきり、烈しく攻めたてたので建武三年六月十日になって加瀬田城は陥ちた。

貞久が加瀬田城を攻撃している一方で、日向方面では畠山直顕は土持宣栄に命じて、日向児湯郡石之城を攻め、新納院彦尾原で戦った。この外はこの間しばらく静まっていたのであったが、肝付兼重は三俣院高城に入っ

てだんだん勢力を盛り返していた。この年建武三年十一月になって、八代城の伊東祐広、櫛間城の野辺盛忠と連絡がついて、再び勢力を得てきた。

そこで畠山直顕は自ら高城を攻めるために日向国富庄太田城に駐屯し、兵を集めて結城、友永、祢寝等に櫛間城を攻めさせた。盛忠は城を支えることが出来ず十一月に敗走した。また兼重の与党猪俣新左衛門らが下財部新宮城に拠っていることを直顕は聞いて、十一月五日結城行郷、友永澄雄、楡井頼理、祢寝等に攻めさせ十二月六日これを陥れた。そこで直顕はいよいよ三俣院高城を包囲したまま年も暮れ、翌延元二年正月に直顕は祢寝氏を遣わし兼重の部下の拠る石山城（高城石山）を正月十日に陥れた。その勢いで更に激しく高城を攻めたがなかなか成功しない。その中二月二十一日夜、城中で火災が起こったのでそれを機に更に猛攻したが城は落ちなかった。一方、中央では尊氏の軍は延元元年五月、楠木正成を湊川に破り、更に新田義貞は延元三年七月藤島で戦死した。なおその間義貞の越前金崎城の攻撃には島津貞久はその庶長子川上頼久等を遣わし尊氏に協力した。

中央における足利方の大勝利は薩隅でも守護方の気勢をあげさせることとなった。一方宮方は三条侍従泰季を懐良親王の先発隊として派遣し、同人は揖宿地方に到着、揖宿、鮫島、矢上、市来その他薩南地方宮方の諸豪族がこれに応じて挙兵、更に大隅、日向の肝付兼重らもこれに相応じた。そこで日向にあった畠山直顕は、四月十日三俣から穆佐に退いた。

そこで薩摩においては宮方の勢力が漸く優勢になってきたので、足利直義は越前にあった貞久の子川上頼久を急ぎ帰国させた。伊作荘では中原城、市来城など各地において南北両朝軍の攻防戦が展開されていた。

その年の十一月になると大隅、日向の方で情勢は急迫し、肝付兼重は日向の野辺盛忠と手を握り、薩摩の矢上高澄、伊集院忠国、谷山隆信、知覧院忠世等と合し、大隅曽於郡に数千騎を向け、郡内清水寺、鼻連山に塁を築いて重久篤兼を橘木城に攻めた。篤兼はこの軍を吉水に邀撃したが敗れ、翌延元三年三月までそのまま大隅の野に両軍は相対峙していた。

同年七月十一日直顕は祢寝一族に命じ、肝付方の平山氏のよる日向南郷大和田城（都城）を攻めさせた。しかし興国元年の年をこえてもなかなか陥れることができず、漸く四月十三日に至って大和田城を陥れた。

また直顕は高城の兼重を弧立させようとして祢寝一族

に命じ、日向の兼重の与党猪俣新左衛門尉の上財部城を攻撃させた。

三俣高城の肝付兼重は全く孤立の状態になった。八月十三日畠山直顕は祢寝清成、重久篤兼、土持宣栄等をして高城を囲ませ、遂に二十七日高城を陥しいれた。このとき兼重の子金頭丸、金王丸以下の一族は捕えられ、兼重も危いところを肥前松浦の江田家定が兼重から受けた恩義に感じ身代りとなって死んだので、やっと脱出して肝付郡高山に帰ることができたという。

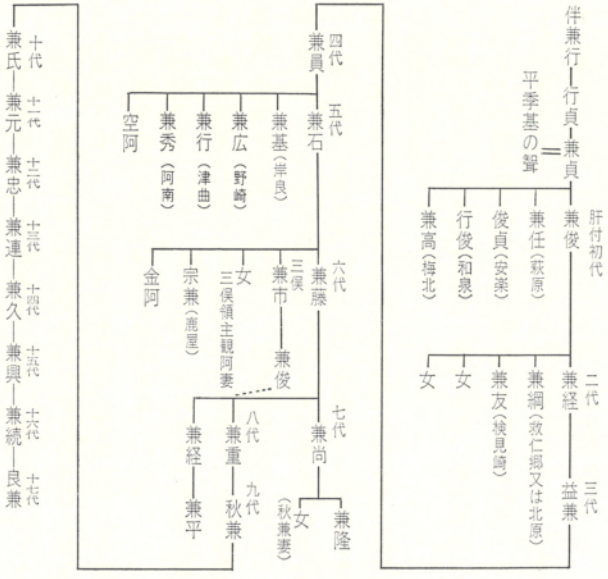
かくして兼重は敗北したのでその後直顕は日向をほとんど手に入れることになった。この間八月十六日後醍醐天皇は吉野で崩御され、新たに後村上天皇が立たれた。

興国三年五月一日征西大将軍懐良親王は薩摩津（山川か）につかれた。そして谷山城に入り宮方は再び勢を得た。宮方と、足利方の島津貞久の軍とは幾度か戦争があり、結局相対峙したまま宮方は谷山御所から出ることが出来なかった。

興国六年九月足利氏は畠山直顕を日向の守護職に任命し、畠山氏は日向に強力な地盤を作ることとなった。

正平三年正月五日、四条畷の戦で楠正行等は戦死し、以後ますます吉野にある南朝の武力は弱化していった。

肝付氏系図（「鹿児島県史」別巻）



足利直義は正月十二日薩摩の宮方を討つために貞久に畠山直顕と協力して行動するよう命じている。更に秋八月二十九日貞久に命じ楡井頼仲、肝付兼重等を討つように教書を与えている。そして重久篤兼等は貞久の命を受け行動を起こしている。こうして島津貞久、畠山直顕と楡井頼仲、肝付一族との対峙となったのである。

このころ京都では足利氏の内争が起こっていた。直義は尊氏の執事、高師直と権力争いをして遂に師直を殺した。この直義と師直の争いはひいて尊氏、直義兄弟の争いとなり遂に直義は鎌倉に走り、正平七年二月、尊氏は直義を追及した。これを観応擾乱ともいう。

そのさなか正平五年四月、楡井頼仲、肝付兼重の連合軍が大隅に侵入しようとしたので、貞久は重久篤兼に飛檄し、畠山直顕は日向からこれに向かう対策をとったのである。

直義党の直冬（尊氏の子で直義の養子）は九州に来て畠山直顕は直冬についた。（正平四年十二月二十七日幕府は島津氏に直冬を討つよう命じている。）秋八月、畠山直顕は新納院高城を攻めこれを陥れた。その時高城領主新納時久は京師にいて幕府方を援けていた。幕府は時久に救仁院を与えその後時久は救仁院（志布志）松尾城に居城することになった。

こうしている中に従来から漸次醸成されていた貞久と直顕との仲は次第に反目するようになり、やがて中央において尊氏が一時的に南朝方と提携するのと対応して貞久は宮方に応じて直顕と敵対するようになった。

あれほど活動していた肝付兼重もこれより先に病を得て死亡し、その子秋兼は遂に直顕と結ぶようになった。こうなると大隅の宮方にあたるのは直顕だけになった。そこで六年三月から八月にかけて大隅の豪族祢寝氏らと結んで頼仲の党の拠る大姶良城、加世田城、高隈城、鷹栖城等を陥し、更に頼仲の本拠志布志（松尾城）城を八月十三日に陥した。

正平六年十月二十五日足利氏は南朝と和睦した。

さていよいよ島津と畠山の争いは本格化し、正平七年四月二十九日義詮は島津一族に伊東祐氏と共に直顕を攻めさせている。

七月になると今や宮方となった貞久は懐良親王の令旨を奉じて、氏久に大隅の隈本城及び栗野北里城を攻めさせ、直顕の方ではその子宗泰らと氏久を攻めた。宗泰の部下は日向大隅の兵で氏久と戦ったが大隅は大方直顕の支配下にあったので氏久はやっと一方を開いて薩摩に帰

るという始末であった。

野辺盛久等は直顕方で末吉岩川辺りも直顕方であった。

（註　野辺文書によると観応三年十月廿九日付直冬の軍忠状を野辺野五政弐は受けている）。

薩隅日では島津、畠山の対立状態は続き、直顕は大隅の大半を手に入れ、更に薩摩へと自ら勢を示し、島津は楡井氏の宮方と手を結びこれに対抗した。

ところで志布志城が没落してから鳴りを静めていた楡井頼仲は正平七年十二月再び起ち上がって、弟頼重と大姶良城を夜襲してこれを取り戻した。畠山直顕はこれを見てすぐ祢寝清成等一族と野本行秀をしてこれを攻めさせたが薩南の官軍からも来援があったりして、勢強く城は陥ちなかった。

反って祢寝院に侵入したり、それから肝付地方で奮戦したが、大勢は不利になり鹿屋院、一谷城、木谷城も陥ち、やがて大姶良城も陥落し、これから楡井氏の勢いは衰えていくのである。

そして一時日向胡摩崎城（大崎）に拠ったが、祢寝一族の攻撃のため楡井頼重は遂に戦死した。力尽き果てた楡井頼仲は楡井氏が建立した大慈寺の宝地庵で自刃し、その生涯を終った。

辞世に（正平十二年二月五日最後）

こしかたも又行末も此年の
此月のけふ只今にあり

大慈寺は楡井頼仲が松尾城主の時創建し、のち歴代領主の保護をうけ、日本有数の禅寺となった。

話は元に戻り正平七年足利尊氏は再び朝廷に叛した。この時九州でも筑豊肥では一色、大友氏が尊氏につき、少弐氏は直冬につき宮方になった。

「日向古文書集成」によると島津文書の中に左のごとき史料がある。

大隅国佐殿御方（足利直冬）凶徒等交名注文

税所介一族　　加治木彦次郎一族
祢寝郡司一族　　修理所弥太郎一族
姫木郡司一族　　羽月孫太郎一族
小川郡司一族　　蒲生彦太郎一族
小浜十郎一族　　敷根村預所
廻村預所　　肝付八郎兼重今者死去跡一族
末次一族　　溝辺孫太郎一族

野辺孫七盛忠跡一族　平山因幡前司
弥勒寺執当坊道慶　同舎弟九郎左衛門尉
同舎弟十郎三郎　調所彦三郎敦恒
正八幡宮神官所司分
杉五郎　東郷藤左衛門入道
同荒瀬九郎　吉田左近蔵人清忠
右注進状如件（島津氏久交名注文）

大隅方は大勢が直冬方についた模様である。（小浜十郎一族の子孫が大隅町小浜家で小浜文書を伝えている。）尊氏も薩隅日の島津、畠山はどうであったかこれを案じてその去就を一色、大友氏に訊ねたりした。

畠山氏は尊氏夫人の領地の穆佐院におり、直顕は反尊氏の旗色を明瞭にしていった。幕府方についた島津貞久も老年かつ罹病のため、薩摩、大隅両守護職を子の師久、氏久にそれぞれ代掌せしめた。正平七年七月の大隅畠山攻略も氏久が父に代わって行ったのであった。

二　島津氏の宮方化と畠山氏の衰亡

島津氏は当時相当の勢力があった宮方と戦い又一方では畠山直顕と戦いながら薩隅を保持していた。しかし島津氏としてもこの二つの勢力の中にあって苦境におちいっていた。その窮状を京都の尊氏と義詮に訴えたが足利氏はそれに応ずることができず、島津氏はその頼みにならないのをさとった。

足利義詮は正平十一年八月六日、貞久に対し文書を以て薩摩大隅守護職、その他を安堵するだけで、援兵は出さなかった。

正平十一年（延文元年）の足利義詮安堵下文の中に、初めて岩河村の名が見える（島津家文書）。

本庄　深河院、財部院、多祢島、岩河村、筒羽野村
寄郡　串良院、鹿屋院、大祢寝院、下大隅郡、西俣村、
曽小河院

以上の文書の中に大隅町内岩河村、曽小河院の名が出ている。

さて畠山氏は正平十年九月以来再び尊氏と通じて来た。

島津氏は目前の敵畠山直顕を討とうと思い、氏久は宮方の三条泰季に降り、泰季と一緒に直顕の部将を正平十

一年十月二十五日、加治木の岩屋城に攻めた。直顕は祢寝一族を遣わして之を救援させた。しかし久木崎五郎三郎久春らが入城し、遂に岩屋城を抜いた。十一月十日には加治木本城から兵を出し、三条方本営に攻めて来た。これに対し伊集院久氏、久木崎久春が迎撃した。

その後島津氏は宮方として活躍し、直顕にも打撃を与えた。

当時、筑豊等、北九州方面は懐良親王の宮方の勢力となっていた。このとき肥後の菊池武光は畠山直顕を討とうとして正平十二年十一月、日向に入り直ちに直顕の穆佐城を烈しく攻撃したが降らない。そこで武光はまず直顕の子重隆のいる三俣城（高城町石山）を攻めて遂にこれを降した。以後しばらく直顕父子は遁走して所在も不明となったのである。

ついで武光は志布志地方に行き大慈寺に制札を掲げて肥後に凱旋した。

こうして永年の間、日向大隅に勢力を振るった畠山氏は遂に勢を失ってしまった。結局、薩隅日三州は島津氏が帰順し、畠山氏は勢を失い北九州は懐良親王の宮方の勢力強く一時九州の地はほとんどその支配下に服したわけである。

そこで京都にある尊氏も西征を企図したのであるが、近畿にはなお南朝方の勢力が残存していてどうにもならない中に正平十三年四月二十九日尊氏は病気のため京都で歿した。

直顕の失勢で島津氏もやっと落ち付いたが、氏久はまだ大隅の直顕残存勢力を除くことに努めた。

正平十三年十二月、足利義詮は征夷大将軍になった。幕府は北郷資忠の北郷三百町を取り上げ、球磨の相良貞頼に日州荘内を与えた。正平十四年四月五日島津氏は北郷資忠に大隅本庄財部院を与え北郷の代償とした。結局、島津氏と相良氏は末吉国合原で決戦することになる。（正平十四年十月五日）

さて今まで屏息していた直顕がだんだん勢力を盛り返し、また大隅を回復しようとして赤崎泰次に正平十四年（延文四年）三月大隅国岩河村の内弁済使職を安堵し、十月には祢寝氏に田代道清の旧領を兵粮料所として預けた。そして一方では相良貞頼と共謀して氏久に対抗しようとしたのであった。

（註）大日本史料（旧記小浜十郎家蔵）

大隅国岩河村内、本職等事給主依非御中絶々、早如元令領掌、弥可抽軍忠之状如件、

延文四年三月廿九日　　畠山直顕（花押）

赤崎泰次殿

なおこれに対し貞久はその娘に岩河村南方を譲与している。

大日本史料（旧記、道鑑公御譜中）

譲与　女子祖鑑房分

大隅国本庄内岩河村南方事、右所者一期之後可返付氏久状如件、

延文四年卯月五日　　道鑑

右接目裏判（花押）

正平十五年、幕府は島津氏久に教書を下し、北朝に帰服するように勧めた。それでまた武家方についたのであるが、直顕は氏久に書を贈り、仲良く賊を平らげようと申し出ている。

しかしながらやはり両者は相容れなかった。尾羽打ち枯らした直顕としては島津氏と何とか和睦したい気持ちであったかも知れない、ところが正平十六年十二月遂に氏久は行動をおこし、畠山直顕の党のいる大姶良城と末次城を陥いれた。

直顕は野本秀安に帖佐の城を守らせた。氏久は兵をやりこれを攻めた。畠山軍は本田親重のいる溝辺城を囲んだ。氏久は一度は直顕と講和した。

直顕は加治木の土器園に屯した。氏久は精兵を遣わしこれを破り、直顕は兵を引いて逃げた。そのころ志布志の松尾城には氏久の養子分として新納実久がいたのであるが、大隅から敗退してきた直顕が志布志に駐屯し、松尾城を攻めてきた。

実久は石御堂等で戦って危くなったので援けを氏久に求め、鹿児島から氏久が来援して大いに直顕をやぶった。そこで直顕は櫛間に退いたが、後飫肥に退き伊東氏に援けを求めた。しかし伊東氏が応じなかったのでいたし方なく豊後に逃げたのである。氏久は志布志の直顕のいた故墨に築城し、内城と名付けた。

こうして畠山氏は遂に衰亡したのである。島津氏は宮方について永いこと大隅から追うことの出来なかった畠山氏を敗退させて、島津氏としては大いに勢いを得ることになった。

三　岩河村の大隅正八幡領化

大日本史料六ノ二一〔薩摩旧記〕社司沢氏家蔵文書

（島津貞久、大隅正八幡宮ニ同国岩河村三分二ヲ寄ス）
正八幡宮御寄進之大隅国岩河村参分弐事、於下地者、令知行之、到土貢者、為御供料足之間、可被進済御供所之状如件、
正平十二年九月廿日　　左衛門尉
吉田若狭守殿

以上の史料によると正平十一年足利義詮から貞久に安堵された岩河村は正平十二年九月にはその三分の二を大隅正八幡宮領に寄進した。

なお正平十四年には岩河村南部を貞久は娘の祖鑑房に譲ったとあるから、その南部とは残りの三分の一の事であろう。

一方、畠山直顕は赤崎泰次に岩河村弁済使職を安堵している。貞久は地頭職の事であろうし、赤崎氏の弁済使職は税務官のことであろうから役としては何も重複はしないが、なお正八幡宮領だったりすれば、岩河村には事実上貞久、直顕二大勢力の二元支配が交錯し、住民はその帰趨に迷ったことであろう。

しかしながら後の正平の国合原合戦の時、岩川氏が島津氏に加担しなかったことを思い合わせると、岩河村は反島津の線が強かったと見るべきであろう。

少なくとも正平十四年、岩川氏が島津氏に亡ぼされるまでは反島津勢力であった模様である。

したがって正八幡宮に貢租を出したものか、それを証する史料が今の所見当たらないので不明である。

四　正平の国合原合戦と岩川氏

島津貞久が宮方についたので正平十三年十二月足利義詮は北郷資忠の北郷三百町等日向の荘内を奪い球磨の相良貞頼に与えた。

そこで島津氏久は荘内地方を討つために正平十四年十月初め、日向国に入り、相良貞頼の軍と末吉の国合原で戦ったが島津勢は敗れた。氏久も苦戦のため岩河の手取城主岩川氏に援けを求めたが、岩川氏は日和見の模様で氏久に応じなかった。

蓬原城の救仁郷頼世に頼んでも応じないので志布志の方へ行こうとしたが、串良地方に敵がいるので仕方なく山伝いに百引に出、市成、飯牟礼山を越えてやっと二河に出て、そこから鹿児島に帰った。

その後氏久は岩川氏や救仁郷氏が国合原合戦に氏久の請を容れなかった復讐として、両氏を攻めて平定した。

この役で蓬原城主救仁郷頼世は戦死し、岩川氏は佐多に逃げ、更に種子島へ渡り、屋久島にも移った。

小野姓向井文書によると

向井盛助の経歴の中に「島津氏久公陣救仁院蓬原合戦、丁度此時西撃東激挑戦終討死、従者死者多、爾来救仁郷、岩川為氏久公御領土」とある。

「島津国史」によれば次のごとくである。

国合之敗、公（氏久）求二救於手取城主岩川某一。某懐二両端一観望。又請二於蓬原城主救仁郷某一。某亦不レ肯。公已ニ帰二鹿児島一。旋ニ復挙レ兵北征。先攻二蓬原城一下レ之。又攻二手取城一下レ之。

「薩隅日故跡拾遺」によると

「手取城（岩川、福山通路左三四丁斗在二田中一伝之往昔馬場氏守二此城一）城主赤崎肥前守盛信、其子三郎盛儀其子赤崎泰次盛（一）代々宮方属二畠山修理亮直顕一、世々岩川之領主也、岩川氏住城国合戦以後氏久公攻取之」

「三国名勝図会」によると

「手取城菅牟田村にあり、東北より南は深谷にて、西は広野につづく、堀切等の跡あり、延文四年十月、齢岳公国合原の戦利あらず、救を手取城主岩川某に求む。其両端を持す。又志布志蓬原城主救仁郷某に請う、某亦肯んぜず、公既に鹿児島に帰り、是歳復兵を挙て北征し、先蓬原城を攻めて是を下し、又手取城を下す」

また一書によると、手取城は岩川氏の築城したもので、岩川氏は平信基の五男六郎左衛門尉信家が始め肥後氏を称し、後当岩川城に拠って岩川氏を称するようになったという。

岩川氏は肝付氏と気脈を通じ南朝に孤忠を致した。

手取城というのは呼び方が恐らく「しゅじゅじょう」ではなかっただろうか。城跡の近くに現在「しゅじゅじょんたんぼ」と呼ばれる田がある。これは手取城と関係があると見て「しゅじゅじょう」が正しい呼称であろう。

城跡には一段高く本丸とおぼしきものがあり、その横に身の毛のよだつ絶壁があるが、これは人工的のものである。城としては東か南からが攻め易かったのではないかと思われる。

なお馬場氏古系図によると

「馬場氏（五十町村）馬場主膳正居元応元年（一三一九）比中之内村手取城領、赤崎肥後守―三次郎―泰次郎」とあり、肥後守盛信―盛儀―盛一となっており、前述の「薩隅日古跡拾遺」の文と多少相違もある。

岩川氏と馬場氏との関係、岩川氏と赤崎氏との関係、馬場氏と赤崎氏の関係などはっきりはしない。

とにかく赤崎泰次の文書は小浜文書として伝えられているので小浜氏とも関係ありそうである。馬場文書や「薩隅日古跡拾遺」によると馬場氏と赤崎氏は同系統のようにも思われる。

恐らく岩川の領主でそれが次第に島津氏に侵されて来た。岩川氏の部下の馬場氏が馬場城（現在の岩川八幡神社境内）主で、赤崎氏が手取城主として配置され新城とも関係があったのではなかろうか。

とにかく史料が断片的でしかと断定できない。

（註）馬場文書によると同家の系図が書かれているが、徳川時代以前のものは時代その他甚だ判断し難いもので、一応省略する。

なお「都城史蹟考」によると岩川氏について次のとおり書かれている。

「岩川城＝所在大隅町中之内桂

当城の創建は詳らかではないが岩川氏の築城であると伝えられる。岩川氏は平信基（種子島男爵家の始祖）に出ずる名門である。信基の五男六郎左衛門尉信家は始め肥後氏を称していたが後岩川城に拠って子孫岩川氏を称した。吉野朝時代は肝付氏と気脈を通じて勤王の軍を起こしたが島津氏に破られて後、子孫種子島に移されたという」（吉野朝時代は南北朝時代のこと。畠山直顕に従い、結局、島津氏久に討たれた）。

さて現在岩川氏という姓が非常に多い屋久島に岩川氏は最後に逃れたと思われるので屋久島に次のような照会をしてみた。

1、岩川氏の上陸地点、その足跡等の有無。

2、系図、文献の有無。

3、現在の岩川姓の戸数、人口等。

これに対し筆者宛の返書によると、まず熊毛郡上屋久町宮之浦、上屋久町観光協会、事務局長岩川貞次氏（五八歳）から昭和三十七年九月八日付便で……

前文省略……

此の屋久島は上屋久町は人口一万四千、戸数三、〇〇〇

の内に岩川姓は九十戸あります。屋久島には判然とした歴史がありません。無いのではなく判らないのであります。なぜわからないか。それには幾つかの理由があります。

1、文明元年種子島時氏の代に従来の律宗を改め法華宗を入れた時、彦火々出見尊外六大神を祭神とする益救（ヤク）神社の宗社、摂社、末社合せて全島十八社及び寺院を灰燼に帰させ由緒ある文献古文書縁起録一切煙滅されたのであります。

2、宝永二年当町宮之浦鍛治屋（カンヂヤンヨ）川に於いて鉄砲製造宮之浦川唐船淵を根拠地として島津氏が密貿易をやったことが徳川陣営の探知をおそれ島民の系図、武具、文献記録家宝一切を没収焼却した事件。

3、明和三年の廃仏棄釈の文献消失事件。

4、その他数件の事件あり。

以上の理由により、断片的極少の記録等を残すのみで御趣旨の岩川城落城に関する記録は当町においては一切不明であります。

ただ伝説に吾々岩川の祖先は偉い武人で一族の大将は屋久町の平内に上陸したとの事を幼少の折聞くものでした。

それも寿永の「源平盛衰記」と岩川落城と混同して何れが正であるかも判らぬまゝに……

屋久町の方に御照会下さい。屋久町には何かつかみようがあるやも知れません。

手取城跡（東側田圃より望む）

取急ぎ御返事まで　草々

次に屋久町役場岩川真琴氏より昭和三十七年十一月十四日付の便で

さきに御照会になりました件、左記のとおり回答申しあげます（一部省略）。

記

一、岩川氏上陸地点その他足跡等については詳かであり

ません。
二、系図文献はありません。
三、戸数二六〇（二、四五四）、人口一、二一三（一、〇九七二）（　）内数字は町内総数。

五　岩河村氏久領となる

貞治二年（正平十八年）四月十日島津貞久より氏久への譲状によると、

「大隅国本庄、多祢島、岩河村、財部院（資忠分）寄郡下大隅郡、大祢寝院、鹿屋院、串良院、西俣村（女子分）百引村（氏忠分）寄郡深河院、筒羽野村、日向国高知尾庄」となっている。

貞久は正平十八年七月三日、九五歳で死去した。その死の前四月十日に所領を師久、氏久に譲ることとし、師久には薩摩国守護職、薩摩郡地頭職其他、氏久には大隅国守護職と前述譲状の土地を譲った。

本庄内に岩河村というのがはっきり出て当地方は氏久領となり、南方（岩河村）は延文四年の譲状のとおり女子祖鑑房の所領分で北方は氏久の直領であった。

京都の足利氏は九州では宮方が勢いが強く武家方が不振なので将を遣わすこととし、先に斯波氏経を下向させたが利あらず、正平十八年に九州から敗走した。

そのうち正平二十二年十二月将軍義詮は没した。ついで執事細川頼之によって九州探題は今川貞世了俊をあてることとした。

正平二十三年十二月新たに足利義満が征夷大将軍となった。

今川了俊は建徳二年二月弟の仲秋、子の義範や京都にあった九州出身の将士を率いて京都を出発した。

当時九州では征西大将軍宮懐良親王は、大宰府に鎮西府を置いた。そこで了俊は九州下向第一の目標を大宰府としたので、諸方の豪族に檄を飛ばし、仲秋、義範らは大宰府を攻め、文中元年八月十二日遂に大宰府は陥り、懐良親王はやがて肥後菊池城へ退去した。

今川了俊は肥後の菊池勢の後方をおびやかすために薩隅日の諸族をしきりに懐柔し、文中三年十一月谷川に到着、天授元年三月愈々菊池攻略の為肥後の国に進攻、山鹿に陣を布いた。そして一方、菊池方では、武光の死後武興が若くして一族を率い、懐良親王、良成親王を奉じ、今川勢を迎撃しようと準備していた。

了俊は七月菊池城にとって重要な位置にある水島に進

攻し、大会戦を前にして大友親世、島津氏久、少弐冬資を招いたので、それぞれ相会した。

それで島津方も了俊に加担した。その間、天授元年野辺刑部大輔盛久に日向国櫛間院、大隅国深河院北方の教書を賜るよう氏久は、推挙状を書いた。日向国富山彦五郎は安久、和里木、秋永等の地を求めた。氏久はこれも推挙し、了俊方に取り入った。

ところでその後了俊は冬資を疑って八月二十六日弟仲秋に冬資を刺殺させた。このことがあって大友、少弐、島津共に今川のために尽くそうとしているのに、了俊がこの挙に出でたので、これから少弐が了俊に反抗し、島津も今川に反するようになった。

こんな事態になったので、了俊は折角菊池城に迫りながら戦うことが出来ないで肥前に退いて行った。

この後氏久は宮方に従った。

今川満範は天授二年七月、日向に進攻しようとして祢寝久清を誘った。久清は氏久との仲にはさまっていまだ態度をはっきりしなかった。

八月には京都の足利氏は島津氏久の大隅守護職、伊久の薩摩守護職をやめさせて了俊の兼領とした。

いよいよ満範は真幸、北郷、野々美谷を侵攻しようとした。今川勢についたのは肝付、伊東土持等、薩摩大隅日向の将士六十三名であった。

そして今川勢は大挙北郷義久の居城、都城の都島を攻めようとして本原に来た。都城は天授元年北郷義久が築いたもので、城中には義久、樺山音久、資久、平田氏、工藤氏等七十余騎がこれに籠って防戦した。

島津氏久は当時志布志にいたが都城救援のため志布志を出て天ケ峯（梅北）に到着、財部氏、肝付久兼等加治木、伊集院、伊作、鹿児島、下大隅、大姶良等の諸軍を合わせて荘内に向かい天授三年二月二十八日平長谷に進んだ。

氏久は軍を三つに分け新納実久を左翼（月一揆）、本田重親を右翼（杉一揆）の将とし氏久自身は小一揆騎兵合せ八百余人進攻して蓑原に向かった。

北郷義久は氏久来援を聞いて大いに気勢をあげ三月朔日満範軍と戦い、その二弟は戦死し、義久も負傷し退いた。

氏久は平長谷を渡って蓑原に向かった。

氏久が先頭に立って進み、今川勢と戦い、相良氏、伊東氏の将をそれぞれ斬った。結局満範軍は三俣に敗退した。

三月三日満範軍はまた蓑原に帰って来て戦った。四月二日には肥後兄弟、志々目氏等戦死したため満範軍は都城を放棄して下財部、野々美谷、三俣方面に退却した。

この戦いで懐良親王は六月二十九日樺山音久に御感の令旨を与え、その功を賞された。

九月になって本田重親の甥氏親は大隅に姫木城、清水城を破ってこの地方の敵を駆逐しようとして満範も土持栄勝等と共に戦い、後真幸に出ていった。

その後今川軍は筑後では勢力あり、薩隅日の諸族も次第に了俊に従うものが多くなって島津伊久、氏久共に武家方についた。

しかしながら島津氏と今川氏の関係は今までのいきさつがあるのでよく融和出来なかった。それで結局了俊は祢寝氏に命じて氏久の領西俣大姶良城を攻めさせた。そんなことで伊久もまた了俊に反することになった。

六　今川満範と岩河城

そのころ満範は荘内北郷城ヶ崎（都城市川東）に居り都城を伺っていた（天授六年十二月）。

弘和元年六月二十六日、今川氏の将慈冬が都城を侵攻し、村落を焼き早稲を刈って城主北郷義久を苦しめた。

七月四日満範は末吉に攻め入って末吉城を取り、兵を置き岩河城と相呼応して氏久の志布志からの都城援助の連絡路を断った。

（この岩河城というのは手取城のことか、新城のことか、馬場城のことか、あるいはそれらの総称か、はっきりしない。）

七日は更に池平（中郷）を取り、土持衆に守らせ、十七日は進んで都城に向い、また早稲を刈った。

宮古城がなかなか陥ちないのでその翌日満範は軍をかえした。そこで北郷義久は城を出て追撃したが勝つことが出来なかった。

了俊はその後宮方の諸城を陥れ、弘和元年六月には遂に菊池城の本拠である隈部染土を陥れたので、宮方の勢力はこれから衰えていった。このころ島津氏久、伊久は了俊に従っているが、氏久の態度は頗るあいまいで、了俊も氏久を討つため大隅に入ろうとするようになった。

（弘和元年九月氏久は北朝についた）。

このころ征西将軍宮は元中元年正月、牛屎元息に令旨を与えられて、その加担を賞されて、日向深河八十町、岩河八十町、大隅菱刈院地頭職三百町、祢寝地頭職三百

町、薩摩鹿児島院郡司分七百町、山門院三百五十町の地を与えられた。

元中二年春正月相良前頼と島津氏久、伊久は相和し探題に叛し、また宮方に加わった。了俊と今までよかった祢寝氏も突然宮方に帰順し南九州は続々宮方になって、宮方は勢力を盛り返した。

元中四年五月四日、氏久は鹿児島で没した。その子孝久継ぎ、孝久は後元久と改名し、伊久と共に行動した。了俊は島津元久、伊久の討伐と薩隅の経営に努め、日向大隅にその与党一揆をつくらせ、相良氏、祢寝氏を動かした。

元中九年南朝の後亀山天皇は北朝の後小松天皇に三種の神器を授けられ、ここに南北両朝は合体した。

明徳四年、元久は高城領主和田氏、花ノ木領主高木氏に日向梶山城を守らせた。応永元年二月今川貞兼は梶山城を攻めた。都城領主北郷義久は其子久秀、忠通を派遣し援助させた。元久も兵を出して助けたが力及ばず、忠通戦死し三月七日久秀等も戦死し、和田、高木は城を棄てて逃げたので元久も兵を帰した。

七月元久は野々美谷城を夜襲してこれを陥し相良氏を追った。樺山音久が野々美谷城によることとなり、今川貞兼は兵を撤去した。

今川了俊は島津氏と抗争を続けている中に、応永二年八月探題職を免ぜられて帰東したのでそれから形勢が変わることとなった。

第三章　室町時代

延元三年（一三三八）八月十一日足利尊氏が室町幕府を開き武家政治を開いてから天正元年（一五七三）七月七日室町幕府倒壊まで約二百三十余年間を室町時代という。以下、おおむね「島津国史」を中心にして記述する。

第一節　島津久豊と恒吉

室町幕府では応永元年足利義満は将軍職を子義持に譲り、太政大臣となった。その翌応永二年、幕府は鎮西探題今川了俊を召喚した。その後任には応永三年、渋川満頼が任命された。

当時九州はおおむね足利の命に従ったが実際は諸族が抗争した。両島津氏は今川氏に対しては共同戦線を張ったが応永七年に伊久と元久は不和を生じこれから相抗争した。

応永八年、元久は鶴丸城に行きそこで伊久と戦った。その間に本田忠親は先公から両者の後見を依頼されていたが、その両者の仲直りが叶わず、伊久の子で元久の養子となっていた久照も離縁されたりした。本田元親はやむなく又三郎久照を大将に推して兵を率いて志布志を攻めた。あたかも城主新納実久が他出のところを攻められ、城は空であった。この時古老が計って紙旗をたくさん立てて兵が多いようにいつわって示した。このため敵は進まず、この時実久は急ぎ帰って兵を指揮配置し、犬馬場に出て川を渡り忠親軍を撃破した。このため本田忠親は兵を撤収した。

その後応永十四年四月六日伊久は死去した。それで幕府は応永十六年九月十日元久を薩摩守護職に任じた。ところが間もなく応永十八年八月六日清水城で元久も死去した。

元久の没後世継がないので伊集院頼久はその子初犬千代丸を嗣子にしようとしたので元久の弟久豊は自立して元久の後を継いだ。

このころ久豊の勢力範囲は鹿児島・谷山・指宿・溝辺・田万里・敷根・廻・末吉・恒吉・市成・平房・百引・高隈・鹿屋・大姶良・下大隅・財部等にすぎなかった。

この勢力範囲の中に恒吉の名ははっきりでているが、南北朝時代ははっきりでていた岩河村の名が出ていないのは恐らく末吉に含まれているからであろうか。

応永十九年九月、伊東祐立が久豊の日向にいる婿を攻めたので、久豊は軍を日向に進めた。源藤村で敗れたので穆佐高城に来て更にまた末吉に退去した。

応永十九年冬十一月二十四日、肝付氏が鹿屋周防介を鹿屋城に攻めたが久豊は吉田氏、蒲生氏等を率いてこれを救うことになる。その援軍が到着しない中に城は陥った。

そこで恒吉、百引、高隈等の衆がこれを救い、肝付の軍と戦った。久豊は大兵を率いて市成に到着すると肝付軍はなだれを打って逃げ去った。大姶良城は鋭兵二百を出してこれを撃ち敗った。

これは久豊が襲職してから初めての勝ち戦であったから、その喜びは一しお大きかったであろう。そこで市成領主山田久興等にはそれぞれ恩賞を与えるところがあった。

註＝（応永八年十一月山田久興に大隅市成南持富を与えていた）

第二節　島津忠国末吉に移る

（山田忠尚恒吉の地を領す）

久豊は応永三十二年正月二十一日に死去した。その子忠国・用久・季久・有久・豊久があった。守護職を忠国（九代）が継いだ。同年八月廿八日将軍義持から薩摩・大隅・日向の三ヶ国守護に補せられた。

久豊の時代はようやく薩摩地方を抑えてきたが忠国の世になって永享四年各地に反乱が生じることとなった。これらは国一揆とよばれた。

忠国はこれを自分の手で抑えることが出来ず、弟の薩摩守用久に守護職代理をさせ国一揆を取り締まらせ、忠国は鹿児島を出て末吉に移り住んだ。

永享四年十一月二十四日、用久は山田忠尚に大隅恒吉三町の地を領させた。忠尚は市成領主山田久興の子である。

永享七年六月二十三日、用久は山田忠尚に小河院恒吉六町花田、平房五町を領させた。

恒吉は応永年間に山田式部少輔忠通入道が城主となったといわれている。

旧記雑録前編卅六に次の史料がある。

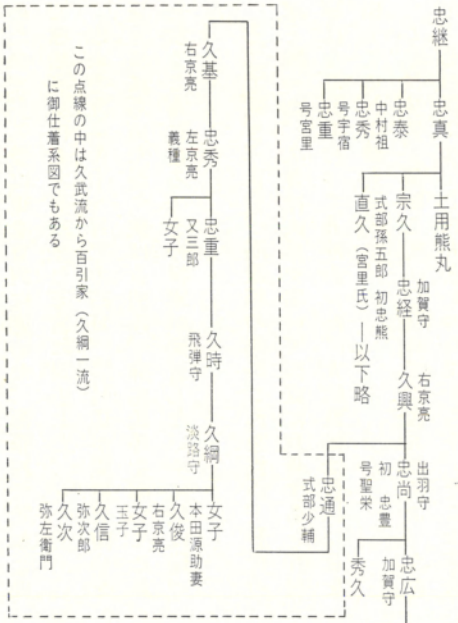
嶋津御庄大隅方小河院之内恒吉之村六町并花田、平坊、五町、為新所、所充行也、早任先例、不可有領知相違之状、如件

永享七年六月廿三日　　好久（花押）

山田殿

（五味先生資料提供）

大隅町出身で大阪府枚方市在住の山田氏後えいである山田勇氏所有の「山田系図」を記す。



第三節　足利義昭事件その他

嘉吉元年三月十五日、櫛間の永徳寺を囲んだ。義昭追討の命を幕府から受けた島津忠国は五将に命じ、足利義昭を捕えようとしたわけである。

これには五将の外に山田忠尚、牧某、恒吉某も関係している。義昭事件が一応片付いて将軍義教は島津忠国はじめ五将にそれぞれに賞賜した。恒吉関係の山田忠尚には嘉吉二年三月十八日小川院百引六町を領させた。なお、さらに忠国には琉球が与えられた。

ところが嘉吉元年六月二十四日、将軍義教が赤松満祐に殺され、その子義勝が後を継いだ。足利義勝は間もなく嘉吉三年七月に死去した。

註＝（嘉吉元年赤松則祐四世孫教康播州より志布志に来て救仁院松山村中島に遁入した。即ち島津氏と赤松氏との特別な関係があった模様である）

さて永享四年国一揆に当たり忠国は、守護職を弟に代理させて末吉に隠退していたが、嘉吉元年再び鹿児島に帰った。そして用久を追い立て、用久は谷山ににげた。忠国と用久はこのようにして相抗争するがそのうち文安五年十月には両者和解した。

宝徳二年、足利義政が征夷大将軍となった。ところで義政は先に義教が義昭を殺したことを憎み義昭を殺した人たちを今度は逆に罰するということになった。「有為転変極りなく、禍福はあざなえる縄のごとし」とは全くこのことであろう。

義昭を殺したのは野辺盛仁であると聞き、義政は盛仁を誅しようとした。盛仁は罪を鬼塚備中守に帰し、その主君北郷持久に罪が及んだ。そして出郷持久を討つように幕命が出た。それで忠国は北郷氏に同情し、その所領を没収し、三俣院高城に閉居しているように幕府の体面をつくろった。

これに関連して志布志地頭和泉光珍に対してはその所領救仁郷?、深川村の地を没収し、更に北郷に罪を着せた野辺盛仁に対し、腹にすえかねたのであろうか盛仁の所領櫛間を没収した。もっとも後七年経って盛仁の旧領は安堵された。

長禄二年、忠国は新納忠続に日州飫肥を与え、救仁院は元のように領させた。

ところで忠国が先に和泉光珍と野辺盛仁の領を奪って

これを他の臣下に与えたことに対し、子の立久と島津用久はこれを諫めた。忠国はつむじをまげて遂に加世田別府に去り、立久が鹿児島にいて忠国父子の不和が続いた。

しかし文明二年正月八日忠国は加世田別府で死去する前に立久は忠国を見舞い守護職を親しく譲られた。忠国の子は立久等十三人あり、その中久逸は伊作家をつぎ、伊作家久逸となる。

応仁元年、室町幕府の有力者で守護大名の代表者であった細川勝元、山名宗全がそれぞれ東西両軍の大将になって全国の守護大名が二手に分かれて争ったいわゆる応仁の乱がはじまった。

しかし、薩摩の島津立久は細川勝元がしきりに招いたが、容易にこの渦中に入ろうとはせず、大体において静観して通したのである。

文明六年四月朔日立久死去、忠昌が跡をつぐ。忠昌十二歳、この後同族間の抗争が打ち続き波乱が多かった。

一　桜島の大噴火（文明溶岩）

文明三年九月十二日桜島黒神村が大噴火し、相当な惨状を呈した。

文明八年九月八日地震、九月十二日また桜島噴火、三年の時より烈しく大隅の方東南二里余りの海中を埋め数日灰が降り続いたといわれる。

財部の正寿寺にもいたことのある桂庵禅師は薩南学派の祖で後徳川幕府の御用学問となった朱子学を明から伝えた日本歴史上の人物である。その桂庵禅師はこの桜島噴火をみて

烈火曽焼一島来　桑田碧海総休猪
去年潤底革深処　七里平原沙作堆

末吉郷の七里原から福山牧之原へかけては、桜島の東四里半に位し従前山谷峡谷の地であったものが降灰のために白沙（シラス）ばかりが一面つづく平野となった。

現在文明の溶岩の所は大分風化され、植物等も繁茂し、普通の土地と変わらないくらいになってビワ栽培等が行われている（「財部町郷土史」参照）。

二　恒吉領主山田聖栄

文明七年六月十五日、島津忠昌は恒吉領主山田聖栄忠尚を召し宴をはった。忠尚は島津氏歴代四主に仕え、行年八十五歳で「山田聖栄自記」を書き残した。「山田聖栄自記」は郷土史界で貴重な文献とされている。恒吉にかかる英主がいたという事に深く思いを致さねばならない。

三　霊岩山仙遊寺槻野岩屋観音

日向国救仁院志布志郷槻野村西久保崎に霊岩山仙遊寺槻野久保崎岩屋観音が開基された。開基日は文明十八年丙午二月彼岸日となっている。

その時の太守島津九代忠国大岳公治下で地頭は新納近江守忠続、住僧名不詳。洞窟内にある三基の墓碑からして三代百年ほど住僧がいたのであろうかなどといわれたりしている。

第四節　伊作久逸の乱

（第一、第二飫肥役）

飫肥領主新納忠続と櫛間領主伊作久逸とあることによって対立を生じ、ややもすれば兵を交えるようになった。それで忠昌は伊作久逸に伊作に帰るように命じたが久逸はこの命を受けなかった。

文明十六年十月二十六日、久逸は兵をあげて飫肥を攻撃した。忠昌は北郷敏久、肝付兼連等兵三千余騎を以て櫛間を撃ち、飫肥を救援させた。

飫肥城は北原軍、久逸軍と通じ伊東祐国に包囲され、数ヶ月を経た。文明十七年六月忠昌は自ら兵を率いて飫肥救援のため末吉に来た。

六月二十一日忠昌軍が伊東、久逸、北原連合軍を敗退せしめ久逸は櫛間に逃げ帰った。二十九日病軀をおし医者のとめるのもきかず出征した忠昌も櫛間につき、久逸は遂に七月二日降伏した。忠昌は久逸を伊作の旧領に帰し、四日に末吉に凱旋し、八日に軍をおさめて鹿児島に帰った（「島津国史」による）。

第五節　岩川新納領となる

文明十八年伊作久逸の乱後、新納忠続は飫肥を去って志布志に帰り、別に末吉、財部、救仁郷を与えられた。それで岩川も新納忠続領となった。そして櫛間飫肥は国の北門でその任重く、冬十月十九日島津忠廉を櫛間飫肥の領主とした。忠廉の第二子忠廉は帖佐平山城におり、平山と名乗ったが救仁院に来て松山松尾城を占拠した。

明応四年（一四九五）伊東方と島津方戦い、まず島津方志和池城陥落し、高城城主新納越後守は志和池城主志和池忠常を救けようとして戦死した。

伊東、島津は講和し、三俣院千町は伊東尹祐領となった（「島津国史」、「志和池史」等参照）。

第六節　三州大乱

明応四年四月十五日、忠昌は櫛間城主島津忠朝に串良を攻め落させた。その功により、串良を忠朝に与えた。忠朝はその叔父平山忠康に串良城を守らせた。

永正三年、高山城主肝付兼連は、忠昌の命をきかず、その弟兼光はこれを諫めたが聴かれず兼連の子兼久は叛旗をひるがえすに至った。

八月六日、忠昌は自ら将となって兼久を討とうとし、新納忠武は志布志の兵を率いて肝付氏を救った。しかし忠昌は戦って勝たず、十月十二日、兵を引き揚げるのやむなきに至った。

忠昌は多病であったが、療養する暇もなく、相次ぐ叛乱の中で永正五年二月十五日、夜遂に自ら命をたつことになった。忠昌の後その子忠治、忠隆、勝久三人が相ついで守護職をついだが、大抵若くして世を去った。この三代はいずれも年少の守護職で、統制力をもたず、ために国内大いに乱れた。まさに島津氏暗黒時代といわれた時代であった。

永正十六年十一月二十七日には伊集院尾張守が兵をあげて反乱をおこし、曽於郡城（橘木城）に拠った。十二月八日、新納忠武は兵を派遣してこれを助けたが、島津勝久は肝付兼演等を遣して尾張守を攻撃させた。この年もまた三州の大乱となった。

永正十七年、島津忠朝は平山忠康の子近久に串良城を守らせた。八月一日、肝付兼久の子兼興は串良城を攻めた。近久はこれを撃破した。八月二十一日、勝久は曽於郡城（橘木城）を攻め、冬十一月二十七日、伊集院尾張守は降伏した。

大永元年八月十八日、島津忠朝は鹿屋城を攻め、勝利を得て還った。

大永元年、都城、安永の領主北郷忠相は樺山氏に代わり野々美谷を領し、北郷尚久に野々美谷城を守らせた。

このころから伊東、北原両氏攻守同盟をし、しきりに諸県、南那珂を攻略した。

大永三年十一月八日、伊東尹祐は、北原氏と野々美谷城を攻め、尚久戦死し、伊東氏は野々美谷城を取り北原氏領となった。このようにして明応四年以来、三俣院千町を領する伊東氏は伊東の八外城をますます固めて行った。ところでこの野々美谷の戦いで伊東尹祐は北郷方の流れ矢に当たり戦死した。

大永四年には伊東方は尹祐の復警のため、北原氏はもとより島津方の新納氏や山田氏までも誘い込んで、四氏連合し北郷氏を攻めた。その大軍に対して北郷忠相は八〇〇名の寡兵でよく防戦し、遂にこれを撃退したのである（「島津国史」、「志和池村史」）。

第七節　槻野の戦

大永三年、新納近江守忠武は、しばしば命にさからい叛逆を謀ったりした。

（註＝永正三年八月肝付を助ける。永正十六年十二月伊集院尾張守の叛を助ける）

それで勝久は深く憤り、伊知地重周、吉田某を将として大軍を発し志布志を攻めた。

忠武もまた大軍を率いて月野に向かい、そこで戦った。両将兵を指揮して挑戦したが、忠武の兵勢が非常に強く、伊地知、吉田の軍は大敗し、七三〇余名が戦死した。二人は兵を収めて鹿児島に帰った。月野伊屋松の千

人塚はこの戦の戦死者の塚であると伝えられている。（垂水伊地知系図によると重周（三十五歳）は月野村戦死とある）

塚は直径十五m、高さ二mくらいの塚で、畑の真中に残っている。

第八節　岩川島津忠朝領となる

北郷忠相は大永三年、野々美谷の役に当たり、島津系でありながら北郷氏を攻めた本田氏を攻撃することになり、大永六年、曽於郡各地を攻め陥した。

島津勝久は大永六年十一月、伊作忠良（久逸の孫）の子貴久を養嗣子とした。貴久はその時十三歳、父忠良は貴久の後見として国事を見た。貴久は島津氏中興の人、三州を統一した人である。

大永七年三月、勝久は家督を貴久に譲り、伊作に行って出家した。忠良も剃髪して黒谷軒日新斉と号した。

この間島津実久は勝久を通じて忠良との離間を計り、勝久は還俗して、これから勝久、実久対日新、貴久対立し、薩隅を混乱に陥れた。

話はひるがえって享禄元年（一五二八）月不詳、志布志郷槻野太田明神本地仏十一面観音像ができた。

話は元にかえって享禄二年十一月、本田親尚は前から不和であった北郷忠相と大隅春山原に戦いかえって敗走した。享禄三年、本田兼親は大隅曽於郡を取り返そうとし北郷久利を攻め、久利は敗北した。

一方、享禄元年五月一日伊東氏と新納氏戦い、伊東軍敗れた。両氏ともに北郷氏に援けを求め、先に同族でありながら北郷氏を攻めた所の新納氏を北郷氏は攻め、伊東軍を援け、新納氏を破った。

（註＝忠相は新納氏を援けようとしたが部下の大久保、有田両氏の勧説で新納氏を攻めることになった。この時の北郷氏の拠点は下長飯の城ヶ尾で兵八百を率いて陣していた）

六月二十日、勝久は北郷忠相に恩賞として財部院を与えた。

天文元年、島津忠朝、北郷忠相、北原久兼（真幸領主）同盟して伊東義祐軍と高城の不動寺馬場の大決戦となり、高城々主八代長門守は石山越で戦死し、伊東方数百人戦死、伊東方は落合兼佳を高城城主とした。天文三

年（一五三四）伊東方高城城主落合兼佳は事情によって北郷氏に内応し、城を明け渡した。北郷忠相は労せずして、他に山之口、梶山、勝岡諸城を入手した。

天文四年八月から七年七月二十六日まで満三ヶ年島津忠朝（飫肥領主）並びに北郷忠相の両軍は新納氏領の攻略をなした。

天文四年八月十四日、北郷忠相、島津忠朝と末吉、松山、梅北を攻めた。伊東氏と北原氏は新納氏を援けた。

島津忠朝は忠吉に串良城を守らせた。天文五年七月、肝付兼興が串良城を攻めて来た。新納忠勝は兼興に応じて串良飫肥に通ずる道路を全部遮断した。それで串良城はますます困窮して来た。忠朝は忠勝に告げてその次男忠常に串良を与えるから城中の衆を皆救ってもらいたいと願った。忠勝はこれを了承した。ところが兼興は忠吉を殺し串良城を陥れた。結局忠勝は忠吉等を救わなかったわけである。それで忠朝は忠勝を大いに怨み、八月十一日、志布志を攻めて来た。十月十八日、忠朝はまた志布志を攻撃し、市井を破り、横峯で戦い新納氏に勝った。

さてこの間、実久は勝久と離反し、勝久が帖佐に走った後、実久は都城の北郷忠相、飫肥の島津忠朝、清水城主本田董親と結んで志布志に行き、高山の肝付、根占の祢寝氏も一緒になって新納忠茂を引き入れようとした。しかし忠茂は父忠勝の従前の忠朝、忠相らとの関係から彼らの誘いをしりぞけた。そこで実久等はまず新納氏を倒そうと考えた。

天文六年三月三日、北郷忠相は岩川新城を攻め陥した。北郷氏領であった財部院が新納氏領となっていた。天文七年正月三日、忠相はまた財部院を取り返した。二十九日、島津忠朝は新納氏領大崎城を陥れた。二月二日、忠相は梅北城を抜いた。忠朝は二月二十日、安楽城を抜き、四月二日、又夏井砦を抜いた。七月二十三日には末吉、松山城を攻め陥した。

更に肝付兼演、樺山幸久と合して志布志城に迫った。こうしてついに七月二十六日開城降伏した新納忠茂は佐土原に逃れて伊東氏に頼った。忠勝は二男忠常をつれて飫肥に去り、忠朝に頼った。忠朝は櫛間の市木を忠勝に与え、忠朝は救仁院から末吉、松山を配下に入れたので、当時末吉（岩川）は島津忠朝の所領となった。

忠相は財部院を支配し、更に梅北と忠朝領高城を交換し、忠相は高城に居城した。

第九節　岩川新城の戦と恒吉、槻野

当時、岩川は末吉郷に属し、中之内村、五十町村、岩崎村を総称して岩川といった。

一　八幡神社

八幡神社の棟札によると「天文四年檀越藤原重忠、当地頭伴兼豊造立」とある。当時岩川は新納領であったはずである。伴氏は肝付氏のことであるが、藤原重忠が誰か不明である。

二　恒吉城略史

恒吉は往古恒吉大膳亮の所領であったといわれるが、その時代の事蹟は詳かでない。

前述山田勇氏所有の山田氏系図によると久興の次男に忠通がいる。聖栄忠尚の弟である。山田氏は応永以来、忠通から久時まで恒吉地頭代官職を相伝した。その間、地頭職は山田本宗家が相伝したものである。天文十三年、山田忠時の時、市成を失い、久時も恒吉城を失った。

山田浜路守久綱　譜中

天文十三年甲辰恒吉城江退去　同十四年乙巳同城茂肝付河内守被攻以没落　南(注)持留村江退去　（注、現大崎町持留並野方）

その後の恒吉城略史は次のとおり。

○天文十七年（一五四八）

正月北郷讃岐守忠相が恒吉城攻略、北郷領となる。

○弘治二年（一五五六）三月

肝付兼続が奪取、肝付領となる。

○永禄元年（一五五八）二月

北郷蔵人頭久厦が恒吉城を占領。同三月十九日北郷勢は肝付氏の逆襲で大敗、肝付領となる。

○天文四年（一五七六）

北郷時久領となる。

三　槻野村

天文七年までは救仁院は当然その沿革のまま推移し、最後は新納氏に領せられた。したがって救仁院槻野村は

救仁院の運命に従ってきたと見るべきであろう。

四　岩川新城の戦

「島津国史」又は「県史」又は北郷忠相譜中によると天文六年三月三日北郷忠相岩川新城を陥れ、二千余人を生け獲ったとある。「忠相公御代日記」によると、このとき「牛馬、雑物、不知員候」とある。天文六年は当然北郷氏と新納氏の不和の頃であり、北郷氏により新納領岩川新城が攻められたのであろうか。

この新城は現在大隅町岩川新城部落の前方の丘で、城跡は現在では一帯畑となっている。約一町歩くらいの広さでほぼ円状であるが、ごく細くなった西の部分は笠木方面の台地につながっている。馬乗馬場の跡もある。余り要害堅固とは見られない。下から比較的容易に攻められたのではないかというような傾斜のところもある。

現在城跡は鶴田氏の個人所有の畑となり、所々に遺構が見られる。城跡の畑の真中あたりには石弾が沢山出土した。その城の下の鶴田家近くに軍神の石碑が立っているが、城跡から下に移したものといわれている。

「薩隅日故跡拾遺」によると

「中之内村福山通路右二丁斗、天文七年三月二日北郷氏攻ニ取岩川新城一、取ニ男女三十人許一城主税所氏子孫住ニ都城一、後為ニ家臣一」

これによると天文七年となっており、実久を中心として忠朝、忠相らが激しく新納領を攻めた年ではあるのであるいはこの年のことかも知れない。

また「三国名勝図会」には、

「土成村にあり、小城なり、税所某の居城なり。相伝う天正七年北郷相久是を攻めて、男女三十人許殺」

次に「薩隅日地理纂考」には、

「税所某居城ナリシヲ天文三年三月七日北郷常陸相久ニ襲ハレ落去ストイフ」

とそれぞれ史料の年号が異なり、天文三年、天文六年、天文七年、天正七年の各説があるが、いずれにしても忠相時代の事には間違いないと思われる。税所氏の後裔がどこに住んでいるか不明で都城市内にも蔵原町系甲斐元系、志和池系、高木系等税所姓は残っている。

第十節　長倉上総守兄弟と飫肥合戦

新納氏の講和で一時的に平和が見られた日向方面では、天文九年、穆佐城主長倉上総介とその弟長峯地頭長倉能登守とが伊東氏に叛したので伊東義祐はこれをうとうとした。長倉氏は北郷忠相に援けを求めたが、忠相はこれに応じなかった。救援があれば川南の地をあげようという事であった。

飫肥南郷、福島、志布志、梅北、末吉（岩川を含む）の領主である島派忠広（忠朝の子）に援けを求め、忠広はこれに応じた。八月二十八日、三千余騎を率いて長倉氏を救おうとした。九月三日、義祐と宮崎火柱に戦って却って忠広は敗れた。

長倉上総守と同能登守、末弟治部少輔は敗戦後末吉の樋川口、深川口、岩川口に隠れ住んでいたが、兄二名は上意により討たれ末弟は助かった。

天文十一年三月、島津忠広は蓬原を攻めた。北郷氏に援けを求め、忠相は次子左馬助忠考を派遣しこれを助けた。肝付氏と鹿屋野で戦った。

一方、天文十二年には伊東義祐は島津忠広の家臣某の守る鵜戸山城を攻め、三月十八日陥落した。

（註＝この年八月にはポルトガル人が我が国に鉄砲を伝えている）

話は大隅に転じて山田忠時は天文十三年に市成を島津貴久に献上した。貴久はこれを肝付兼続に与えた。

（山田系図による）

ところで島津対伊東の対立の本論に立ち返ると、天文十三年大友氏は定恵院を使者として島津忠広と伊東義祐を和解させようとしたがとてもうまく行かなかった。

天文十四年正月二十六日、義祐は飫肥を攻めにかかった。忠広は忠隅に鬼ヶ城を守らせ、また櫛間等諸城も守らせた。義祐は飫肥を襲撃したが忠広は之をよく守り、新納忠勝が来援し義祐を撃破した。義祐はまた鬼ヶ城を攻めたが勝てなかった。正月二十九日忠隅が飫肥に還るとその隙に義祐は鬼ヶ城を取ってしまった。

天文十六年二月二十三日、伊東軍は飫肥本城を攻めた。十一月十八日、伊東軍は目井城を取った。二十二日、飫肥新城が陥り城主北郷忠直等が戦死した。十二月

十三日には南郷熊屋城が陥落した。十七年七月七日、義祐は飫肥城を攻め、島津忠親（忠広の養子北郷忠相の子）はこれを撃退した。

（註①＝「高城町史」によると伊東氏、島津氏和議のため大友氏の使僧が天文十七年正月二十四日、都城に来て、忠相きかず和議不成立とある）

（註②＝天文十七年志布志郷槻野村太田大明神神社を再興した）

十一月五日、伊東軍は飫肥新山城を攻めた。城中から兵を出し伊東軍を撃退した。十八年、貴久は伊集院忠朗を派遣し、島津忠親を助けて伊東氏を討伐させた。四月三日、忠朗、忠親、忠相等は伊東軍に大きな打撃を与えた。二十二年正月十三日、伊東義祐、飫肥を侵し八幡馬場に入ったが、忠親はこれを撃退した。更に弘治元年九月、伊東義祐は飫肥を攻撃し、南郷三百町の民家をこわしたりした。そして遂に目井城を攻め陥れた。

第十一節　恒吉宮ヶ原の戦

（宮ヶ原千人塚）

「島津国史」によると永禄元年三月十九日、恒吉領主島津忠親の軍を肝付兼続が撃破し、都城城主北郷時久の援兵も時に利あらず、将士数百戦死したとある。

（北郷忠相譜中、北郷時久譜中、庄内平治記）

なお「都城市史」によると天文十七年（一五四八）正月、北郷忠相は兵を発して肝付氏の居城恒吉城を攻めてこれを取り本田紀伊守董親の族因幡守親貞にこれを守らせた。

天文十七年十月には島津氏は本田董親を庄内に追い、清水を島津忠将に与えた時、姫木・松永・土井・浜之内・小村・湊・廻・堺・恒吉・市成も忠将に宰領させた。

投谷八幡の棟札によれば天文二十二年八月十三日、肝付良兼並びに父兼続の息災のため地頭伴兼吉が八幡社壇一宇を建造したとある。

永禄元年、肝付兼続は荘内を撃ったが北郷時久は良く

これを防いだ。島津忠親は日置美作久範、石坂大和守久武等を遣わし時久を助けた。

三月十九日、北郷時久と肝付兼続と恒吉郷宮ヶ原に戦い鳥居段で合戦したが遂に北郷軍は敗れた。投谷八幡宮司野上田氏の話によると北郷蔵人久厦ハ投谷八幡の社殿に遁入しようとしたが、肝付氏代々の社は肝付氏に味方してか、社殿に熊蜂が巣を構え、すき間なく充満して入ることができず、再び鳥居段に出て防戦しようとして戦死したという。このようにして時久の叔父北郷久厦をはじめ、石坂久武、末吉地頭平田宗仍、平田宗徳その他多数戦死した。

さて恒吉宮ヶ原にこの戦跡がある。投谷八幡神社の鳥居近くに千人塚という小丘が二つ道路の傍にあるが、これは当時の戦死者の墓であろう。千人塚の名から考えると、相当多数の戦死者があったものと思われる。また鳥居の近くに墓石があるが、それには前北郷蔵人頭雲巻龍渓居士と刻んである。附近の人々の話によると、もとはこの墓の後方に松の大樹があったが、毎年三月十九日にはこの松の木の上に火がともるといわれていたという。

この墓は畑の奥にあったが、その後道路わきに移した。

北郷蔵人の墓

第十二節　忠親、貴久へ末吉を献ず

肝付兼続は永禄元年十月廿三日、また志布志を攻めたが島津忠親に撃退された。伊東義祐は飫肥新山城を攻め、島津忠親は北郷忠孝等を派遣してこれを救援した。ところが島津方敗れ、忠孝、北郷久信や守将知覧忠幸等は戦死し城は陥った。

永禄二年四月、島津忠親は平山越後守忠智に松山城を守らせた。十四日、平山忠智が志布志に行く途中、肝付

兼続軍と道路で遭遇し、力戦したが及ばず戦死した。兼続遂に松山城を陥れた。忠智の二子久武、久次も戦死した。

一方、伊東軍もこの月に飫肥の忠親を攻めた。忠良は忠親を援けるため、尚久を遣したが、更に尚久を助けるため春成久正が派遣された。六月十六日、伊東軍と戦い敗れ、奈良原守資、梶原某等戦死した。尚久は危急のところ、春成久正が尚久の身代りとなり、殉死したので尚久は辛うじてのがれた。

島津忠親は飫肥にいてその留守中に、末吉、梅北は伊東氏と境を接しているため侵伐され勝ちであった。忠親もこの二邑の守備に困難を感じ、永禄二年、末吉を貴久に献上し、梅北を北郷時久に割譲した。

また島津義弘を養子として共に伊東氏を防ごうと貴久に願って許された。こうして末吉は島津貴久の直轄地となった。永禄三年三月十九日、義弘は飫肥に行った。

第十三節　島津と伊東の末吉会談

島津、伊東両氏は永く相抗争しているので将軍義輝は永禄三年六月二日、島津貴久に書を送り、また近衛植家もまた添書をして伊東と和睦するようにすすめ、義輝の使者の伊勢貞運は十月四日、末吉に着いた。

島津と伊東両氏が二十年来、係争の地飫肥を幕府直轄の地とし、また飫肥の内伊東氏の領地を義祐に還させようとするものであった。

この調停は伊東氏に有利であり、飫肥庄が伊東氏の旧領であるといい、また義政の時、伊東氏を薩隅日守護にしようとしたことから、島津氏を抑えようとしたものであった。これに対し、島津氏は我が家は頼朝以来三州の守護職を世襲するところである。伊東氏は単に日向都於郡一所を領しているだけでまだ曾つて三州を領有したことはない。伊東氏が進んで退くならば貴久も異議はないと答えさせた。かくしてこの調停は遂に成功しなかった。

この後義弘は忠親の許にいて共に飫肥を守ったので、伊東氏はおそれて敢えて攻めて来なかった。

永禄五年、義弘が鹿児島に帰ると義祐は肝付兼続と共に兵を合わせて忠親を攻撃してきた。忠親は防ぐ事が出来ず、櫛間に逃げ、義祐は飫肥を取り、兼続は志布志を取った。

第十四節　肝付氏の反乱

永禄四年、肝付兼続は鹿児島に馳せ参じ、貴久を客館でもてなし宴をはって興に乗じていた。その時伊集院忠朗が肝付の家臣薬丸入道高雲に戯れをいうには「今日の宴は実に珍味ばかりで結構である。更に鶴のアツモノがあれば申し分がないのだが」といった。これに対し薬丸は文武の達人であるだけに伊集院の言葉に答えていうには「御方の主人島津家の領地に多い狐の料理は余程結構でしょうな」と返答した。

肝付氏は累代幕紋舞鶴であり、また島津氏初代忠久誕生伝説に狐の火で闇夜を照したという事から島津家は稲荷神社（狐）を尊崇した。

伊集院は薬丸の言葉を聞くと色をかえ激怒して大刀を抜いて薬丸に打ち掛った。薬丸も達人であったので心得たと抜合せ、双方共に斬り結ぶ。同座の面々が両人の中に入ってこれを留めた。伊集院が腹いせに肝付の幕紋に書いてある鶴の首を切った。

そこで兼続は伊集院が鶴の首を断ち切った事を大いに嘆き憤り、鹿児島にいた家臣全部を呼び集め会議した。そして遂に謀反を決意し、大守に暇をつげることなしに高山に帰り、叛乱を起すことになったという。当時の肝付領は高隈、百引・平房・大崎・安楽・蓬原・恒吉・志布志であった。

兼続の妻は忠良の娘であるので忠良は家臣を遣わし兼続を諫めさせたが聴き入れなかった。

先ず攻撃目標を廻城にした。廻城主廻伊豆守は幼弱であった。永禄四年五月十四日、兼続は廻城を襲撃しこれを掠めとった。それで貴久、義久は六月二十三日兼続、称寝重長、伊地知重興を廻城に囲み、大墓、馬立、竹原山に陣取った。

永禄四年七月十二日、肝付軍は竹原山塁を攻撃し忠将はこれを救おうとしたが、逸り立って町田加賀守忠林の諫めも聴かず攻めた為に戦死した。忠林等死者の数は五十余人にのぼった。日新公の第二子右馬頭忠将がこの馬立坂で戦死した時の馬が芦毛馬であった。芦毛馬は青白まじりの毛の馬で島津家の禁忌とされた馬であったと伝えられる。

貴久は麾下の兵を遣わし肝付軍を攻撃し、これを敗走させた。兼続・重興・重長は恒吉の方に逃げていった。

第十五節　貴久、末吉を北郷氏に与う

永禄二年十月、末吉は貴久の直領となったが間もなく永禄五年六月十二日、貴久は北郷氏の多年の功労を賞し末吉三百五十町を与えた。今まで伊東氏を防禦した功を賞したものである。

永禄七年七月十八日には島津忠親は肝付兼続と櫛間桂原に戦い、新納忠衡はここで戦死した。翌八年には伊東義祐は飫肥新山城を下し、守将日置忠光を殺した。

第十六節　岩川、月野の戦

投谷八幡の棟札によると永禄八年（一五六五）吉日、肝付良兼公息災並びに当地頭伴兼守の武運長久を祈願した。

同九年五月十八日には北郷時久は松山に侵入、太田尾において肝付軍と戦った。

六月十六日には肝付軍が北郷時久領の岩川城を攻めた。この戦で肝付方の首二六級が獲られた。また北郷方久木崎丹後守等一〇余騎が討死した。

元亀三年九月廿九日、太守義久は北郷時久に命じて肝付氏の邑である月野村を攻撃させ、また肝付方も兵を出して北郷の軍と松山泰野村で戦い、この戦いでは肝付方の戦死者多数であった。

又梶山の兵を遣して肝付氏の福島軍を攻撃した。

第十七節　飫肥城陥落

永禄十一年正月十二日、伊東義祐は肝付氏と島津忠親を飫肥城に攻めた。北郷時久は兵数千をひきい、酒谷に屯営し、飫肥の外援となった。二十一日時久と忠親は時期を約して伊東軍を挟撃して大いにこれを破った。

二月二十一日、時久は兵を遣わし兵糧を飫肥城に送った。所が伊東軍はこれを敗り、勝ちに乗じて酒谷塁を囲んだ。五月になると義祐は酒谷塁を囲み、時久はやっと自らの塁を守ることに終始して飫肥を救うどころではなく、飫肥は囲まれ、数ヶ月も糧食がなく飢餓状態がます

ますひどくなった。

遂に六月八日には忠親は櫛間に逃げ、伊東氏、肝付氏は更に追撃を加えた。（和睦説もある）七月十九日、忠親は荘内（都城）に逃げ帰り、伊東氏は飫肥をとり、肝付氏は櫛間を取った。

第十八節　木崎原合戦と川崎氏

元亀三年五月四日には日州加久藤城外木崎原の平野でいわゆる木崎原の大合戦が起こり、その当時飯野城にいた島津忠平（後の義弘）は僅か七、八百の小勢を以て義祐の精兵三千を相手に大勝利を得た。

これによって伊東氏は西諸の経略を断念せざるを得なくなり、この一戦こそ、日向における伊東・島津の争覇戦であった。

この時敗れた一群の伊東の士の中で岩川方面に落ちのびて来た一族の中に川崎氏がいて現在土成の川崎氏の祖先であると伝えられている。（前川崎町長らの祖先）

川崎氏は伊東方では四天王の一といわれた家柄のようであるが、いかにこの戦いが激戦であったかが想像される。

第十九節　末吉国合原役と肝付氏の失脚

廻城の争奪戦に一敗地にまみれた肝付氏は再挙の志をすてず、その機到来を待ち構えていた。

島津義久は時久に命じ月野・泰野・櫛間を攻めさせた。

肝付氏は北郷氏に復讐しようとして天正元年正月六日、行動をおこした。肝付兼亮は志布志地頭肝付竹友らに命じ志布志・安楽・蓬原・松山・福島の三千余人を率いて北郷領末吉を占拠し、兵を橋野に屯営させた。

末吉地頭の土持頼綱、梅北地頭の知覧大和守は急を時久に告げ救援を求めた。時久はその二子相久、忠虎と共に末吉国合原を攻撃した。

この戦で北郷時久は都城・財部・末吉の兵を率い、稲井原（今の二の方）から攻撃開始、その中、志和池・山田・野々美谷の兵も参加し、梅北地頭知覧大和守は多勢を率いて橋野から攻めた。勝岡・梶山・山之口・高城の

兵も参加し、北郷勢は士気大いにあがった。時久は一軍を本堂に遣わし、一軍は住吉山に伏せ、一軍は北別府にまわし四面から包囲攻撃して大いに敵を破った。

肝付方は無謀にも酒盛している所に時久軍が不意に寄せ、散々な大敗北であった。肝付竹友はじめ松山城の城戸にただ一息に追込まれ、戦死総数百五十一人で、大淀川に溺れた者百八十余人といわれる。

この戦は肝付氏にとっては決定的な大惨敗で肝付氏の没落を早めることになった。

第二十節　恒吉北郷領となる

国合原の合戦で大敗した肝付氏はその後漸次衰え、島津氏の圧迫で領地を奪われ、天正三年頃には僅かに高山の一邑を保っていた。

「都城市史」によると北郷時久が肝付軍を敗った時に義久は時久に「肝付氏を完全にやっつけるまで待ってくれ、必ず志布志を恩賞として与えよう」といった。やがて天正四年十月、肝付氏領櫛間、志布志も完全に島津本家のものとなった。

そこで義久は時久に志布志を与えようとした。ところがそれには伊集院忠棟が反対した。それで時久には恒吉・永吉・内之浦百八十町の地を与えた。

これは伊集院忠棟が後に都城をねらい都城領主となり北郷領をそっくりもらうことになるが、忠棟の深謀遠慮はこのころから既に予定されていたのかも知れない。

一　投谷八幡の再興

投谷八幡の棟札によれば、天正十一年十一月二十八日、北郷時久は時の地頭小杉頼栄に八幡再興をさせている。

二　蹲踞大明神遷宮

蹲踞大明神遷宮

蹲踞神社棟札によると天正十九年霜月十八日には北郷時久が時の地頭小杉頼栄に命じて蹲踞大明神を飛佐から坂元に遷宮している。

結局天正四年末から文禄四年八月まで約二十年間恒吉は北郷氏領で地頭は小杉頼栄であった。

第四章　安土桃山時代

第一節　安土桃山時代

室町幕府倒壊が天正元年である。その翌年天正二年（一五七四）から慶長六年（一六〇一）で約二十七年位が安土桃山時代である。

織田信長は近江の安土に城を構え、天正元年、京都に入り、将軍義昭は河内に亡命した。統一の業半ばにして明智光秀により天正十年六月二日、本能寺の変にあい倒れた。

その後、豊臣秀吉が明智光秀を倒し、柴田氏を打ち、家康と和し、大坂に大坂城を築いた。やがて天正十五年、島津氏を征し、北条氏を倒し、天下統一を完成した。秀吉は大閤検地を行い、刀狩令を出し士農工商の別を立てた。明を征服しようとして、まず文禄の役、次いで慶長の役が行われ、島津氏も大いに活躍した。

天文十二年鉄砲伝来、天文十八年（一五四九）キリスト教伝来、天正十五年秀吉の禁教令、慶長の役のさなか慶長二年八月秀吉薨じ、そのなきあとやがて関ヶ原合戦となる。島津氏は西軍につき敗れ苦労する。

第二節　島津氏の九州制覇（三州統一後）

戦国大名は富国強兵策をとり、分国法をつくっているが、貴久は士卒五人組をつくらせ、これを単位に組織を編成し、平時、戦時を問わず利用した。これに兵農一致の強兵策を課した。これが島津氏が独得の士風と強さを発揮する大きな要因であろう。

また新兵器として登場した鉄砲は一五五四年、蒲生と渋谷一族の叛乱に当たり用い、鉄砲伝来後十年内のことである。後年、大友氏征伐に南蛮大砲をも使用したといわれ鉄砲の利用は元亀、天正年間に制度化している。

さて天正五年、飫肥の伊東氏が破れて大友氏を頼って豊後に亡命し、島津氏は全く三州を統一した。

その後天正六年、大友義鎮の大軍は南下し、島津軍との一大決戦になる。八月には高鍋から耳川附近で島津方大勝利、耳川に落ちて死ぬ者数を知らず、あちこちに落

葉の波に浮かぶが如しと形容されている。その時の戦死者五万余人（多数という意味か）といわれている。

勢いに乗じ天正九年には肥後の相良氏を降し、更に十年には肥後の甲斐、合志、阿蘇各氏を降した。

天正十二年、有馬軍と連合して肥前龍造寺軍、肥後の諸将を降した。

天正十三年大友氏討伐、各地で連戦連勝した。天正十五年（一五八七）の正月は島津氏は豊後府内城を占領、九州制覇のうちに迎えた。

天正十四年薩藩沿革地図によると豊後の北部一部を残し九州全土を略定している。そして秀吉の和議申込をも退け、九州分割案には応じないで、あくまで九州全土を封土として要求した。

天正九年八月、島津氏の九州制覇戦に当たり、肥後水俣城攻撃の際は島津の総軍およそ三万一千、島津家久、征久、北郷忠虎外各地の将兵が従軍した。従軍した地方の地頭名の中に新納勘解由（恒吉地頭）の名が出ている。

相良義陽は屈して降を乞い水俣、津奈木、佐敷、湯浦及び葦北、七浦を割譲することを約して二人を人質として義久は鹿児島へ凱旋した。

（註、天正五年恒吉地頭は新納忠家であった）

第三節　豊臣秀吉の島津征伐

天正十四年（一五八六）島津氏は秀吉の調停に応じないで大友氏を攻めて豊前に走らせ、九州を席巻する勢にあったので、十五年二月、秀吉は大軍を率いて九州に渡り小倉に来た。

秀吉の軍は二手に分れて、本陣は筑前、筑後、肥後へと進み、別働隊は羽柴秀長が指揮をとり、日向路に向かって来た。秀吉が九州に来ると、これまで島津に服していた各地の諸豪はことごとく反旗をひるがえした。島津は日向の根白坂で決戦を試みた。しかし敗れたので退却して薩摩に帰り、伊集院幸侃を人質として秀吉に和睦を申し入れた。

一方、肥後に進んだ秀吉は出水の島津を戦わないで降伏させ、肥後の佐敷から海路をとり川内に上陸して泰平寺にはいった。島津義久は鹿児島を出て途中剃髪して龍白と改名し、五月八日秀吉に謝罪した。

しかしながら島津には焦土決戦を主張する強硬派もい

た。都城の北郷時久は強硬で秀吉と決戦しようと都城、末吉、財部、安永の各城を修築し、軍を配置していたが義久から諭されて時久、忠虎父子は石田三成に降った。

秀吉は島津氏降伏後九州をそれぞれ処分した。薩隅日三州については次のとおりである。

飫肥、都城、安永、野々美谷、山田、志和池、高城、山之口、梶山、勝岡、財部、岩川、恒吉、梅北、末吉、永吉、内之浦を島津氏へ、日州佐土原の領主中務大輔家久、薩州出水の領主島津薩摩守義虎をそれぞれ大名に列し、北郷左衛門時久も大名に列しようとしたが時久はこれを辞退した。

それで最終的には薩摩、大隅及び日州諸県を島津氏本家へ、飫肥、曽井清武を伊東氏に、宮崎を高橋氏に、児湯郡高城、財部（高鍋）福島を秋月氏に、都於郡佐土原を島津家久に、その他九州各地の大名の封地をそれぞれ決めた。

このようにして島津氏は秀吉の西征により九州制覇の雄図むなしく三州に屈居のやむなきにいたった。

（註＝羽柴秀吉軍が日向路に入り、その一軍が浅井を通過したと伝えられている。）

第四節　朝鮮の役

一　文禄の役

秀吉は全国統一後海外遠征の大志を抱き、明国をまず征服しようとして使を朝鮮に遣わした。そして征服の案内役を頼んだが国王はこれに応じないので、まず朝鮮から征服しようとした。

文禄元年（一五九二）秀吉の采配通り三十万人を動員して、朝鮮の攻略が始まることになった。

島津への割当ては兵一万五千であったが、秀吉の西征以来五年を過ぎたばかりで領土はせばまり疲弊しているので一万の出兵を願い出た。家康の口添えもあり秀吉の承諾を得た。

文禄元年春、名護屋城が竣工した。秀吉は諸将に名護屋集合を命じた。二月十七日、島津義弘軍は栗野を出発した。秀吉は大坂を三月二十六日に出発、四月には名護屋に着いた。

伊佐郡湯之尾城主梅北国兼は義弘に従い出陣の予定であったが、秀吉への謀反を企て、肥前で兵をあげ、秀吉

に迫った。国兼は謀殺されたが、義久の弟歳久の部下も多く参加した。新納忠元、島津歳久等は強硬派（秀吉の島津征伐の時）であったので義久まで疑われ、家康のとりなしでやっと義久は許された。ただし歳久の首をさし出せと秀吉からいわれた義久は罪なき弟に涙をのんで自殺させ首を差し出した。

秀吉の心身衰弱に虎の肉を補強剤として医者からすすめられた。それで文禄二年四月、虎狩令が出た。義弘の部下は二頭を斬り殺し、残り一頭は逃がした。

梅北事件に引き続き文禄の検地が行われ、文禄四年二月二十九日に終ったので義弘は呼び返され、六月大坂について、三州の検地目録を授けられた。

一　慶長の役

慶長元年（一五九六）朝鮮との和義破れ、翌年また前回とほぼ同数の兵力をもって、朝鮮と戦いを始めた。

島津には前回と同じ割当てのところ、やはり一万人にしてもらい五十余隻の舟で久見崎（川内市）を出発した。慶長の役は各軍苦戦に陥ったが島津義弘軍は明軍二十万を泗川の戦で迎撃した。義弘が敵を充分引きつけて一挙に攻撃するという戦法で大勝利をおさめた有名な戦である。敵軍三万八千七百余の首をとり、斬りすてたものをあわせ、明軍の戦死者は八万にも及んだという。明軍はこの惨敗によってすっかり島津をおそれて日本軍を攻めようとしなかった。

この朝鮮の役当時、文禄の役では北郷氏、慶長の役では伊集院忠棟に岩川、恒吉地区は支配されていた。その両役に岩川、恒吉等の武士も従軍したかもしれないがはっきりした資料が残っていない。

（註＝慶長の役の時伊集院忠棟領の岩川、恒吉、月野関係分は不明であるが、忠棟領全体では馬数六十騎、人数二千三百三十二人等であった。）

第五節　文禄の検地

島津に対する大閤検地は文禄二年（一五九三）に準備が始まり、三年と四年に大々的に実施された。

石田三成の指揮で、薩摩、大隅、日向の三班に測量隊が編成され、大口から開始された。そして島津側の責任者は伊集院忠棟、長寿院盛淳がこれに当たり、翌文禄四

年二月二十九日測量を終了した。

文禄検地は六尺三寸の竿か縄で丈量し、六尺三寸平方を一歩、二十歩を一畝、十畝を一段、十段を一町とした。この時の田の分け方は文禄四年七月十六日の規定によると、まず上、中、下、下下の四種類に分けて都合十二種類とした。桝は従来各領まちまちであったが、この（高）石盛に使ったのは天正十四年以来の京桝に統一され、内矩の広さ四寸九分方、深さ二寸七分、現在使用されている桝である。

島津氏に対して文禄四年六月二十九日、目録帳を授与された。

薩摩国二十八万三千四百八十八石七斗四升、
大隅国十七万五千五十七石二斗三升、
日向諸県郡十二万百八十七石四斗四升、
計五十七万八千七百三十三石四斗一升、

その中に官地、石田三成領、細川幽斉領を除き義弘領五十五万九千五百三十三石である。その中に二十六万六千五百三十三石給人領、寺社領三千石、忠恒領十万石、島津以久領一万石、伊集院忠棟領八万三石八斗四升。

結局差引き義弘の純石高は十万石であった。伊集院忠棟領の中、大隅之内一万二千三百七十五石二斗一升が末吉であり、その中に岩川が含まれているはずである。なお二千四百三石八斗一升三合が恒吉となっている。

「末吉郷土史」によると、当時の古記録に

末吉惣廻二十三里八町、東西八里半、南北四里半
隅州日州御検地之時柱石也
隅州ノ住人石崎図書介、同長友助左衛門、同奥岐勘解由、
河内州ノ住人富田九兵衛尉、曽於郡井内原村
文禄五年十一月二十一日

とある。

第六節　都城領主の更迭

北郷氏は代々都城におり、安永、山田、志和池、野々美谷、高城、山之口、勝岡、梶山、梅北、末吉、財部、恒吉、永吉、内之浦を領し三万六千余石と号した。検地により六万八千余石となった。

伊集院忠棟は秀吉の人質となった。子忠真を朝鮮には出し、自らは秀吉の側近になり、石田三成に取り入り、

薩摩太守たらんとする野望を達しようとはかったといわれる。

忠棟はまず北郷氏の領を得ようとたくらみ、石田三成とはかり、三成が大閤に言って、遂に忠棟は都城地方を得た。すなわち都城、梶山、山田、安永、野々美谷、高城、末吉、恒吉、財部、廻、市成、大崎、百引、平房、内之浦符領主となり、合わせて八万三石八斗四升を領することになった。

北郷長千代丸は祁答院領主となり、三万七千石になった。日州三俣院千町の領主北郷三久は平佐、天辰、高江等の領主となった。

北郷氏は累代の所領都城を後にしなければならない。文禄四年八月二十三日北郷時久は老の身をもって六歳の孫長千代丸を連れて、住み馴れた都城を発った。時久は見返り坂（後に俗にそう呼ばれた由）で都城を見返り見返り、涙をのんで移っていったという。長千代丸は時久の子忠虎の子で忠虎は朝鮮の役で病死した。

北郷氏の後に文禄四年八月伊集院忠棟が旧領の鹿屋を発して都城に入った。

時久は慶長元年祁答院で逝去した。時久の三男三久は父移封の時、川内方面平佐を居城とし、平佐北郷始祖となり、明治維新まで十三世続いた。

第七節　小浜文書

都城市文化財調査委員重永卓爾氏論文（南九州文化第二十号）より

伊集院忠真黒印知行目録

〔釈　文〕

（前欠）

□〔同カ〕　六斗四升　助右衛門

中田八畝

山下　下田壱畝廿六歩　壱斗□〔一〕□〔升〕弐合　治□〔部〕〔左衛門尉〕

同　上田三畝十八歩　三斗□〔六〕升　同□〔人〕

同　上田五畝六歩　五斗弐升　同人

同　下田弐反六畝四歩　壱石五斗六升八合　同人

同　中田九畝弐歩　七斗弐升五合　同人

西原　下畠四反六畝　壱石三斗八升　十郎兵□〔衛〕

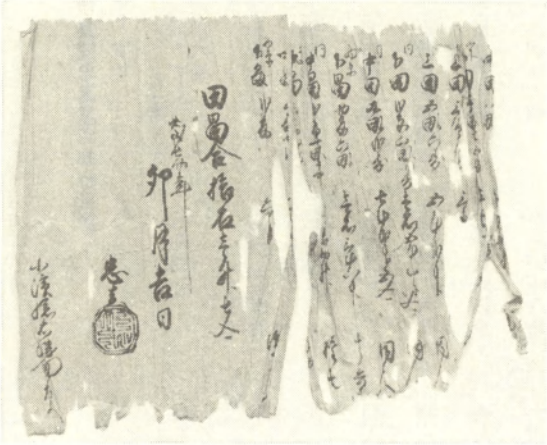
同　中畠弐反一畝十四歩　壱石四升　　権七
立山々　中畠三反四畝　一石□[七]斗　与四郎
西原　下畠弐反　六斗　治卩[部]左衛門尉

田畠合拾石壱升七合
慶長四年
卯月吉日
忠真○（黒印、印文「卍」）
小浜孫右衛門尉殿

〔解　説〕

本文書は慶長四年（一五九九）四月吉日附で、伊集院源次郎忠真より小浜孫右衛門尉（実名不詳）に、田畠合わせて一〇石一升七合の知行を与えた目録である。これに忠真の宛行状が添附されていたかどうか詳かでないが、このクラスの武士には、おそらく目録の渡付のみではなかったかと思料される。上級の家臣には花押を据えた宛行状、坪付は別紙（目録）に認め発給されたものと思われる。

この文書はと蝕、破損がはなはだしく、首部も欠いている。



小浜文書（小浜多喜男氏蔵）

そのため数行が欠文となっているのは惜しまれる。料紙は竪紙楮紙で、縦29.8cm、横41.0cm（既存部）を計る。また文書の奥の部分が続紙のようにみえるのは、後世ひきさかれた部分を糊付したためであろうか。なお筆蹟は忠真の祐筆書であることはいうまでもない。

文書の袖の部分には、おそらく「大隅國末吉郷中之内

村」というように該行政区が明示されていたであろう。これに続いて支配地の小字、田畠の等級、面積、石高、名請人（農民）の名前が載せられている。この後田畠の合高を記し、年号はいわゆる「付年号」の書式（書札では、略式、証文であるから年次を入れる）を採り、次行に名乗（実名）を書き忠真の黒印が押捺してある。この次行の「名乗（印）」は異式であるが、その理由については後に言及するであろう。宛書は差出者より下げられ、「殿」字の略体と共にその身分関係が表現されているのである。これは当時の書札にかなっている。いま知行目録を表示すると左のようになる。

支配する田地の始めの部分が破損しているが、およそ一～二筆程度と推定され、その石高も一石三斗七升二合と算出される。この田積も不明ながら、おそらく三反前後ではなかったろうか。名請人（農民）のうち最高の地積・石高は治部左衛門尉で、田地五筆、畠地一筆の計六筆よりなり、田の合計は四反四畝五六歩、それに畠二反の総計六反四畝五六歩となっている。その武士的名称とともに、彼が有力農民であったことが推知されよう。

第1表　小浜孫右衛門尉の知行構成

No.	農民名（名請人）	田			畠		
		筆数	地積	石高	筆数	地積	石高
1	?	?	?畝歩	斗升合 (13.72)	—	—	—
2	助右衛門	1	8.00	6.40	—	—	—
3	治部左衛門尉	1	1.26	1.12	—	—	—
4	〃	1	3.18	3.60	—	—	—
5	〃	1	5.06	5.20	—	—	—
6	〃	1	26.04	15.68	—	—	—
7	〃	1	9.02	7.25	—	—	—
8	〃	—	—	—	1	20.00	6.00
9	十郎兵衛	—	—	—	1	46.00	13.80
10	権七	—	—	—	1	21.14	10.40
11	与四郎	—	—	—	1	34.00	17.00
計		?(6)	? (52.56)	52.97	4	121.14	47.20

註　慶長4年4月附「伊集院忠真知行目録」（小浜多喜男氏所蔵文書）より作成。
?：文書破損の不明分、（　）：既存分の累計、算出である。既存分の地積は合計1町7反3畝70歩、田畠高合計8石6斗4升5合。

地積の総計も首部を欠いているので正確は期せられないけれども、ほぼ二町歩（既存分は計一町七反三畝七〇歩）前後と推定して大過ないようである。この小浜孫右衛門尉のように二町クラスの階層が、当時の軍事や村落支配（在地）において、大名権力の基盤を担っていたものと推測される。

ちなみに文禄検地による島津氏領国の知行配分をみると、忠真の父忠棟は八万三石七斗四升で島津本宗家につぎ、全体のほぼ十四%を占め、破格の知行高をものしている（第2表）。

忠棟の所領は日向国・大隅国のほぼ十七箇所（郡・村単位）に及び、支配高の内訳は第3表のとおりである。この突出した朱印高に彼の悲劇が胚胎（はいたい）していよう。前掲の小浜孫右衛門尉の知行高は、第3表の末吉一万二千三七五石二斗一升のうちに含まれるであろう。

さて小浜文書の歴史的位置付け、換言すればこの知行目録の性格をどう解釈するかが問題となる。通常、領主権力の重要な一つとしての所領安堵、知行の宛行（あてがい）は、①その代替り、それを前提とする検地、②臨時的には軍忠への加増、その他の恩給としての行為が考えられよう。前者は年次を限って集中的（一斉に）に文書が交付されるのを特色とする。小浜文書の発給年日

第2表　太閤検地による島津氏領国知行配分

№.	知行者	石高	比率
1	豊臣秀吉	10,000,000	1.73
2	石田三成	6,328,448	1.09
3	細川藤孝	3,005,351	0.52
4	島津義久	100,000,000	17.28
5	島津義弘	100,000,000	17.28
6	伊集院忠棟	80,003,840 (80,003,740)	13.82
7	島津以久	10,000,000	1.73
8	諸士	266,535,000	46.06
9	寺社	3,000,000	0.52
計		578,870,639	100

註　文禄4年6月26日附「豊臣秀吉朱印知行方目録」（『島津家文書』）より作成。（　）：修正値、原本1斗の計算違い。

付よりみて、この年の三月は閏月があり、伏見での島津忠恒（家久）による父忠棟殺害の悲報は、当然都城（本城）の忠真のもとへ急報されていたのである。このような非常事態の中で、急遽父の遺跡を襲い（家督相続）自立（公儀の承認なく）して、全家臣団、寺社などに新領主として知行安堵の文書を発給したものとも解せられなくもない。あるいは、島津家との臨戦体制下、新規に召し出した武士への褒賞的給付か、または小浜クラスの武士は、既述のように領国支配であれ、戦闘であれ、その動揺、去就は重大な結果を招くが故に、それへの対応措置であったのかも知れない。ただ新規召し抱え、加増の場合、文書にその理書が必らず存する筈である。代替りとみた場合その前提として、領内の検地（多くは既成の差し出しに依る）実施による打ち出し分の高ならしや、支配地の転換などなど繁瑣な基礎的作業を要し、それは短時日になし得るものではない。この目録を忠真の襲封による発給とすれば、これより先、彼のそれへの準備は着々と進捗していたことになり、公儀よりもその内意を得て

第3表　伊集院忠棟の所領構成と知行高

No.	知行地（行政区分）	石　高
1	日向国諸県郡都城村	8839.407
2	〃　三ヶ村	4109.176
3	〃　梶山村	3102.006
4	〃　山田村	2239.769
5	〃　五ヶ村	10325.805
6	〃　安　永	6830.719
7	〃　野々谷	1566.246
8	〃　高　城	9720.289
9	大隅国　末　吉	12375.210
10	〃　恒　吉	2403.813
11	〃　財　部	4337.119
12	〃　廻	1473.479
13	〃　市　成	1259.277
14	〃　百　引	1756.518
15	〃　平房之内	80.000
16	〃　内之浦	2320.797
17	〃　大　崎	7264.110
計　2国　17箇所		80003.740

註　作製資料は第2表に同じ。

いたとも解せよう。もしそうだとすれば、伏見での幸侃殺害事件は恰も子息忠真の襲封直前にあわせて決行され、幸侃一族を一気に殲滅する策謀との疑いももたれてこよう。

先にも触れたが、小浜文書の書式で奇異に感ぜられる箇所は、日付次行の署判である。このクラスの武士には日下印でことたりるのであり、それが当時の常識（書札）でもあった。なぜ彼がわざわざ実名書としたのか、いまこれを考察するに、この目録には首欠ではあるが、加増などの文言がみられぬので、これを忠真の代替りによる一斉発給の一通と解するならば、忠真の家督相続のモニュメントとして、新にこの印章を制定鋳造したのではなかろうか。そのことは、当時の糸印流行もさることながら、本書のごとく同時に多数発給する文書に、いちいち花押（サイン）を据えるのは大変な作業であったろう。それゆえ花押は、重臣層や格式の高い寺社などへの書札に限定し、他の公的文書は印章ですませたものと考えられよう。このように新しい印章であるからこそ、ことさらに（印文とも関連して）発給主体を明確にしたのではなかろうか。

八万余石の大名ともなると、家臣への知行目録などは、その家老及び奉行人の奉書で良い訳であるが、本文書は彼の黒印による直状となっていて、日付も縁起をかつぎ吉日を選定している。そこに新領主たる忠真の前向きの姿勢（自らの掌握）と願望がうかがえよう。この文書の形様に彼の自立と、将来への家臣の一層の奉公を期待する心情を、垣間見る思いがする。他に比較する良好な史料に恵まれず、筆者の錯誤も少なからずあるであろう。大方のご批正をお願いいたしたい。ともかく種々の問題を提起する一通ではある。

小浜文書は僅か一通の破損文書であるけれども、忠真の領国支配を知るほとんど唯一の物証であるばかりでなく、庄内事変勃発にも関わる極めて貴重な史料であり、なかんずく黒印は真に珍とすべきであろう。確実な歴史史料として今後とも大切に保存されることを切望するものである。

近世島津藩政下、このような文書（国賊の発給）は、権利の支証とならぬはもちろん、所有することすら憚ったことと推察される。それゆえ伊集院忠棟・忠真の旧家臣は自らそれらを処分したことは容易に想像されよう。小浜氏のごとくひそやかに伝えられた事例は稀有で、ご父祖の思念に頭のさがるおもいである。

伊集院忠真の印章

小浜文書によって学会未知の印影に接したので、これについても若干の考察を試みてみたい。これは八角二重郭で、径3.5cm（一寸一分）、外郭一辺の長さ1.3cm（四分）を算える。印文はいわゆる左旋卍（まんじ）を龍字のように形様化したものである。

卍はインド伝来の文字で、吉祥・繁栄・万徳の集まる瑞祥的意味をもつという。また卍は生・進、凵は死・退を表現するという説もある。文書には墨にて押捺されているが、その印壺（力点）はその右半に存する。材質はおそらく銅であろう。これは当時流行の糸印（いといん）に系譜を有するものと思われる。既製の糸印をそのまま使用したというよりも、これに倣って新鋳したのではなかろうか。これは叙上の文書を彼の代替りとすればそれに関連するものかも知れない。この印影は豊臣秀吉・石田三成の印章に通ずる意匠であることに注意されたい。秀吉の朱印（丸印）は、伝説に伏見より参朝の途中拾ったものといわれる。これに類するものでは藤堂高虎の印章のエピソードがある。石田三成の黒印は、古く文明五年（一四三三）一二月の菅浦（すがうら）年貢請取状に押捺された黒印と全く同一の形態である。三成は後年秀吉より近江に封ぜられているので、あるいはこの菅浦の黒印を奪い、自己の支配文書に使用したものではなかろうか（ただ糸印は、同印文の印章を鋳造した形跡があるので一概にいえないが）。

卍の撰文は青年武将忠真の未来にかける祈りの文字がこめられているようで、思わず胸が熱くなるのを覚える（後略）。

伊集院忠真の印影
（小浜多喜男氏所蔵）

豊臣秀吉朱印

石田三成黒印

第八節　庄内の乱

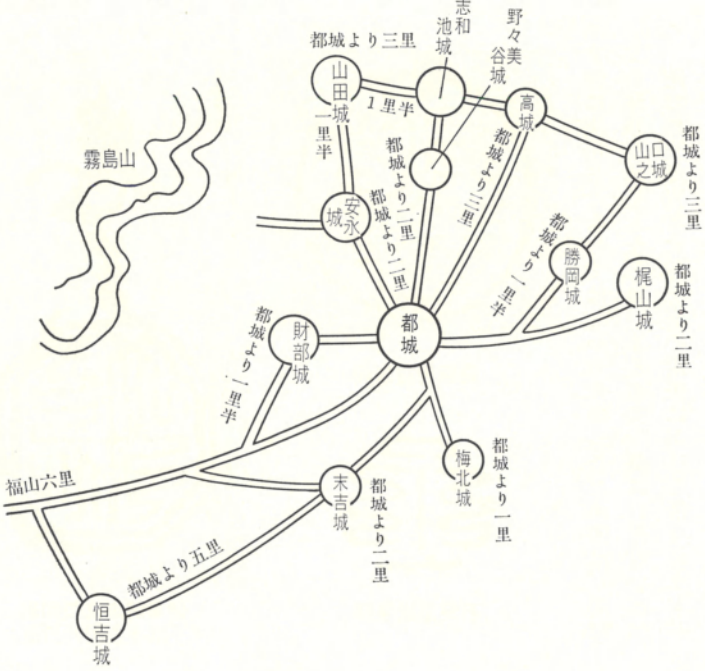
前述の通り伊集院忠棟は先ず都城八万石を得、更に彼は従軍中の島津本家がついている太守の地位をねらい、薩隅日三州の太守たらんとして石田三成外各諸侯、隣接諸侯にも準備工作をしその段取りは整えられた。

さて慶長の役の途中、秀吉は伏見城で薨じた。そして出征諸将士の引揚げとなり、慶長四年正月帰還した。島津公は伏見城に出仕して種々戦功を賞でられた。

ところで石田三成は島津本家に期するところがあってか伊集院忠棟の逆心を島津忠恒に告げた。忠恒はその真偽を疑ったが、その証拠をつかまされ、大いに驚いたという。

それで慶長四年三月九日忠恒は伊集院忠棟を邸に招待し茶話などしてその帰りぎわに後から手打ちにした。

三月十四日その知らせを聞いた忠棟の子忠真は勝敗を度外視して、ただ父の仇の復讐戦をやることにした。都城本城を中心として財部、安永、野々美谷、山田、志和池、高城、山之口、勝岡、梶山、末吉、恒吉の十二砦を



都城及十二砦一覧略之図（庄内軍記絵図）

築き戦備を整えた。このようにして庄内の乱は起こったのである。

日輪城の戦

恒吉には日輪城が十二砦の一支城として築かれた。この城主として伊集院忠真の一族、伊集院惣右衛門が守備した。

慶長四年六月二十二日恒吉城攻撃開始（六月二十三日山田城攻撃城陥落）六月二十四日島津方は其将島津図書頭忠長（宮之城島津氏二世串良地頭）樺山権左衛門久高（志布志地頭）柏原左将監公盛（松山地頭）の三人を派遣し、兵三千余人を率い日輪城を攻撃することになった。

城中の兵は一千余人これに応戦し城壁堅固で容易に抜くことができなかった。島津忠長軍の猛攻があり、又惣右衛門の出撃乱戦の後、伊集院方散乱して城中に遁入したりしてお互いに攻防戦を展開した。

その後三将相謀り、樺山久高が他の両将に向い策を立てて「この城は要害であるから力攻にすれば士卒を損するばかりである。我に一策がある。我一人城中に入り城主惣右衛門に説くことがある」といい二将はこれに服した。

そこで樺山久高は一人城中に入り城主惣右衛門に対し臣として君に叛く源次郎忠真の不忠不義、利害得失を論難し且つ主人源次郎を諫めないのを責めたところ惣右衛門は一言の返答なく閉口し、その理に屈した。

六月二十五日終に城を明渡して都城に退いた。三将凱歌を揚げて恒吉城を取った。

志布志地頭樺山久高の豪勇胆略でよく日輪城を無血開城させることができた事は薩摩武士の典型ともいうべきであり、僅か三日の攻防戦で、この戦が終りを告げた。庄内の乱に当り、山田城についで早く落城したものでその後の戦局に大きな影響を与えた。

その後攻防実に九ヶ月慶長五年三月十日忠真は遂に忠恒の軍門に降った。

そこで北郷氏は祁答院に移ってから五年後再び都城に復した。

恒吉は島津直轄領となり、寺山四郎左衛門久兼入道常雲が恒吉の地頭となった。今の城山の三方荒神は寺山氏の氏神であると伝えられる。

日輪城跡

日輪城跡は現在恒吉地区公民館に一部がなっている。その城跡は日輪坂、日輪山、あるいは城山といわれ、日輪城に因んだ地名が残っている。

頂上に三丘があり、後方の二つを東高城、西高城と呼び、前方中央の丘を日輪城と呼んでいるが、三丘を合わせて一つの城となるはずであり、総称して日輪城と呼ぶべきかとも思われる。

城跡の見取図等も以前は小学校にあった由だが行方不明である。

古戦場記（「恒吉村史」より抜萃）

古城之名　日輪城

旧薩藩内、上古伊集院幸侃領地ニテ慶長年間、城主伊集院惣右衛門居城之由。

右城地ヱ幸侃逆心之砌、惣右衛門大将ニテ籠城有之候、慶長四年六月二十三日、島津図書頭忠長、樺山権左衛門久高、柏原将監ノ三将ハ三千余人ヲ三手ニ分チ、伊集院惣右衛門ノ一千余人ニテ楯籠リタル恒吉城ヲ破ラント大手ヨリハ島津図書頭忠長、搦手ヨリハ樺山権左衛門、柏原将監両将ニテ向ハレケル。

然ルニ城戸近クナリト大手搦手開ヲ揚タリ、城中モ予テ期シタル事ナレバ少シモ騒ガズ開ヲ合セケル。時ニ島津図書頭忠長ノ手ノ者トモ城戸ヲ乗破リ、我モ我モト攻登ルヲ見テ、城中ノ大将伊集院士卒ヲ下知シ鉄砲弓ヲ放チ掛ル事恰モ霰ノ軒端ヲ打ヨリモ猶シゲシ。此時、島津図書頭忠長入道采配振テ下知アルハ『最前ヨリ山田軍中ト覚エケル厳敷鉄砲ノ音聞ユルゾ、定メテ攻落シタルベシ、是式ノ小城ニ何時迄斯アルベキ只今ノ内踏倒シテ我カ君ノ御恩賞ニ預リ進メン』下知ノ詞ノ下ヨリ元来勇ミ立チタル忠長入道ノ先手、曳々オウオウ開ヲ作リテ既ニ城戸ヲ乗破ラント。此時城ノ大将伊集院惣右衛門、黒葦縅ノ鎧小形ノ筋甲ヲ着シ団扇ヲ追取リ士卒ヲ下知シ、鉄砲石弓ヲ一同ニ放チケル。其勢百千雷ノ一度ニ落掛ル如クナレバ先ニ進マントスル軍勢共少シ漂フ処ヲ見スマシ鹿毛成馬ヲ引寄セ、ヒラリト打乗『敵ハ色メクゾ此図ヲ外サズ打チ取リテ忠真殿ノ恩賞ニ預ラン面々我ニ続ケ』ト下知シテ走リ出ントスルヲ見テ滝聞平三郎、惣右衛門ガ馬クツワニスガリ

『是ハ物ニ狂ヒ給フカ只今寄手ノ旗ノ紋ハ三国ニ名ヲ挙ゲシ図書頭忠長入道ナリ。ナマシイニ出ラレテハ所詮勝利アルベカラズ。先ズ敵ノ動勢ヲモ見合勝ツベキ図ヲ計テ出ラルベシ。元来籠城ノ事ナレバ折角城ヲ丈夫ニ堅メテコソ本望ナリ。此城数日持チタル時ハ敵軍定メテ倦ン、其時ヲ待テ朝掛ケ夜討チ等討出テ敵ノ不意ナル処ヲ計ヒ見澄マシテ、打ツ時ハイカデカ勝ザルベキ。今大軍ノ中ニ味方ノ小

勢ニテ打出ラレン事誠ニ石ヲ抱キテ淵ニ入リ、薪ヲ負フテ焼野ヲ走ルノ道理ナリ』ト諫メケルニ惣右衛門莞爾ト打笑ヒ

『御辺ノ詞去ル事ナレトモ何トテ我等ノ武勇ノ劣ルベキ、其上軍ノ習ヒ勢ノ多少ニヨルベカラズ、只士卒ノ和スル所ノ戦ヒニワ勝ツモノナリ。手始ノ軍ナレバ手併ノ程ヲ見スベキナリ。忠長トテモ鬼神ニテハアルベカラズ。我一働キシテ見スベシ』ト浅黄ニ下リ藤ノ紋書キタル旗ヲ真先ニ押立テ其勢三百余人城門ヲ八文字ニ押開イテ忠長入道ノ先手ヘ無二無三ニ空入ル。此時忠長入道ハ馬上ニ突立上リ采配ヲ振ラレシカバ忽チ備ヲ立直シ惣右衛門カ勢ヲ真中ニ追取リ火水ニ我レト突立ル。惣右衛門ハ元来勇猛ノ者ナレバ馬乗リ廻シ士卒ヲハゲマシ東ヘ突キ西ニ掛リ七転八動シテ雲手角縄十文字卍ノ如ク相戦フヲ見テ大将忠長入道ハ真先ニ白地花十文字書キタル旗ノ馬印颯ト指上ゲ、竜ノ雲ヲ起ス如ク惣右衛門ガ勢ノ中ニ挾ンデ弓鉄砲霰ノ如クバラバラト放チ掛ケシヨリ惣右衛門ガ軍勢右往左往散乱シテ城中差シテ逃退ク。是ヲ見テ大将伊集院惣右衛門馬ノ鼻ヲ取テ返シ

『甲斐ナキ奴原カナ此所ヲ引退イテ何ノ面目アリテ人ニ面ヲ合センヤ返セ返セ』ト下知スレトモ乱レ立タル軍隊ナレバ辟易シテ耳ニモ更ニ聞入ス城中サシテ引取リタリ。惣右衛門モ今ハ叶ハズシテ引所ヲ忠長入道ノ先手凱歌ヲ作シテ此処ニ乗ジテ城ヲ攻破ラントスルヲ、忠長入道士卒ヲ制シ物具ヲ立サセ城ヨリ三町バカリ引退テ陣ヲ備ヘラレケル。

斯テ樺山権左衛門久高、柏原将監両大将早速忠長ノ陣中ニ参ラレケレバ忠長入道申サレケルハ

『此城ノ躰要害ヨロシク、力攻ニセンニハ士卒ノ手負討死多カルベシ。如何シテ攻落スベキヤ計リ申サルベシ』ト。

此時樺山権左衛門久高進出テ、

『仰ノ如ク要害能故力攻ニセバ士卒ヲ損ゼン事必定ナリ。申迄モナク候ヘドモ源次郎ガ不忠不義ハ天地ノ間ニ入ルベカラズ。譜代ノ主君ニ対シ奉リ弓ヲヒク事鳥類ニモ劣リシ志ナリ。サレバ此城ヲモ踏倒シテ直様都城ニ攻入リテ忠真ガ首ヲ刎ネ君ノ御鬱憤ヲ散ゼントコソ存ジ候。此城計リノ軍ニテナケレバ士卒ヲ損セン事如何ナリ我等思フ子細アリ城中ニ入リテ城ヲ明ケ渡ス様ニ申聞カスベキ』トテ権左衛門只一人平服ニテ城門ニ馬乗リス大音ニテ、

『樺山権左衛門久高城主伊集院惣右衛門エ申スベキ事アリ早ク城戸ヲ開ケ入ラスベシ。某一人ナレバ少シモ用心ニ及ばズ、只今門ヲ開ケヨ』ト呼ハリケリ。

城主伊集院惣右衛門是ヲ聞キテ存外ノ事トハ思ヒナガラモ久高一人ト言フ事ナレバ城戸ヲ開ケサセ本丸ヘ通シ対面ス権左衛門少シモ恐ルル色ナク脇目モ振ラズ本丸ニ通リテ

座ノ中央ニドット座シ、惣右衛門ニ打向ヒ申サルルハ、

『如何ニ惣右衛門其方主人忠真ハ我君御譜代ノ家臣ナリ、其上御氏族ナレバ其恩厚他ニ異ナルベシ。然ルニ忠棟入道幸侃奢ニ長ジ、恣ニ守護職ヲ望ミ且譜代ノ御主君ヲ毒殺ナシ奉ラント企ル条悪逆ノ程三族ヲモ絶タサルベキ処幸侃一人御手打遊サレケレドモ御仁心ヲ以テ源次郎其外家臣等ノ罪ヲ御宥シ遊バサレ本領迄モ安堵仰付ラレ候事有ガタクコソ存奉ルベキ処ニ忠真数代ノ御恩ヲ忘却致シ反逆ノ旗ヲ立テ国中ヲ騒動致ス条誠ニ禽獣ニ似ルトヤ言ワン。タトヘ源次郎不義ヲ企ルトモ、其方杯ナゾ諫言シテ御仁心忝ナク存テ奉ルベク処ニ却テ不忠不義ニ力ヲ添エ君ニ対シ奉リ弓ヲ挽キ矢ヲ発シ事天罪ノ程モ恐ルベシ。去ハ源次郎不忠不義ヲ企ルニハ渠等ニ従ヒ討死ナス時ハ忠義ニ一命捨シト思フベキナレド夫レハヨコシマ事ナリ。

君不義アル時ハ是ヲ止メ君用イラレザル時ハ諫死致シ或ハ其家ヲ退去スルハ古ヘノ道ナリ。是式ノ事ヲ其方杯モ存ジタル筈ニ同ク逆心ヲ進メタル事畜生ニモ劣リタル致シ方、武士ニ似合ザル条奇怪千万ナリ。早々此城ヲ明ケ渡ス時ハ命ハ得サスベシ。若シ逆ヲ取リテ籠城ノ存念ナレバ一時ノ内ニ踏倒サン事掌ヲ返スヨリモ安シ。夫共士卒ノ干戈ノ為ニ苦シム事ヲ思フニ依リテ斯利害ヲ解聞スルナリ』ト申サレケレバ、

惣右衛門一言ノ返答モナク閉口シテ見エケレバ権左衛門久高モ長居無益ナリ。サレバトテ座中ヲキット見廻ハシ静々ト城ヨリ出デラレケル。其有様イカナル鬼神ニテモ面ヲ向フベキ様ナク見エニケリ。久高本陣ニ立帰リ此ノ旨ヲ図書頭忠長、柏原将監ノ両将ヘカ様カ様ト申サレサレバ両将モ甚ダ樺山久高ノ勇気才智日輪ヲ離レシ事感シラレケル。

然ルニ三大将ハ備ヲ立城中若開城セザル時ハ忽チ城ヲ乗リ破ラント控エ居ラレケル。斯クテ城中ハ大将惣右衛門、滝聞平三郎ヲ呼テ

『今朝城外ニテ寄手ニ打向ヒ無二ノ合戦致シタル処ニ敵多勢ナレバ終ニ叶ヒガタク存ル間城中ニ引揚タリ。然ルニ只今樺山権左衛門城中ニ入テ申サル処理ノ至極ト存ズル。然レドモ我々賤ヨリ源次郎殿ヨリ大将ノ事マデ許サレシ者ガオメオメ降参センモ武士ノ本意ニ背クナレドモ始終此城ニテハ叶ヒガタク、併シ一命ヲ全フシテ此所ヲ遁レ源次郎殿ノ御先途ヲ見届クベシ此儀如何思ハルルゾ』ト申シケレバ滝聞モ尤モ然ルベシト同意シテ六月二十五日城中士卒ヲ引具シ城ヲ明渡シケレバ三大将ハ城ヲ乗取リ、勝鬨ヲ行イテ則チ寺山田四郎左衛門久兼入道常雲ヲ籠置ケル。

夫レヨリ直チニ三大将ハ末吉ニ向ヒ鉄砲打掛ケ攻立ケレ共山田、恒吉ニ手配リシテ城中ヨリ一人モ出デザル間ハカバカシキ軍モナク、恒吉、松山ノ間ニ備ヲ立テ源次郎忠真ガ都城ノ後詰セント押エラル。山田弥九郎有栄ハ廻城ニ手勢ヲ引卒シテ是モ都城後詰ノ為控ヘケル。（以下省略）

槻野城の戦

さて恒吉城を陥落させた軍は、その勢いに乗じ末吉城もすぐ陥そうと攻めかかったが、末吉城では亀が甲羅に身を引込めたように閉ぢ籠ったので手が下せない。さしもの勢いづいた攻手も攻撃ができないとあっては、ここはひとまず引揚げとなり恒吉城と松山城の中間辺りに備えを置いて警戒に当たった。

そこで柏原公盛は、慶長四年七月三日松山に帰り、樺山久高は志布志に帰って城を守った。

ところが伊集院忠真は日高静鎮と中村吉右衛門を派遣し松山を攻略しようとしたので、樺山久高は松山勢を救援しようとして、兵を率いて松山に行った。

忠真の軍はこれを知ったので、志布志の虚に乗じて志布志領槻野城を急襲した。

槻野城主若松石見守宗右衛門は兵をあげて戦ったが利なく、七月十四日には城主戦死、遂に槻野城は陥ちた。

そこで久高軍は返して忠真軍を破り、槻野城を奪回した。

忠真軍は松山城の攻撃にかかった。しかしながら柏原将監公盛はよく防戦し、木脇喜兵衛等が盛んに鉄砲を打ちかけたので忠真軍は兵を返した。

槻野城跡

槻野城跡は月野下岡にあり、今は小学校が建てられている。

若松石見守の墓は護岸寺境内にある。塔銘には、

「為二峰屋冒林上座一、慶長四年己亥七月三日」とあり、

墓碑には宗安道慶信士若松宗右衛門

とあり共に戦死するもの二十三人であったといわれている。

註＝（若松石見守が白馬に跨り城を出て射場の坂をでる時、敵の流れ矢に当り馬諸共に戦死したといわれ、又その血潮のため、射場の泉は血に染ったということである。その後盆の十四日は泉が紅になり、白馬が出ると村人は伝えた。）

庄内軍記より抜萃

。恒吉の城開退の事

山田城没落慶長四年六月二十三日なり、同日島津図書忠長樺山権左衛門久高、柏原将監は伊集院宗左衛門が楯籠る隅州恒吉城を取囲て翌二十四日迄混攻に責ければ抱難くや思いけん、同二十五日の夜宗右衛門を初として皆悉く城を捨、夜陰に紛れ忍ひ落ち都城へそ退きける。則寺山四郎左

衛門尉久兼入道常雲、恒吉の城に入替る。夫より直に味方の勢末吉の城を打囲んて鉄砲を揃て射たりければ城兵敢て出合ねは墓々敷軍もなく恒吉松山の間に備を立都城の後詰をそ儀せられける。

。日高、中村月野を侵す事

六月末つかた忠真が兵共松山の城に寄るとも聞へ又は志布志に寄るとも謳哥の説区々なり、是に依而松山には柏原将監、志布志に樺山権左衛門尉久高、用心怠る事なくして日夜警衛せし処に七月三日忠真が臣日高静鎮、中村吉右衛門尉、軍兵を引具して松山の城に向て鉄砲を放ち掛攻寄せんとする支度なり、故に志布志より軍兵を分て松山城に加勢せり、然処に敵の軍勢慮らさるに引違て志布志の月野を攻破り一戦に勝利を得て速に引退く、味方に桑畑五郎兵衛、鎌田伊与守以下数輩討死したりけり、松山の城中には木脇喜兵衛某鉄砲の達人にて敵を射る事多き故此れに恐れて敵の勢左右なく近付得さりしとぞ。

。恒吉城開退後のこと

異本曰、恒吉城開退の後は寺山四郎左衛門入道常雲彼城を守護すと云り、又久高、忠長、柏原末吉の城を攻て敵勢アマタ打とり、恒吉松山に控えて都城の後巻を定む、山田弥九郎有栄も廻城に勢を控て是も後巻と定む云々。

家康の作戦指導と予言

「庄内軍記」、「島津国史」、「西藩野史」夫々家康と喜人久正の問答を記してあるが西藩野史の分が最も真に迫っているので取り上げることにした。

忠恒公喜入大炊助久ニ捷書ヲモタラシメ六月二十四日内府公ニ告グ。久正伏見ニ至リ（七月十日）忠真十二城ノ図ヲ献ス、命ニ由テ久正城ノ広狭地ノ嶮易川ノ浅深詳ニ是ヲ説ク、公問テ曰ク。

「忠真カ兵数幾クソヤ」答曰「凡八千ナリ」又問フ「今年ノ作毛城中ニ取ルヤ、農民モ亦城中ニアルヤ」久正曰「作毛恒吉、山田ハ忠恒ニ属シ、且余ハ城中ニ取ル、農ハ妻子ヲ卒ヒ城ニ入ル」公又問フ「粮及塩他邦ヨリ城ニ入レンヤ」答曰「既ニ路ヲ断チ入ル事アタハス」。於是公曰「汝帰テ告ヨ、敵地利ヲ得タリ、急ニ攻ハ人ヲ損セン、農ハ食ヲ山野ニ求ムルモノナリ、既ニ城ニ入ラハ忠真カ粮ヲ費サン、来年三月ニ至ラバ粮ツキテ敵自ラ敗レン、忠恒壮年事ヲ急ニストイフモ龍伯宜シク之ヲ制セヨ」久正頓首シテ回章ヲ得伏見ヲ出テ（七月十六日）国ニ帰リ是ヲ反命ス、龍伯公嘆シテ曰ク、千里ニシテ坐ナガラ勝敗ヲ知ル、良将トイワザルベケンヤ。

（註＝この時島津忠恒の無理攻めを諌め、農民も籠城しているから、来年春まで、兵粮攻めにしながら待てば自然に落城すると予言した家康はさすがに「鳴く

まで待とうホトトギス」である。

庄内の乱は結局慶長五年三月十五日伊集院忠真降伏によって終結した。喜入久正は第二代財部郷地頭となった。）

第九節　浅井、朝倉伝説

一　朝倉姓八木氏（日下部姓八木氏）

日下部姓八木氏は但馬国造日下部氏の後裔であるといわれる。但馬の豪族で養父郡八木谷から起こるとされている。

正統朝倉姓（日下部）八木氏系図によると、

宗高―高清―高景―広景（越前朝倉）……敏景
　　―安高（八木）―高吉―家高―泰家―重家―
　　―家直―高重―直重―重秀―頼秀―重頼―宗頼―貞直―
　　―直信―信貞（秀吉に仕え、慶長八年死）

但馬国（養父郡・八木）

家紋は三木瓜である（註＝越前朝倉敏景は有名な戦国大名で「朝倉敏景十七ヶ条」の家法でも知られる。）

梶ヶ野朝倉系図によると、

藤原氏改日下部姓となり孝徳天皇の子有馬皇子の子表米皇子に始まるとなしているが日下部系図にこの朝倉氏の有馬皇子出自の誤りが指摘されている。幕紋は双鷹羽となり正統系図と異なっている。

正統系図とほとんど合わないで、一致する所は一線部分四代のみである。

前省略—清村—高綱—光家—光弘—光忠—朝綱—
—光保—泰家—重家—家直—高重—重義—重嬌（八木豊前守、八万石北庄内郷家御領時家臣）
—重香（洞庵斉依世子早世中郷弁済使二男猶子人）—重救（此代に梶ヶ野住）—
—重雉—重稙—重直—重長—重治…以下略

以上でもわかるように正統朝倉系図と梶ヶ野朝倉系図とはくい違いが出ている。正統家信貞が秀吉時代とすると高重より八代目であり梶ヶ野では高重から八代目は重長であり、これを北郷島津家系図と対照してみると、

重嬌—重香—重救
北郷忠相—忠親—時久

とだいたい対照するようである。

浅井　朝倉姉川合戦により滅亡が元亀元年（一五七〇）である。その落武者だとすると重長前後に都城に移住して来なければならないことになる。ところが梶ヶ野には重長の四世前に移住し、更に重政の（六世前）祖父の代に北郷家に仕えているからここでは姉川以来の落武者という俗伝とは全くくい違っている。

二　平姓八木氏

平姓八木氏系図によると、八木氏初代は頼朝から但馬国八木郷に知行された。

但馬考によると「上古平氏の人八木の地に居りしと言い伝ふるは此の公文職なるべし。鎌倉の時日下部氏朝倉高清入道は平氏を亡ぼしてその次男をここに置き子孫八木氏と称す」とある。

第二代八木盛定は但馬守から土佐国波多之荘下向とあるから但馬考はこのことを物語っているのであろう。

さて、その二代盛定の時日州清武下向、末吉の内六町知行とある。末吉の内というのがはっきりしないが、既にこの時梶ヶ野は八木氏の知行となっていたのであろうか。

二代盛定の弟は小林、志和池等にも移り、現在志和池に八木姓があり、また中郷村にもある。

八木（平）光盛が頼朝からなぜ知遇を受けたか、それは平治の乱に頼朝の父義朝が敗軍した時平清盛の弟頼盛の母池の禅尼は清盛に乞うて頼盛の手中に入った頼朝の一命を救うた。その恩義に報いるため頼盛及びその子光盛は頼朝の庇護を受け、滅亡の厄を免れ優遇されたという。

平清盛
八木初代2
平頼盛―光盛―盛定―盛重―盛武―盛継―盛親―…
3　4　5　6
中略―15代信貞―16正信―17豊信―18元信

1　光盛は八木氏初代である。従二位左少将号八条池馬頭。後鳥羽院御宇建久五年甲午（一説に元久四年）鎌倉右大将頼朝公御下文、以但馬国八木郷知行在名平八木居宅。

2　盛定（但馬守、伊予守、号八木入道。依但馬国召列候而下名字之武士、宅間、渋川、柿本、竹山、皿良、尾辻、沢田、篠田、牧、吉原、杉山、木之下右之衆召列先四国土佐国波多之荘下向其後日州清武下向、末吉、岩川之内六町知行。）

3　盛重（盛定の娘婿養子、山名重村（源氏）の二男）

5　盛継（榆井頼仲の討伐に功あり。）

6　盛親（天授三年九州探題今川了俊と戦い偉功あり日州四ヶ所二百五十余町知行）

以下代々十五代信貞まで日州四ヶ所知行。

15　信貞（鹿児島知行九町三反）

16　正信（真幸吉田の地頭職）

17　豊信（大阪御蔵奉行、右筆）

18　元信（御勘定奉行、谷山錫鉱開発）

以上のように平姓八木氏は薩藩でも表街道を歩いている。それに対し梶ヶ野朝倉姓八木氏は裏街道の隠田集落を形成している。

結局梶ヶ野朝倉氏が日下部姓八木氏であるとすれば平姓八木氏を曽つて但馬から追放した系統であるわけであるが、以上のような資料ではどうも日下部姓八木氏とも結びつかない点も多い。

平姓八木氏二代盛定が末吉岩川之内六町を知行されたのが岩川梶ヶ野だとすればむしろ平姓八木氏に近くなってくる。この点今後の考証にまつ外はない。

註＝三州諸家史（三州郷土史研究会編）参照

三　浅井、朝倉伝説

梶ヶ野の朝倉姓八木氏の系図、鎧など数々の家宝等からして朝倉姓八木氏が余りにもその由緒ありげな家系のようである。梶ヶ野部落はほとんどの家が八木氏を名乗っているようである。その中心になる家だけ朝倉氏を名乗っているという。

その朝倉家の鎧などは室町時代の作であろうと専門家は鑑定している。今後更に考証して出目について正確に知る日の早からん事を祈るものである。

梶ヶ野朝倉系図がかりに重救以来正しいとすればおおかた庄内の乱に当たり、伊集院方になり敗れて中郷から梶ヶ野辺りに来たのではないかと推論されるが町内折田代小浜文書に伊集院忠真の小浜氏宛古文書が発見され、だいたいこの見方が有力視されて来た。

なおまた浅井部落は信長に亡ぼされた浅井の残党だという伝説がある。近くに朝倉姓があり浅井部落があったりすると浅井、朝倉連合の隠田集落のような錯覚に陥るような気もする。浅井部落には花房姓もあり、近江国の地方の人の話では現に近江国には花房姓もあるとのことである。中郷にも花房姓はある。

ちなみに姉川合戦は元亀元年（一五七〇）織田、徳川、羽柴の連合軍と浅井、朝倉の連合軍とが戦い、浅井、朝倉軍は敗れた。

しかしながら浅井、梶ヶ野は姉川合戦後の移住であるとは前述のとおり考えられない。神掛部落も梅北の嫁坂から逃げて来たという伝説が残っており、やはり梶ヶ野、神掛、浅井の三部落の人の祖先の何人かは庄内の乱による伊集院方の衆が梅北砦の陥落と共に三部落に落ちのびてきたと考えられる。

梶ケ野附近図

第十節　中世の畜産

一　福山野牧

1　福山野牧と恒吉

天正二年藩主義久に対し肝付省釣は遂に帰服して大隅半島は初めて静穏となった。

天正八年義久の命で中隅福山野に馬牧を創設した。

「三国名勝図会」によると次のようにある。

「福山野牧馬苑は福山郷廻村、佳例川村及び隣邑敷根、末吉、恒吉、牛根の四邑に係る。周廻十里十六町余本藩馬牧中最も広大なるものなり。その他山林郊原に連りて形状険夷一ならず、馬甚だ多し。常に良馬を産す。毎年八月福山郷及び近邑の民夫を役して駒を取る（中略）この牧の権輿は貫明公（義久公）嘗って国分村より原野を遠望し給い、馬牧を置くに甚だ佳なりとて、即ち分界を定め給い、周囲に馬除、堀垣等を構えて鹿屋邑の高牧野より馬を移して畜牧せらる。高牧野の別当なりし、松元、谷山、山下、黒岩の四人馬に随ふて移れり。実に天正八年庚辰四月十四日卯の刻より開かる。この事慶長九年の旧簿に見ゆという。その後馬繁殖して甚だ盛なり。凡そ駒を収め取る時は野牧の焼印を用ゆ。此牧の焼印は三星なり。これこの牧馬を磯崖三ツ山と言う所へ始めて置かれし故なり」

なお福山邑の総鎮守宮浦神社には毎年この牧馬一頭を献じていた。

「名勝図会」にその由来を記して

「貫明公福山野牧の馬追を臨観され給いし時、当邑の地頭山田越前守有信入道理安を随えてこの社に詣で、社司を召して牧馬の繁昌を祈らせ給いこの年より馬一疋を寄進せらる。…（以下略）」

要するに山田有信は恒吉の領主でもあり、福山牧には恒吉も含まれていた。

2　福山野牧の小紫

関ヶ原の際に福山野牧より出た小紫が義弘の乗馬として敵中突破をした。

そして船出した義弘を追って海をおよぎ、また引返して遂に神社の柱に頭を打ちつけ死んだと伝えられている。

二　末吉野牧

1　志布志烏帽子野牧

天文年間アラビア種の輸入について義久のころにまた奥州南部から良種馬を入れられた。志布志烏帽子野牧がこれである。

「三国名勝図会」に志布志烏帽子野牧の由来が書かれている。志布志笠祇岳の絶頂に笠祇大明神があり牧神とした。奥州一の部という馬の名所から駒を下した所が福島領高松の烏帽子瀬に飛び揚り、この牧を烏帽子野牧と名づけられたという。

2　末吉野牧

志布志烏帽子野牧の牧馬を末吉に移したのは元和三年である。

「三国名勝図会」によると

「末吉野牧馬苑は梶ヶ野村にあり、周廻五里二十町余、南は恒吉に係り西は福山に境す。この牧は元和三年八月志布志笠祇岳の烏帽子野牧を移せるものにて、牧邑の名は旧に仍て烏帽子野と号す。（以下略）」

すなわち末吉野牧は烏帽子野牧ともいうようになった。

また寛永元年末吉野牧に勧請した志布志笠祇（笠木）岳の本社からの牧神は岩川村折田代に設けられ笠祇神社という。末吉野牧は天明元年福山野牧と併合された。

第十一節　関ヶ原の戦

豊臣秀吉の死後、徳川家康と石田三成によって天下の主導権が争われたのが関ヶ原の戦である。

慶長五年九月十五日天下を二分する関ヶ原の役は東軍約十万、西軍およそ七万五千であった。大勢はその日正午までに決し、戦は八時間で終った。

この戦い島津義弘は西軍に加わり、さんざんな敗北となり、家康の本陣に向かって進む敵前退却、伊勢路を経て手勢わずか四、五十人に減り、血路を切り開きようやく帰国した。

島津義弘は帰国後桜島に蟄居して家康の処分を待っ

た。西軍の諸将は斬罪、領地削減等の厳罰を受けたけれども、島津氏は和戦両様の構えで臨み、井伊直政の周旋と本田親貞、新納旅庵、文之和尚等の必死の運動によって義弘、忠恒の赦免及び領国の安堵を得たのである。

この役に大隅町関係では誰が参加したか明らかではない。ただ敵中突破三十九人の一人の須田伝吉に恩賞として百石を与えられたと末吉人上別府市左衛門文書に書いてある。須田伝吉は末吉郷に関係があるのであろうか。

また岩川領主伊勢貞昌の兄伊勢平左衛門貞成が関ヶ原の役で大いに活躍した事は有名である。

なお、もと恒吉に関係ある山田有栄は廻城主でもあったがこの役ではまた特別な働きをしている。すなわち大坂伏見にいた義弘夫人、忠恒夫人の両人救出に山田有栄等四十余人が活躍したのである。

この戦の後江戸城に島津方は何人か人質を出した。その一人に忠恒の妹千鶴もいた。

慶長十九年八月二十八日島津家久（忠恒）は千鶴が江戸で人質になっていることをあわれみ、志布志郷槻野村二千二百四十石を与えた。千鶴は初め伊集院忠真の妻になっていたが忠真を島津氏が誅してから島津宗家に引き取られていた。

なお大隅町折田芝ん迫の東条氏の祖先は関ヶ原の戦の軍功により備前長船、長光をもらったと伝えられている。

第十二節　投谷八幡文書

庄内の乱も一段落し、関ヶ原の役も一段落し、関ヶ原の役では敗北したにも拘らず領土を安堵された藩主は慶長七年四月（卯月）二十六日当地にも領内巡視に来たらしい。

島津義久と忠恒は近臣十三名とともにその日恒吉郷投谷八幡に参詣し、八幡法楽に詠歌（懐紙各一枚、色紙一枚宛）を奉納した。これらは投谷八幡の宝物として二重箱に入れられ、今日に伝えられている。

結局庄内の乱の恒吉城の戦、慶長四年六月より三年後、関ヶ原の役慶長五年九月より二年後に義久並びに忠恒は恒吉投谷八幡に参詣し、平和回復を慶賀し、感無量であったであろう。

次にその（梶紙）歌をかかげると（鹿大五味先生より資料解読提供）

詠夘花盛久和歌
法印龍伯（註＝島津義久）
松か枝に多知真志利
太留夘能花農佐賀理
波千止勢婦辺喜登楚
桟毛布

詠夘花盛久和歌
少将忠恒（註＝後の島津家久）
うのはなのさけるさかりも久かたの
月のひかりやい路をそゆらむ

詠夘花盛久和歌
沙弥抱節（註＝伊集院下野守久治、初代財部郷地頭）
夘のはなのかきほつたひはさやかなり
空にしられぬ月乃夜な〳〵

詠夘花盛久倭歌
沙弥休心
屋満さと越なくさめとてや夘乃はな濃
佐加李のかけのひさしかるらむ

夏日同詠夘花盛久和歌
左衛門尉久高（註＝志布志地頭樺山久高恒吉城落城させた殊勲者）
伊やつきにさきこそにほへ夘乃はなの
かきねをとをミ志け里相つゝ

夏日同詠夘花盛久和歌
大膳亮忠俊
よろ川世もへぬへきものかあまてらす
月にまかひてさける夘の花

夏日同詠夘花盛久和歌
紀伊守国貞（註＝比志島氏）
種をたれなにとうへけむとくをそく
咲てかきねにつゝくうの花

夏日同詠夘花盛久和歌
左衛門尉忠通
伊く堂ひかゆふへの色をよそならむ
夘の花さける陰乃宿利は

夏日同詠夘花盛久倭歌
兵衛尉宗親
伊津迄乃なかめならまし白妙に
夘乃花佐希る里濃け志きは

夏日同詠卯花盛久倭歌

大炊助久正（註＝第二代財部郷地頭喜入氏）

一遍より八重にさきそふ卯のはなの
えたもたハゝの雪と見るまて

夏日同詠卯花盛久和歌

左兵衛尉通武

さ無からて雪とそ見ゆる卯のはなの
さかりになるゝ暮かたのそて

夏日同詠卯花盛久倭歌

左衛門尉友知

にほひきてさかりしらする卯のはなの
色より明るけふことのそら

夏日同詠卯花盛久倭歌

左衛門尉豊信（註＝八木氏、右筆）

日かすふる雪かとそみるうの花の
咲てかきほもうつむはかりに

詠卯花盛久和歌

沙弥宗察

しけりそふかきほに見ゆる卯のはなの
かハらぬ色をとし〳〵にして

詠卯花盛久倭歌

沙弥興進

と起しらぬ由喜とそ見ゆる卯のはな濃
さきて日かすの津裳る垣ほは

慶長七年卯月二十六日八幡法楽当座

寄神祇祝　岩清水なかれたえせぬ神慮
ゆくゑを守れわか国の人　龍伯

首夏風　誰かために夏かへるまて一もとの
はなをしかせの吹残すらん　忠恒

夕立　遠山や入日のかけハさしなから
かたへにかゝる夕立の雲　忠俊

夏月　志はしたゝ惜に月はやすらハて
明やすき夜ハうち見ならすや　休心

早苗　村雨のはるる行衛に里みゑて
なひく早苗や露こほすらむ　宗察

郭公　ほとゝきすいつちゆくとも暮かたの
やとは軒はの松を忘るな　国貞

海路　奥津なえにくるまに〳〵なかめやる
雲こそふねのよするなりけれ　与進

旅恋　打そひてある時たにもあかなくに
たひにしあれは猶そ恋しき　友知

後朝恋　かへるさ乃あしたハ身をも別る哉
馴ぬる人に心のこして　忠通

納涼　くれかたに涼しきかせをもよほして

友とこそなれ窓のなよ竹　久高
祈空恋　ゆふしくれ神に祈をかけてたに
浅きえにしハはかなかりけり　宗親
鵜川　山きは乃蛍とみえて河を遊く
ひかりやとも須鵜ふね成らん　抱節
古寺　おりゐつゝ雲のそこなる古寺ハ
思ひやるたにさひしかるけり　豊信

覚

龍伯様
一御懐紙壱枚
忠恒様
一同壱枚
一同拾三枚　但御家中
龍伯様
一御短冊壱枚
忠恒様
一同壱枚
一同拾壱枚但御家中
一右入箱壱　但真塗浅黄紐綾不洗包緒付環練繰緒有
一右外家箱壱　但桐木色塗浅黄木綿不洗包真田緒有
右者、恒吉投谷八幡社頭ニ被下遊ニ御奉納一置候処、及ニ累年一、虫附又者致ニ破損一候付、此箱相繕、二重箱ニ入付、相渡候間、年々致ニ虫干一、樟脳入附、社頭江致ニ格護一、大形無之様ニ座主并頭取社人方江屹可ニ申渡置一候、　以上

享保廿一年辰四月二日

寺社奉行所
恒吉　曖中

以下略

「史料」

一、投谷八幡神社棟札

鹿児島県大隅国東囎於郡恒吉村　大谷字宮ヶ原五五二六

一、祭神仁徳天皇、応神天皇、神功皇后

一、由緒

(一)　和銅元年八月十五日鎮座ト申伝フ

(二)　往古肝付家代々崇敬之社而候由ナリ。中古龍伯公御取持被成御法楽ノ御短冊等有之候、尤肝付家ヨリ金銀ノ仏像七枚献納有之候処、此以前廃仏ノ節民事局ヘ御取揚相成候、同社棟札有之沿革ノ参考ニモ相成ニ付、左ニ記載仕候。

一、棟札

(一)　隅州小河院恒吉投谷八幡宮社壇一宇、天文廿二年癸丑八月十三日、大檀那伴棟梁小主君良兼並御隠居前河内守兼続今沙弥省釣、息災安体云々、文当造営主地頭伴家加賀守兼吉当大法師信淳（下略）

(二)　奉造立大隅国小河院恒吉投谷八幡地主社一宇、右意趣

者信心之大丹那良兼公息災云々、殊当丹那伴兼守武運長久云々、小僧都宥海、永禄八年八月吉日

(三) 奉再興投谷八幡御宝殿一宇（中略）北郷主君藤原氏朝臣左金吾時久入道一雲斉、同弾正少弼忠虎領、此地改右社新造営之。天正十一年癸未仲冬廿八日（大宮司兼清法筵比丘敬白　座主権律師典海）地頭小杉治部少輔頼栄、本願主大野和泉守盛次（大工木之屋隠岐守守儀鍛冶津曲丹波守兼辰）

(四) 投谷正若宮八幡大菩薩舞殿一宇、慶長九年九月廿六日当地頭寺山四郎左衛門、藤原氏久金、大願主源氏清、次座主権大僧都典海誌之。

(五) 寛永三年丙寅八月五日宝殿再興、大檀主藤原家久並忠虎、御息災云々、当造立営主本願主先地頭寺山四郎左衛門尉久金、同次地頭平田安房介宗衡、右肯趣子孫繁昌云々、当地頭伊勢美濃守。（以下略）

二、鹿大五味先生提供史料

（重富肝付兼冬氏所蔵文書）

恒吉

投谷八幡宮

聖主天中天迦陵頻伽声、哀愍衆生者我等令敬礼、大檀那大梵天王、大願主帝釈天王、夫社檀造立者、奉輪聖皇天長地久故、故殊者大檀越伴、棟梁当主君良兼幷御隠居前河内守兼続、令沙弥省釣息災安躰、身心賢同、子孫繁昌、寿福永保、武運長久、弓矢勝利、怨敵帰伏、凶徒退散、心中所求、如意満足、而又当造立営主地頭伴家加賀守兼吉、当宮司大法師信淳、惣者与力助成信男信女、各今忽領、此八幡大芳積善余憂、現世来生願望令成就、円満為如指掌者也矣、法眼律誌之。

遷宮師権小僧都

大勧進

大願主伴家

天文廿二年癸巳八月十三日

大願主　当座主信淳

大工　江口弥左衛門

鍛冶　藤原武紹

八幡座主　吉祥院

神主　吉岡兵右衛門

第十三節　伊勢貞昌

一　伊勢家の由来

相国平清盛の弟池大納言頼盛に出たその子孫の一人が伊勢を以て氏としたという。そして世々幕府に仕えた。

その支族と称する有川氏は薩州に住み治部貞則は日新公に仕えて老中に任ぜられた。

貞則には三子がいて長子を長門貞清と称して宗家伊勢兵庫頭貞景に願って伊勢氏を称した。

（註＝此の時伊勢氏になるため幕府側の伊勢家に運動したくだりは歴史家にはよく知られている事実である。家の尊厳化のため島津氏自身も前述のように源氏を称したり、また藤原氏を称したりして気を使ったと同じように、いわゆる薩摩の伊勢氏も奔走したといわれる。）

次子が雅楽介貞真で薙髪して任世と称し又後伊勢氏に復った。義弘に仕えて家老であった。第三子が四郎左衛門重勝と称して東郷氏に養われた。

伊勢貞真に二子がいて長子が平左衛門貞成である。次子を弥九郎といい、すなわち兵部少輔貞昌である。

二　伊勢貞昌の武功

天正十四年冬十月島津氏が九州征伐を行った際豊後攻めに伊勢貞昌は軍功があった（翌十五年三月十五日豊後攻めの際）。

なお義弘公に仕えた伊勢貞真並びに伊勢貞成は天正十五年には国老となった。

天正十八年には秀吉は大兵二十万を発し北条氏政を征伐した。島津久保はこれに従軍し伊勢貞昌も従った。

慶長三年九月二十七日朝鮮征伐の際藩主忠恒に従い伊勢貞昌は活躍した。同年十月一日明軍大将董一元と伊勢貞昌、伊集院忠真、北郷三久等は戦いこれを敗走させた。島津忠長、樺山久高、寺山久兼等大いに明軍を破り、明兵死者八万といわれた。明軍はこれ以来島津におそれをなし、ために日本軍の撤退作戦は非常に有利に展開することになった。

慶長三年十二月十八日樺山久高、伊勢貞昌等五〇〇余人は南海島から帰還開始、二十日には皆唐島に集結できた。慶長四年庄内の乱に当たり忠恒公に従い貞昌は行動を共にした。六月二十三日、山田城陥落。

六月二十七日には山田城陥落の褒賞がなされ、その時も貞昌は軍略に加わった。

慶長五年島津方は関ヶ原の役には西軍となり敗れた。義弘公の敵前（家康本陣）突破の退却に当たり、終始、兄伊勢貞成は活躍し、駒ヶ峠では貞成は将を装って公は衆にまぎれて通過、大阪に出るまで幾多の艱難辛苦をな

め、遂に三十九士に守られ脱出に成功した。

慶長九年伊勢貞昌は国老となった。江戸詰家老を勤め島津の名臣（名大夫）といわれた。島津氏は岩川の五十町の地を与え、岩川は伊勢氏の領土となった。

（註＝後島津家久の子貞昭が伊勢家の嗣子となり、中之内を加増され岩川全部が伊勢領となった。）

伊勢貞昌は実に文武を兼ね備えた絶倫の傑物で、典礼故実の奥儀を極めた人物で薩藩の江戸詰家老であった。

その当時各藩の家老中最も卓越していたので上下の尊敬と信頼とをうけ老中方も典礼故実について諮問師事せられたので幕府及び閣老方は諸国大名以上の格式を以て優遇した。

徳川氏は島津忠久以来、薩隅日三州に多年実力を培養せる外様大名であって島津氏を恐れ、その勢力を殺ごうとして貞昌を伊予の宇和島十九万石の大名に封じようとしたが貞昌は固く辞したので如何ともすることは出来なかった。その人物の清廉、非凡高邁の程が察せられる。

三　伊勢貞昌の上書その他

伊勢貞昌は光久公の時代、光久公に七ヶ条の上書を奉り、藩主としての心得等を示した。

寛永十六年己卯一条から七条にわたる上書は実に薩隅日三州太守としてあるべき、なすべき事などが懇切丁寧に書かれている。（「西藩野史」百七十頁）貞昌は文之和尚の門弟である。

（文之和尚は日向福島の出身で、桂庵禅師の高弟の中最高弟子である。文之は朱子学の大家で四書新注の文之点を書き、藤原惺窩がこれを盗用して天下の朱子学者となったといわれる。）貞昌はこのように武人としても、また学者としても文武両道に精通していた。

宮崎博物館、鹿大その他に伊勢文書は多数あり、その大部分は伊勢貞昌の関係文書である。「財部町史」、「庄内地理志」その他にも載録されている。

第十四節　月野氏について

大隅史談会発行「大隅」第四号に書かれた吹上町宇都為秀氏の「普宅和尚について」の論文によると、月野氏の事がでてくる。大隅町月野と関係があるのでその一部をここに資料として掲げてみたい。

『隅州より薩州伊作郷に移住した人の内その子孫に普宅和尚がある。

「伊作郷土史」に次のようにある。

「薩州伊作庄内入来村小禄山西福寺の月野氏の祖先普宅和尚の開基せられる所にして水じんの由緒を以て名高し、月野氏はその先大政大臣実頼公の弟野後家忠義公より出ず。その後孫日州諸県郡に下向し、志布志月野村に居住し、遂に領知す。故に月野を以て家号となす。村民これを尊んで月野殿と称す。世々住むこと久し。爾来伊作家に奉仕し、領知及び邸宅を伊作荘に賜う。伊作川より北二十町川越、尾上、竹之内、道園の四門なりしと見ゆ」。（中略）

なおこの普宅和尚の子孫に医学博士月野止流氏が吹上町に開業しておられ、伊作月野家は三軒あって本家は住宅屋敷を売り払われ、他所に移住されてその家系を知る文書も現在居所不明のため知る由もなき有様である。水じんの由緒は現今に至るまで歴然と文書も遺物も残存しているという。

月野氏は吹上町内旧永吉村にも数軒あって、同家には系譜等保存され、普宅和尚も記載され、あるいは永吉の月野家がその子孫かとも察せられ、従来、伊作家と信じられて来た所、あるいは何かの都合で文書系図が永吉月野氏に譲られたのではないかとも考えられる。

旧永吉村も日新公以来伊作領主の領地であった関係から、後世月野家が分家移住されたものかと思考されるし、共に隅州月野村より移られた子孫であると思う』。

以上の文でわかることには月野氏は太政大臣藤原実頼の弟野後家忠義から出ていて月野殿と呼ばれたという事である。

第十五節　伝　　説

神掛伝説

庄内の乱の時、永野某が中郷嫁坂から神掛に落ちのびた。

神掛の禅宗寺に這入ったのが十二月大晦日であった。ところでその住職を斬殺したのでそのたたりが後で出たといわれる。

永野氏は一〇〇年から二〇〇年の間に火災に合い、焼け永野氏の系図も焼けた。天保以前のことといわれる。福吉栄之助の話によれば禅寺の跡を掘った時にぎりめ

しの形が残っており、それがこわれた。

火事は彼岸の入りの火であったので彼岸講を起こし、そばを食べるようになったといわれる。

（註＝神掛の地名由来は末吉世貫大明神のカギを出してカギ引をした。かぎかけから神掛となったといわれる。大正時代に入角から神掛は別れた。）

神掛辺りの伝説に梅北の嫁坂から逃げて来たということがある。中郷村にも花房姓あり、八木姓もある。浅井、菅牟田、梶ヶ野地区は庄内の乱の十二砦の一、梅北城の陥落により中郷から移住して来た隠田集落ではなかろうか。

神掛の永田氏等の墓地にはただの百姓とは思えぬ相当な家柄を思わせる風の墓がある。

この地区は落武者の隠田集落を思わせる地形、集落である。やはり伝承は伝承として伝わっているだけに何かがあると思う。落武者であればあるほど正確な資料もなかなか発見しにくいわけで、ことに浅井、菅牟田部落は火事にも会うているようで尚更である。